盾の勇者の成り上がり
13
アネコユサギ
Aneko Yusagi
MFブックス

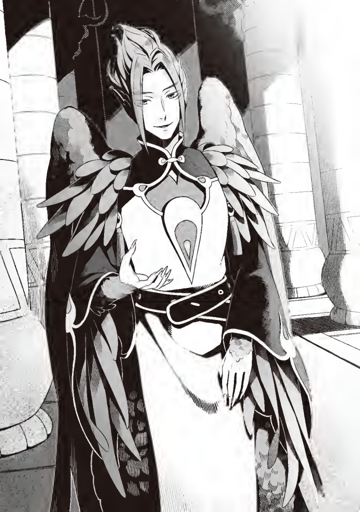
100

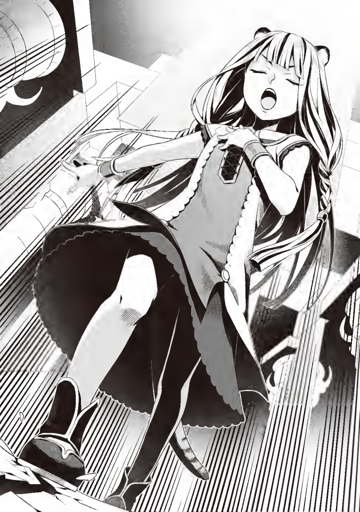
盾の勇者の成り上がり 13

アネコユサギ
Aneko Yusagi

人物紹介
盾の勇者の成り上がり ⑬
ジャラリス
ラフタリア
岩谷 尚文
フォウル
ヴァルナール
武器屋の親父
サディナ
アトラ

「衣服の類は丁寧に準備されていたから
着替えましょう」





盾の勇者の成り上がり⑬
アネコユサギ
Aneko Yusagi
MFブックス

1%　伝票No 6050中4

人物紹介
盾の勇者の成り上がり
ラフタリア
岩谷 尚文
フォウル
ジャラリス
ヴァルナール
武器屋の親父
サディナ
アトラ

「衣服の類は丁寧に準備されていたから
着替えましょう」

盾の勇者の成り上がり 13

アネコユサギ

MFブックス

1%　位置No 6050中7

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、配信、送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。また、本作品の内容を無断で改変、改ざん等を行うことも禁止します。

本作品購入時にご承諾いただいた規約により、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

本作品を示すサムネイルなどのイメージ画像は、再ダウンロード時に予告なく変更される場合があります。

本作品は縦書きでレイアウトされています。

また、ご覧になるリーディングシステムにより、表示の差が認められることがあります。

目次

プロローグ　人員分担
一話　前払い
二話　来訪伝達
三話　シルトヴェルト来訪
四話　獣王の盾
五話　ハーレム
六話　陰謀
七話　真なるシルトヴェルトの民
八話　戦いの矜持
九話　獣化
十話　勇者の配置
十一話　問題のある名工

十二話　水竜の斡旋
十三話　クテンロウ革命派
十四話　桜天命石
十五話　桜陣結界
エピローグ　武器屋の親父の師匠

プロローグ　人員分担

「準備はいいか？」

「はい」

「ったく……面倒臭い所からやってきたんだな」

俺は今、とある事情である国への出発の準備をしている。

事の発端は……いつだろうな。

俺がこの世界でラフタリアに巫女服を着せたことが始まりな気もするし、それよりも遥か前からだった気もする。

とりあえず、俺の所為じゃないと責任逃れをしておこう。

まずは状況整理から始めるか。

俺の名前は岩谷尚文。元々は日本で大学生をしていたが、故あって異世界に盾の勇者として召喚された。

ここはゲームのようにＬｖがあり、魔物を倒すことで経験値を得てＬｖアップするという、努力がわかりやすく見える理で動く世界らしい。

で、召喚された目的は『波』と呼ばれる世界を滅ぼす現象と戦ってほしいとの話だった。

夢が広がる異世界召喚だったのだが、召喚された場所が悪く、様々な陰謀に巻き込まれて……自分で言うのもなんだが性格が歪み切ってしまった。

……あえて思い出すとなんか悲しくなるな。

「しょうがないわよー。メルロマルクのセーアエット領は流れの亜人種を寛容に受け入れていたんだものー」

「私自身の出生の問題なんですよね……」

今、サディナの話に対して嘆くように呟いたのはラフタリアだ。

俺が異世界に召喚されて初めて仲間となってくれた女の子だ。

最初は攻撃する術のない俺の代わりに攻撃させるため奴隷として購入したのだが、色々とあって今では俺の頼れる相棒兼、娘みたいな間柄だ。

思えば遠くに来たものだ。

召喚された当初はこんな未来なんて全く想像できなかった。

ある程度省略して経緯を話すと、俺を召喚した国メルロマルクの陰謀をやっとのことで跳ねのけた俺達に次に振りかかったのは波の先の世界からやってきた敵だった。

勇者が召喚される理由となった波とは世界融合現象で、その波に敗北すると、融合した世界同士が許容範囲を超えてしまい破裂して滅ぶ、らしい。

今のところ、わかっているのはそれくらいだ。

とりあえず波の先から現れた敵であったグラスやラルク達とは和解し、この世界を守る四霊と呼ばれる魔物である霊亀を乗っ取っていた敵を倒し報いを受けさせた。

で、霊亀の力によって現在、この世界はしばらく波が起こらない状況となっている。

その間に俺はラフタリアのために、波によって一度は滅びたラフタリアの生まれ育った村を復興させようとしていた。

そのために、奴隷にされて村を離れていた人達を買い戻して村に戻したりもした。

もちろん波が発生した際に必要な戦力を育成するためでもある。

勇者に育てられた奴隷や魔物は通常よりも強くなるからな。

後は……波に対抗できるように俺以外の聖武器の勇者と呼ばれる連中を一人ずつ保護していった。

異世界に召喚され、ゲーム気分で戦っていた奴等がやっと現実を知って更生した……と結果だけ書くとこんな感じだ。

「俺達はどうする？　同行すべきだよな？」

「ちょっと待ってくれ」

今、俺に話しかけてきたのは剣の勇者である天木錬（あまきれん）。

最初はクールを気取った奴だったのだが、挫折を経験しておかしくなり、俺を騙して強姦の冤罪を着せたヴィッチというクソ女を信じて裏切られ再度絶望したのだが、その後に色々とあって現在は俺の村で保護している。

今では召喚された四聖の勇者の中で一番まともな勇者っぽい性格に更生した。

年齢は……一六歳だな。

俺はぶっちゃけ歪み切ってしまったから、時々錬の純粋な考え方を聞いてダメージを受ける時がある。

錬はそれなりに強くはあるのだが、村に来るまでの戦いで呪いに侵されてしまい、弱体化している。現在は修行をしつつ、呪いが解けるのを待っている最中だ。

まあ俺も窮地を乗り越えるために、呪われた武器ラースシールドの力を使ってしまった所為で弱体化して、防御力以外は一般人よりも少し高い程度なんだけどさ。

ただ、錬はちゃんと武器の強化方法を俺と共有している分、俺の村に来る前よりも遥かに強くなっているのは確かだ。

さっきも言ったが錬は俺と同じくヴィッチに騙された仲間だ。

今では二人の共通の敵が存在する、という意味で仲間意識のようなものが生まれつつある。

色々あって真面目になった錬であるが、ヴィッチは許せない相手のようだ。

「樹はどこだ？」

「ここに……」

俺が捜すとリーシアと一緒に樹が手を上げる。

弓の勇者である樹、フルネームは川澄樹。最近この村に来た。

錬と同じく俺とは異なる日本から召喚された弓の勇者で、元々は正義感がとても強かった。

だが、錬と同じく呪いの武器に身を染めた所為で性格が汚染され、正義感はもとより主体性を失ってしまっている。

傭兵と商人の国ゼルトブルのコロシアムで『パーフェクト＝ハイド＝ジャスティス』という中二病も裸足で逃げ出すリングネームで活動し、ヴィッチに騙されて金を全て奪われた挙句、巨額の借金を背負わされた。

一応、俺が借金を肩代わりしてやっているが、帳消しにする気はないからな？

リーシアは樹にその正義感によって一度は助けられ仲間になったのだが、樹の身勝手によって捨てられた。

その後は俺の下で修練し、樹を相手に争い、戦いながら正義の意味を樹に説得して勝利するほどに成長した。どうも没落貴族の娘らしい。

今では樹が更生するために道を示す立場となっている。手元には半透明の謎の武器を持っており、めきめきと強くなっている。

「そこにいたか……でだ、問題は色々とあるんだよな」

「何があるんだ？　尚文。サディナとさっき話していたが、俺達にもわかるように説明してくれ」

事の発端は、ここは異なる世界の勇者にあたる……眷属器の所持者であるラルクがラフタリアに巫女服を着せたことにある。

そのあまりにも似合う巫女服姿を見た俺が、元の世界に戻った後でも着せようと画策し、こちらで作らせた巫女服を着せてみたことで厄介な問題に巻き込まれることになった。

話によるとラフタリアは亜人のとある国……クテンロウという国の王族の血族で、その王族の女性の衣装が巫女服によく似ているらしい。

元々ラフタリアの両親は王位を継ぐ気はなく国を出たのだが、ラフタリアはその国から監視されていた。それを知らずに俺が巫女服を着せたものだから、亜人の神に該当する盾の勇者の元で巫女服を着ている＝その国の王であることを主張しているということで、命を狙われる羽目になったのである。

挙句、その監視していた奴等が俺の領地で暴れやがった。

しかもこれからも次々と刺客がやってくるそうだ。
付き合ってられない。
ずっとラフタリアを監視し続けていたということは、この村が波に襲われていた時も、ラフタリアが奴隷狩りに襲われた時も、奴隷として酷い扱いを受けていた時も、俺の奴隷になって苦労していた時も、見ていただけだったということだ。
しかも、どの状況でもラフタリアを救うことができるほどの能力を持っていたはずなのにだ。
仕舞いには自分達の都合が悪くなったらラフタリアを殺そうとまでする始末。
絶対に相応の報いを受けさせてやる！
なんて思ったこともあって、そのクテンロウという国へ乗り込むことを俺は決めたわけだ。
そんでクテンロウがどこにあるのかとサディナに聞いて……ってサディナの説明がまだだったな。
「サディナ、俺も概要くらいしか聞いていない。シルトヴェルトに寄らないと行けないんだったな？　詳しく話してくれ」
「はーい。お姉さんが事情を説明しちゃうわよー」
サディナはラフタリアを含めた村の奴隷達の姉代わりをしている奴だ。

シャチの獣人に変身できる亜人だな。
勇者でもないのに不思議とかなり強い。
ラフタリアに負けず劣らずの整った顔をしていて、俺に対して露骨なセクハラをしてくる。
自分よりも酒の強い男を娶(めと)ると公言しており、いくら飲んでも酔わない俺に言い寄ってくるという面倒臭い奴だ。
どうもラフタリアの両親と生まれた国が同じで、ぶっちゃけ護衛として一緒にいたっぽい。
「確認を取るが、シルトヴェルトからしかクテンロウって国には行けないのか？」
俺達が向かうべき国、クテンロウはシルトヴェルトの更に東……海を越えたところにある鎖国している国らしい。
「クテンロウはシルトヴェルトよりも東にある国なんだけど、格別に入るのが難しいところなの」
「どう難しいんだ？」
俺の問いにサディナは思い出に浸るかのような顔をしながら答える。
「まず船じゃないと行けない海域が続いているわね。そこにも色々と小国があるんだけど、

そっちはいいとしてその先にあるのがクテンロウ。海流が複雑でまず入ることができないわ」
「ふむ」
「これが結構厄介でね。海のドラゴンである水竜様が厳重に結界を張って守護していて、お姉さんでも入ることができないの」
「倒せばいいんじゃないのか？」
魔物が守護してるとかならできないことじゃないだろう。
「クテンロウの深海に隠れている水竜様をどうやって倒すのか、逆にお姉さんが聞きたいわ」
む……それって流星盾を張った俺を直接どうやって攻撃すればいいのかと言ってるようなもんじゃないか？
専門故に難しいのは理解できる。物理的に壊せるなら楽だが、そういうのではなさそうだ。
「国の外ではなく内側に、しかも深海に隠れて結界を維持してるってことか？」
俺の問いにサディナが頷く。
そういやお前、元水竜の巫女とか呼ばれていたな。だから詳しいのか？

「結界のお陰で空からの侵入も不可能。唯一の入国方法はシルトヴェルトの交易船だけってことらしいのよ。それは国にいた頃から知ってたの」
何だろう。クテンロウって国が昔の日本のように思えてきた。
鎖国をしているらしいし、窓口が僅かしかないって。
シルトヴェルトはポルトガルとかオランダか？
「じゃあ港を使って密入国とかは……」
「ラフタリアちゃんの問題もあって警戒度が高いでしょうから、シルトヴェルトにかなり協力してもらわないと乗り込むのも難しいんじゃない？」
サディナの言葉に俺は深い溜息をついた。
かなり難しいってことか。
秘密裏での入国が無理な状況……ほぼ強引に開国でもさせろってことを言っているのか。
そもそもラフタリアのために国を一つ滅ぼす覚悟って話だったしな。
しょうがない。シルトヴェルトに赴いて頼みこむくらいはしないといけないってことか。
「わかった。シルトヴェルトに行って船を手配してもらうようやってみるか」
何日ロスするかわからないが、行くしかない。
と、説明したところで錬と、樹……はよくわかってないがリーシアはなんとなく察し

たようだ。

「ということだ。シルトヴェルトに錬と樹を連れていったら、事態が拗れる可能性が高いどころか危ないんじゃないかと思ってな」

シルトヴェルトは俺達が今、拠点にしているメルロマルクと昔から因縁があって仲の悪い国だ。

まあ、俺が濡れ衣を着せられて散々な目にあった原因もここに集約しているんだけどさ。

この世界には世界を救う救世主として四人の聖武器の所持者……四聖と呼ばれる勇者が召喚されている。

それ故にこの世界の人達は勇者を信仰していたりするわけだが、元々メルロマルクは盾以外の聖武器の勇者を信仰していた三勇教が国教だった。

三勇教の定義では盾の勇者は悪魔だ。

まあ三勇教は邪教としての正体を現して好き勝手やった結果、最終的に俺達の手で追い出すことに成功したんだけどさ。

で、シルトヴェルトは反対に盾の勇者を信仰する宗教が国教……らしい。

後はわかるだろう？

同様の問題がシルトヴェルトにないと言えるのか？　ということだ。

俺以外の勇者はメルロマルクでの活動はしやすかったらしいが、シルトヴェルトでは逆転する可能性が高い。

もちろん俺と一緒にいれば大丈夫だとは思いたいが、俺でさえも余計なことに巻き込まれかねない状況なんだ。錬や樹が来たら余計に拗れると思われる。

「じゃあどうしたらいい？」

「クテンロウって国には勇者の信仰はないんだよな？」

「一応はないってところかしら？　お姉さんも狭い範囲のお仕事をしてたから詳しくは知らないのよー」

役に立たねえなぁ……とは思うがしょうがない。

「とりあえず定期的にポータルで村には戻ってくるから錬や樹は村で襲撃に備えてくればいい。余裕があったらカルミラ島に出向いて呪いの解除に専念しろ」

「わかった。困ったらいつでも呼んでくれ」

「わかりました」

「ふぇえええ……なんかすごい事態に巻き込まれていますぅ」

まあな。リーシアの言葉はもっともだ。

「さて、それじゃあシルトヴェルトに向かって出発するわけだが、フィーロは……」

フィーロは俺が異世界に召喚されて二人目の仲間となった、元々フィロリアルという魔

物の女の子だ。馬車を引くことを何よりの喜びとする鳥型の魔物で、勇者が育てると人化することができるフィロリアルクイーンになるらしい。

フィロリアル時の姿は白に桜色の鳥、人化すると金髪碧眼の幼女になる。天真爛漫な性格で、村のみんなのアイドル的なポジションにいたのだが、少し前の事件でＬｖが大幅に低下し、親友のメルロマルクの王女メルティと俺の大切な使い魔であるラフちゃんと一緒にＬｖ上げの旅に出てしまっている。

魔物紋で命令すれば帰ってくるか？

「今頃どこにいるんでしょうね？」

「方角はわかるし、命じれば戻ってくるとは思うが……」

無理に呼び戻すのも時間が掛かりそうだ。

今の俺はすこぶる機嫌が悪い。

そんな面倒なことをするよりも別の方法を考えた方がよさそうなので、フィーロを呼び寄せる案を却下する。

せっかくＬｖ上げをしているんだし、邪魔をするのも悪い。

ってところで一匹の赤い竜が手を挙げる。

「キュア！」

名前をガエリオンといい、この前事件を起こした張本人だ。

少し前……シルトヴェルトからと思しき援助のプレゼントを受けたのだが、その荷物の中にドラゴンの卵が混じっていた。

俺は村で研究をしたいと思い、この世界で一番大きい国であるフォーブレイから来た錬金術師のラトに頼んでドラゴンを育てることに決めた。

まあ、育成自体は村の連中……谷子とニックネームを付けようとしたのに拒否したウィンディアが代表となってやったんだけどさ。

ともかくガエリオンはすくすくと大きくなったのだが、困ったことに俺に遊んでほしくてピンポンダッシュをするようになった。

それを叱りつけた後、十分に遊んでやることにしたのだが、遊んでいる最中に何をトチ狂ったのか俺が鎧に使っていた核石を勝手に食ってしまった。その核は錬が倒したドラゴンの死骸と戦って得たドラゴンゾンビの核と……異世界に行った時に使われていた魔竜の核をくっつけたもので、それを食った途端に暴れ出した挙句暴走して逃げたのだ。

で、ドラゴンゾンビが生前住んでいた山に逃げ込んだので、ガエリオンを助けるためにそこに向かった。

まではよかったのだが、どうも異世界で手に入れた、この世界の四聖とは異なる別の異

世界の四聖――絆達が倒した魔竜の核がガエリオンの支配権を得て魔竜として復活してしまった。

ドラゴンゾンビの核を食っていたフィーロはこの所為で経験値を奪われた挙句、魔竜に取りこまれる事態となった。

俺達が魔竜と戦っている最中にガエリオンが支配権を取り戻して、フィーロと共に魔竜の束縛から脱出、魔竜を弱体化させて撃破した。

現在、ガエリオンの中にはかつて錬が倒したドラゴン――ウィンディアの育ての親であるガエリオンの親の方も乗り移っている。一つの体に二つの心って状態らしい。

「なんだ？」

「えっと……ガエリオンが乗せてってくれるって」

育ての親であるウィンディアがガエリオンの言葉を通訳する。

犬っぽい耳をした亜人の少女で、ドラゴンに育てられた経緯がある。

その生まれもあって魔物好きなので、村で魔物の面倒を見る仕事をさせている。

「ウィンディアはついていくのか？」

錬がウィンディアに心配そうに駆け寄る。

「ガエリオンが行くならついていくに決まってるでしょ？」

「じゃ、じゃあ……」

そこでウィンディアは錬の脛を蹴り飛ばす。

とはいっても錬は結構強化されているからあんまり効果はないみたいだけどな。

「保護者面するな」

結果的に錬はウィンディアの親の仇なのだが、そのことに責任を持とうとする錬のことをウィンディアは鬱陶しく感じている。

それでも錬は諦めておらず、責任を取る方法を模索しているようだ。

「ギャウギャウ！」

ガエリオンは中に親ガエリオンがいる関係か錬のことを嫌っているから、背中には絶対に乗せないだろうな。ついていこうとして断られた形だ。

「で？　盾の勇者、どうするの？」

ウィンディアの言葉に考える。

「まあフィーロがいないならしょうがないか。他にもフィロリアルがいた気はするがな」

と、牧場というか魔物舎の方に目を向ける。

そこにはなんか悔しそうにこっちを見てる薄紫のフィロリアルがいる。

フィーロの配下一号であるフィロリアルだ。

フィロリアルは基本的に空を飛べない。

移動の面も考えて今はガエリオンの方に軍配が上がるだろう。

というか、フィーロが修行に出たのは空を飛べるガエリオンに張り合うためかもしれない。

「ん――」

そこで更に手を挙げるぬいぐるみが一人。

「ご主人からのお言葉があります」

「なんだ？」

俺はその使い魔の主人、セインに視線を向ける。

セインはこの世界とも絆の世界とも異なる世界……どうやら波による戦いによって滅んだ世界の眷属器の所持者だ。

出会いはゼルトブルの闇のコロシアムで俺達と戦ったことで、その時はマーダーピエロというリングネームを使っていた。

だが、色々とあって俺の領地で生活している。

何が目的なのかよくわからないが、どうも敵がこの世界に侵入していて四聖の命を狙っているから、そいつらを倒して四聖を守りたいようだ。

元々住んでいた世界が滅んでしまっている所為か、眷属器の翻訳機能が破損していて音飛びするので何を言っているのかよくわからない。使い魔としてぬいぐるみを使役してい

て、そいつが通訳をすることでやっと意思伝達ができる状況だ。
錬を保護する頃に出てきた敵……たとえ死んでも復活できるなんてふざけた能力を持った奴らを仕留める時に協力してくれた。
どうもあいつらを倒す方法をずっと模索していたらしい。
「ご主人の話では途中まで送ることができるかもしれないので地図を見せてほしいそうです」
「あ、ああ」
俺はセインに世界地図を見せる。
「えー……ゼルトブルの交易船の積み荷に転送用の針を付けていたので、途中までは送れるそうです」
「そうか、それは助かる」
セインは対象に針を付けることで、その対象が居る場所に転移することができるというスキルを持っている。
針を付けた辺りを監視することもできる。
俺のピンチに駆けつけられるのもその針を俺の鎧に付けているからだ。
なんだかんだいってシルトヴェルトに行くには足の速いフィーロでも時間が掛かる。
俺や錬、樹の持っている転移スキルは行ったことのある場所を記憶しておかないといけ

ない。
　ラフタリアも異世界の刀の眷属器を持っているが、こっちは龍刻の砂時計という、波の到来を知らせたりＬｖの限界突破であるクラスアップをしてくれる施設を経由するタウンポータルだ。
　しかも一度、龍刻の砂時計に行ったことがないと使えない。
　その点、セインのは針さえ刺しておけば刺したものが移動してもその先に飛べる。
　便利だな。
「じゃあセインに送ってもらうとして……ラフタリアとサディナ、ガエリオンとウィンディアでいいか」
「はい！」
　……ああもう、コイツが挙手してるよ。鬱陶しいなぁ。
　俺はウンザリしながら、手を挙げてる奴……アトラに視線を向ける。
「アトラ？」
　ハクコ種と言われる、亜人の中でも五本の指に入る強い種族で、Ｌｖ限界も高い。
　元々はゼルトブルで兄のフォウルと抱き合わせで購入した奴隷だったのが……今ではその兄よりも強いんじゃないかと思われる。
　なんていうか……出会った当初は病弱で、今にも死にそうな奴だったんだがな。

難病に侵されて衰弱し、歩けない子だったのだが、俺が薬を服用させたらみるみるうちに……元気すぎる奴隷に変貌した。

「私も一緒に行きたいですわ」

「何を言ってるんだアトラ！」

兄貴の面目が低下中のフォウルがアトラに注意する。

フォウルは最近、Ｌｖの上昇も合わせて成長期に入ったらしく背が伸びてきた。

「お兄様、尚文様の臣下として、どんな時でも共に行動するのは当然のことですわ」

「しかし！」

「お兄様？　最近の私達の活躍をご存じではないのですか？」

「く……」

まあ、アトラは俺や錬、樹が習得しようと躍起になっている変幻無双流という武術の真髄を習わずとも理解しているほどの天才であるのは確かなんだよな。

そのお陰でこの前の魔竜との戦いで勝てたわけだし、覚醒したリーシアの強さに匹敵するスペックを秘めている。

むしろ村の奴隷の中で伸びが格段に良いのはアトラだ。

元々強いのはサディナだけどさ。

今のアトラってリーシアの戦いを見る……アトラは目が見えなかったな、リーシアの動

きを感じ取るだけで似たような動きができるようになったらしいし、Ｌｖ的な不安は残るが戦力としては申し分ない。

反面、フォウルの方は今一つ突き抜けた活躍はできていない印象だな。

「連れていってもいいが……フォウルとアトラはハクコ種だろ？」

ハクコ種というのはシルトヴェルトにおける王族に位置する種族でもあるらしい。

随分と昔、シルトヴェルトの長として戦争を起こし、負けた責任を負わされて衰退した一族だと聞いた。

「お兄様、シルトヴェルトならばある程度顔が利きませんか？　こういった時に力となるのが臣下の務めですわ。　ささ、　お兄様、　コネを使うのです」

なんかアトラがフォウルの腕に抱きついて誘惑しているっぽい催促をする。

……少々乱暴な表現だが、アトラって勝つためならなんでもしそうだ。

兄貴が邪魔なら平気で不意打ちして黙らせるしな。

武家の出身らしいが、どちらかといえば蛮族寄りかもしれない。

「う……ないわけじゃないが、かなり昔の話だし、頼りになるかどうかわからないぞ」

「ふむ……」

没落していても何かしらの縁があって使えるかもしれないな。

「セイン、どこまで送れるんだ？」
「積み荷に付けた針がこの辺りの港だと思うので……」
と、セインの使い魔、獣人姿のキールを模したぬいぐるみが指差す。
キール？　シベリアンハスキーみたいな獣人に変身するこの村出身の奴隷である。
詳しい説明は省略する。
シルドフリーデンに近い港町の辺りだな……ここからはガエリオンに乗っての移動か？
というかシルドフリーデンには寄るべきか？　余計な騒ぎになりそうだな。
「サディナ」
「何？」
「シルドフリーデンはどうなんだ？」
「そっちは歴史が浅い国だし、クテンロウと交易はしてないわね。行く意味はないわよー？　あと、シルトヴェルト行きの船があるくらいしか知らないわね」
現地でシルトヴェルトに直通の馬車や船があれば楽なんだがな……。
「わかった。とはいえ、ポータルで夜には帰ってくるぞ？」
「もちろんですわ」
「じゃあ出発するとしよう。セイン、任せたぞ」
俺の言葉にセインはコクリと頷き、パーティを作ってから武器を持って何やら呟く。

するとフッと……まあポータルで飛ぶ時と同じ要領で俺達は転移した。

一話　前払い

「ここは……」

辺りを見渡すと港の倉庫っぽいところだ。

近くには大きな木箱がある。これに転移用の針を付けていたということか。

「ふむ……結構便利なスキルだな。最悪ガエリオンに針を付けて移動させた方が効率が——」

と言おうとしたところでセインが武器を確認する。

「かな——」

「かなり危なかったみたいです」

キールぬいぐるみが答える。

「何が？」

「現在のご主人の武器の力では複数人を連れていくのは危ないようです。下手をすれば転

移失敗でどうなることか……」
セインは滅びた世界の眷属器の持ち主で翻訳機能に障害を持っている。
それに加えて少しずつ武器の力が弱ってきているらしい。
「辛うじて成功したが、次は危ないか」
「はい。イワタニさんの案は一か八かになるかと思いますがやりますか？」
「人数を減らしても危険があるんだな？」
俺の問いにセインは頷く。
「……しょうがない。道中は俺や他の勇者がポータルを受け持つ」
転送事故なんてやってられないからな。
ある程度ショートカットできたことで良しとするのがいいんだろう。
セインが申し訳なさそうに頭を下げたので、俺は気にするなとばかりに頭を撫でてやった。
するとセインはバッと顔を上げた。その頬が若干赤く染まっている。
「嫌だったか？」
するとセインは首を横に振って……何か満面の笑顔を向けてきた。
嫌じゃないってことなんだろうけど、なぜそこで笑顔になった？

お前はクール路線だろう。自分のキャラを間違えているぞ。

それともこれが噂のナデポだろうか？

いやいや……。

「それでもいざという時には駆けつけるとご主人は仰っております」

「助かる。とはいえ、この前みたいに寝ていて気付かなかった、というのはやめてくれよ」

「了解だそうです」

とセインと話をつけたところでアトラが耳や尻尾をぴょこぴょこ動かしてから言った。

「む、新たな敵の予感がします」

「なに？　どこからだ？」

港の倉庫だからな。警備員か何かが俺達を泥棒と勘違いしてやってきた可能性はある。

さっさと逃げた方がいいか？　人数的に厳しい気もするが。

「いえ、あくまで予感だけです」

「紛らわしいこと言うな！」

「アトラさん、過敏になりすぎです」

「……まあいい。じゃあ出発するぞ」

そうしてガエリオンに乗って移動を開始した。

経過だけでいうと船での移動や馬車での移動よりもガエリオンを使った方が早かった。
飛んでいるんだから当然といえば当然か。
「キュア……」
「ガエリオンが重たいって。長く飛ぶには人数をもう少し減らしてほしいって」
ウィンディアがガエリオンの代わりに訴えている。
俺は振り返ってガエリオンに乗っている人数を数える。
俺、ラフタリア、サディナ、ウィンディア、セイン、アトラ、フォウル……。
ま、正直乗りすぎな気もする。
ガエリオンってそれなりに大きいドラゴンに変身できるから当たり前のように乗っていたけど、七人も乗せたら確かに重たいかもしれない。しかもスピード重視となるとなぁ。
「キュアアアア……」
がんばって羽ばたきながら魔力を羽に集めているのが伝わってくる。
そういやラトが、ドラゴンを長時間飛ばせるのは厳しいとか言ってたな。
再度振り返って確認。
「俺とウィンディアだけで移動するべきか？　どうせポータルで連れていくんだし」
「それがいいかもしれませんね……ちょっと揺れすぎて気持ち悪いです」
ラフタリアの顔色が悪くなってきている。

そういえば最初の頃はフィーロの馬車でも酔っていたからな。乗り物に弱いのかもしれない。

「うぷ……」

フォウルもか。

俺は乗り物酔いの経験がないから何も言えないが、大変だな。

「ラフタリアさんもお兄様も、修練が足りませんわね」

アトラは平然としてる。

むしろそういうポジションはお前だと思うんだがな。元気になりすぎだ。

「な――？」

セインの方は特に問題はなさそうだが……。

「あらー」

「サディナ、お前は絶対にここで獣人の姿になるんじゃないぞ？」

サディナがここで大女のシャチ獣人形態になったらガエリオンは空中で力尽きて落下しかねない。

「キュ、キュア……」

「休ませてほしいって」

「しょうがないな……」

急いでいるのに休憩か……とは思いつつ納得もできる。
俺達はガエリオンを休ませるために途中の草原に着地した。
「空の旅はなかなか味わえるものじゃないから楽しいわねー」
「楽しいだけじゃ事態は解決しないんだがな……」
サディナの呟きに俺はツッコミを入れる。
しばらくするとギュルルル……ッとガエリオンの方から音がした。
「キュアアア……」
「ガエリオン、お腹空いたって」
「さっき食ったばかりだろ！」
出かける前に餌は十分やったはずだ。にもかかわらず腹が減ったとはどういうことだ！
「七人も乗せて飛んだら魔力の消費も激しいし、疲れるからお腹も空いちゃうに決まってるじゃない」
「……そういうことか」
飛ぶことで厄介な地形を無視できるが、同時に燃費が掛かるんだな。
うん。ラフタリア達には留守番をしてもらった方がよさそうだ。
だが……空中でも魔物がいないわけじゃない。

現にサディナは空の魔物を雷の魔法で叩き落としている。

「村に帰って飯を食わせるか？　それとも適当な魔物でも狩ってきて食わせるか」

ガエリオンってドラゴンだろ？

別に調理する必要がないなら手頃な魔物を仕留めて餌にするのが効率的かもしれん。

上手くいけば新しい盾の素材を確保できるし。

「やりますか？」

「そうだな」

「では狩りの時間ですわね。お兄様、尚文様に褒めてもらえるようにがんばりますわよ」

「あ、アトラ！　待て！　う……」

なんか勝手にアトラが走り出していったぞ。その後をフォウルが追っていく。

「まあ、魔力の回復を待っている間に魔物を探すのはいいと思います」

「そうね。お姉さんも手伝ってこようかしら？」

「しょうがないか……魔力水で強引に回復させるのもいいが……」

修行のために魔力を回復する命力水を作ってはいるが使用量も多い。なので在庫が心許ない。

地味に素材を必要とするし、売れば金にもなる。

樹の借金を肩代わりしているから、無駄遣いは避けたい。
まだ移動を開始して数時間だしな。ある程度は寛大にしておくべきか。
「じゃあガエリオンとウィンディア。お前等は今後の空の旅に備えてそこで休んでいろ」
「ん――」
「セインもな。その後は重量を考えて……攻撃の面からサディナを連れていきたいが……」
「あら？」
仮にサディナが血迷って俺に襲いかかってきた時、ガエリオンとウィンディアで抑えきれるか？
……なんで俺はサディナを警戒してるんだ？
「サディナ姉さん、さすがにこんな時にナオフミ様に襲いかかったりしませんよね？」
「当たり前じゃなーい」
ラフタリアの問いに頷くサディナだが……信じられん。
まあ、悪ふざけなんてしたら命に関わるから、さすがのサディナもしないと思いたい。
ぶっちゃけ思ったよりも空の旅って面倒臭いな。
乗り物酔いとかあるし……長時間の移動は面倒っぽい。
うーむ……やっぱフィーロ辺りをどっかで呼び寄せて馬車で移動すべきだろうか？
ゼルトブルではそんな感じで移動したわけだし。

ポータルスキルがあっても面倒なことが付きまとうんだなぁ。
なんて思いつつ、俺達も魔物を狩りに出かけたのだった。

「ん――……やっぱりメルロマルクとは魔物の種類が違うんだな」
「そうですね」
ゼニスブルーニードルラットという無駄に名前の長いハリネズミみたいな魔物を倒したのだが、他にもインディゴリザードとかメルロマルクじゃ見ない魔物が多い。
まあ、今の俺達はなんだかんだ強化方法を実践しているから遭遇する魔物に苦戦なんてしない。精鋭みたいなものだしな。
むしろ苦戦するとしたらその方が問題だ。周囲は草原、強力な魔物が出現する地域でもない。
ただ、弱い魔物でも……ぶっちゃけ、地味に馬鹿にできない要素として、新しく出る盾とかのステータス補正があるんだよな。
+1とか塵(ちり)も積もればなんとやら。
世界中の魔物を素材にして能力を引き上げる必要が生じる時がいつか来る気がする。
マメに集めておくべきか。

なんて思いながら盾に入れる。
「錬や樹にもこうやって世界中を回って魔物を倒して素材を集めてもらわないとな」
勇者同士は経験値は共有できないが素材は別だ。
そういう方向で協力していけばいい。
「今はクテンロウの問題を片付けるのが先じゃないの――？」
「ん――」
サディナの言葉にセインも頷く。
「まあな。だが、細かいことでもやっておかないとどこで躓くかわからない。時間は有限だから無駄にしちゃいけないだろう」
なんか俺の言葉にセインが拍手している。
お前はどっちの味方なんだよ。
「勇者ってのは大変なのね」
「そうですね……刀の眷属器を使ってると常々思います。グラスさんが言っていましたが強い力には責任が付き纏うそうです」
あいつの言いそうなセリフだな。
残念だが強い力は我が侭を通すためにあるんだ。

なんて言うとラフタリアにまた呆れられそうなので黙っておこう。
「さて、じゃあガエリオンさんに持って帰りますか？」
「そうだな。どっちにしても今日はがんばってもらうとしよう。ガエリオンも空中で戦えないわけじゃないし、ウィンディアと俺とで行く」
「はい……」
ラフタリアは少し名残惜しそうにしている。
「できれば敵の標的であるラフタリアを守っておきたいが……」
「ナオフミちゃん、ラフタリアちゃんのことはお姉さんに任せなさい」
サディナがドンと胸に手を当てて言い切る。
まあ、それは信じてやってもいいか。
村ならまだ錬や樹がいる。俺一人しかいないよりは遥かにマシだろう。
なんて感じに考えながら魔物を持ち帰ってガエリオンの餌にした後、ガエリオンが移動しやすいように少人数での行動となった。

それから約二日、村に襲撃の類はまだない。
で、シルトヴェルトへの道程の三分の二にまで辿り着いた。

この分なら明日にはシルトヴェルトに入ることができるだろう。
二週間掛かる道を実質四日で辿り着けるのは快挙だな。
ガエリオンの移動速度と転移スキルを併用するとなかなかに優秀だ。
ま、シルトヴェルトに入っても、その先へ行かなきゃいけないんだからまだ終わったわけじゃないが……。
「キュアキュアー」
ここ最近、俺に構ってもらえているからかウィンディアの話ではガエリオンはすこぶる機嫌が良いらしい。
「さて、今日はこれくらいにして村に帰る――」
と、後方から土煙を上げながら何かが俺達の方へ突撃してくる。
なんだ？
「ギャウウウウ！」
ガエリオンが警戒態勢を取る。
俺は土煙の発生源に目を向ける。状況次第じゃポータルで逃げようと考えていると……。
「あ、やっぱりごしゅじんさまだー。やっほー！」
フィロリアルクイーン姿のフィーロが手を振りながら走ってくるところだった。
「ラフー」

ラフちゃんも相変わらずフィーロの頭に乗っかってるのか。
なんとなく和むなぁ。
と、思っていると――
『力の根源たる私が命ずる。理を今一度読み解き、我が前に居る憎悪の対象を押し流せ！』
「ドライファ・アクアブラスト！」
フィーロの背中辺りから魔法が飛んできた。
「わ！」
ので、ほぼ脊髄反射で盾を構えて……バッティングの要領で放った相手に打ち返す。
魔法を放った相手は俺が反射した魔法を紙一重で避ける。
まあ誰が放った魔法なのか声でわかったけどさ。
「何するのよ！」
「それはこっちの台詞だ、メルティ」
「魔法を撃たれる理由がないとでも思ったの？」
「ないな。特にお前には」
「なんですって!?」

フィーロと共にLv上げの旅に出たメルロマルクの次期女王であるメルティが、なんか俺を睨(にら)んでピーチク騒いでいる。

しかし……咄嗟(とっさ)にやってしまったが、魔法を盾で打ち返すってこともできるんだな。

受け止めるだけじゃなんか悔しいから、いつでもできるように練習するかな？

「こんなところで何してるんだ？」

「んー？」

Lv上げの旅に出て、こんなところまで走ってきてしまったとかだろうか？

随分と遠くまで旅してるな。

「えっとねー、フィーロ達は本当は別の場所でLvを上げてたんだけどー、フィトリアがやってきてねー、色々あってこっちに行ってほしいって頼まれたのー」

「色々ってなんだ？」

何か凄(すご)く面倒臭いことに巻きこまれそうな予感がする。

概要を聞いてみて、内容次第では断るか。

11% 位置No 6050中 612

「ラフ！」
「ラフちゃんもー、こっちに行けばごしゅじんさまがいるって言ってたー」
「そうかそうか、ラフちゃんは遠くにいても何が起こったのかわかっているんだな」
「ラフー」
　俺の問いにラフちゃんは頷く。
　だから俺と会えるようにフィーロ達を導いていたとかそんなところだろう。
「それでねーごしゅじんさまー、なんかフィトリアがお願いがあるみたいー」
「後でな。今は優先しなくちゃいけない面倒な案件があるんだ」
「だ、だけどナオフミ、フィトリアさんが報酬は前払いって言って色々としてくれているんだけど……」
「忙しいから後でな。というか勝手に前払いにするな。俺は受けちゃいない。メルティ、お前がやれ」
　俺の返答にメルティがなんか呆れ顔をしている。
「で？　何があったのか少しは聞いてやろうじゃないか」
「なんでナオフミが上から目線なのかわからないけどいいわよ。まずはフィーロちゃんとラフちゃんとＬｖ上げの旅に出た後のことなんだけど……」
　メルティは俺に今までの経緯を説明した。

フィーロと一緒にＬｖ上げの旅に出たメルティ達だったのだが、割と早めに……時期的には村で襲撃を受ける前後にメルティのＬｖが40の限界になり、一度帰ろうという話になった。

そんな夜のこと。

フィトリアがフィーロを呼び止めて合流したそうだ。

久しぶりの再会にメルティも心が弾んだ。

「久しぶり」

「あ、はい。メルロマルクで霊亀の足を止めていただきありがとうございます」

「それはいい。元々フィトリアもやらないといけないことだったから」

寛容なフィトリアの態度と周りのフィロリアル達に、メルティはとても楽しい気持ちになっていた。

「……」

「ラフー」

で、フィーロの頭にいるラフちゃんをなぜかフィトリアはしばらく睨んでいた。

「むー……」

「ラフラフ」

なんかラフちゃんが諭すような喋(しゃべ)り方で鳴いていたのが印象的だったそうだ。
フィーロにラフちゃんが何を話していたのかを聞くと、「迷惑を掛けるような策略を巡らせて誘導しようとするより直接頼みに来るのが筋。勇者様を誘導しようとした力はこっちが有効利用するから返さない」とかフィトリアに言っていたとかなんとか。
何か？　フィーロを使って俺を誘導させようとしていたのか？
諭されたからかどうなのか知らないが、フィトリアは深い溜息(ためいき)をついてから話を切りだした。
「わかった。筋が通らないのもこっちの落ち度。改めて言うと、頼みたいことがあるからこうして来た」
「んー？」
フィーロ、メルティ、ラフちゃんにフィトリアは頼みごとの内容を告げた。
「えっと何でしょうか？」
「それで俺のところに来たのか？」
「うん。ナオフミに手伝ってもらいたいんですって」
「なるほど。用件はわかった。後でな」

「聞いてもそれ？」

「当たり前だろ。物事には優先順位があるんだ。フィトリアが解決できない厄介な問題を俺のところに持ってくるな」

　自分で解決できないから俺のところに来たのだろうが、そんな要望に応じる気はない。

　それ以前にあの強いフィトリアが解決できないことを俺が解決できるとは思えないんだが。

「そもそも、四聖勇者同士は仲良くっていうフィトリアの要望に取り組んでる最中だろ」

　錬も樹も……問題こそあれ、和解はできた。

　元康（もとやす）？　アレも結果的には問題ないだろ。むしろかかわりたくない。

「こっちの面倒な案件が終わったらやってやる。それまで待ってろ」

「え？　うん。どれくらい掛かるのかって」

　フィーロが何やら受信したのか、俺に質問してくる。

「さあな。できる限り早く解決させるつもりだが、わからん」

「それじゃあ困るってー」

「知るか。勝手に困ってろ」

「あの、ナオフミ。話を最後まで聞きなさいよ」

「依頼内容に関して聞く気はない。聞いたら面倒なことに巻き込まれそうだからな」

俺の返答にメルティは深い溜息をついた。

「で、前払いの報酬って何なんだ？　金か？」

「ナオフミ現金すぎ。そうじゃなくて、わたし達……わたしとフィーロちゃんに色々と付与を掛けてくれたのよ」

「付与？」

俺が首を傾げてそう聞くとフィーロとメルティが頷く。

「ま、ナオフミならフィーロちゃんの能力を見れるでしょ？　確認しなさいよ」

俺はメルティに言われるまま、フィーロの能力を見て絶句する。

ステータスが二倍以上伸びていたのだ。

これ……俺が霊亀に挑んだ時より僅かに低い程度だぞ。

「なんかわたしとフィーロちゃんのＬｖを下げる代わりに資質を上昇させてあげるってことでやってくれたのよ。あと、わたしのクラスアップも斡旋してくれたわ」

「どう？　ごしゅじんさまー。これでフィーロはガエリオンに負けないよー」

「ギャウギャウギャウ！」

ガエリオンがフィーロを威嚇し始める。

は――……なんていうか随分と成長して帰ってきたな。
成長といってもフィトリアの報酬前払いなんだけどさ。
とはいえ、報酬に釣り合わない依頼内容のような気がする。
「悪いが勝手にこんなデカイ前払いをされて俺が素直に頷くとでも思ったか愚か者め！　却下だ却下！　前払いは返却な！」
「なんでナオフミがフィトリアさんに文句言ってるか理解に苦しむんだけど……」
「え――……」
「ギャウギャウギャウ！」
ガエリオンも馬鹿にするように笑っているぞ。
こんだけの前払いの報酬がある案件は総じて面倒臭いと相場が決まっているんだ。
「どっちにしても後だ後！　フィーロ、お前は優先順位というものがあるのはわかってるよな？」
「うん。ごしゅじんさまがやる順番を決める」
「そうだ。よくわかっているじゃないか。偉いぞ」
「えへへ――わかった――」
「わかっちゃうの？　断ったらどうなるのかわかってるの？」
メルティがオロオロしているが、そんなものは知らん。

「やるにはやるが、そっちは後だ。こっちにも事情ってものがある。割り込みは認めん」
今はラフタリアの問題の方を優先するのは当たり前だろ。
「どうしてもというなら村にいる錬や樹を斡旋してやる。それで解決できるか？」
「え？　えーと、ごしゅじんさまとフィーロじゃないとダメだって」
ほらな、錬や樹に頼れないなんて個人的な事情だろ。
防御力が重要なのかもしれないが、錬や樹なら大抵のことは攻撃力でなんとかできるはず。
あるいは戦闘能力は求められていない、なんて場合もある。
「というわけだ。後でやってやるから待っていろ。以上！」
あのなんだかんだで我が侭をほざく鳥の女王の強引な手段に付き合っていたら、いいように利用されるだけだ。少しぐらい焦らす方向で意趣返ししてやる。
「それとも何か？　フィトリア、お前はこの程度で四聖勇者を殺すのか？」
なんとなく遠くで悔しげな足踏みが聞こえるような気がする。
根はフィーロとあまり変わらないのかもしれない。
「なんかフィトリアは我慢したみたい」
「そうかそうか」
「後で後悔しても知らないって言ってたよー」

どう後悔するんだ？　そんな挑発に俺は乗らない。
それに後悔するならラフタリアの問題を片付けてから後悔した方が何倍もマシだ。
「ラフー」
「よしよし」
久しぶりのラフちゃんを撫でて感触を楽しむ。
「で、フィトリアさんの依頼を後回しにしてナオフミはこんなところで何をしてるのよ？」
メルティがラフちゃんを撫でる俺に尋ねてきた。
「それなんだが、俺達はクテンロウって国へ行かなきゃならないんだよ」
俺はフィーロ達にラフタリアの出生の問題を話した。
このままじゃ村の開拓に支障をきたすかもしれないからな。
「それでやむなく移動している最中だ」
「それってごしゅじんさまが、ラフタリアお姉ちゃんにあの服を着せた所為で――」
「フィーロ、それ以上言ったらガエリオンを撫でるがいいか？」
「キュア！」
「やー！」
フィーロを黙らせるとメルティがなんか呆れたように額に手を当てている。

「ガエリオンを嫌がらせに使わないでよ！」
　ウィンディアはうるさい。
「母上には報告したの？」
「いや？」
　そういや報告に行ってなかったな。
　国家間の問題もあるし、話しておくべきか、
「じゃあメルティ、村に送るから女王に伝えておいてくれ。それに今日はキリもいい。村に帰るぞ」
「ちょっと！　問題を押し付けないでよね！」
　怒るメルティを無視してフィーロ達と一緒に村へ帰還することにした。

二話　来訪伝達

「ただいまー！」
「あ、フィーロちゃん！」

村に帰ると村の奴隷共がフィーロを出迎える。
「あれ？　盾のお兄ちゃん達と一緒？」
「うん、途中で会ったのー」
「そっかー」
「お帰りなさいナオフミ様。なぜかフィーロがいますが……」
「ああ、帰ろうと思ったところへやってきてな。ついでに連れてきた」
「はあ……」
「随分と強くなって帰ってきたみたいだぞ」
俺はラフタリアに先ほどの出来事を説明する。
「さてと……明日はシルトヴェルトに入国することになるんだが……サディナを呼んでおいてくれ。想定される問題に関して考えておく。フィーロに馬車を引かせれば大勢で入国することができるだろ」
「キュアキュアキュア！」
ガエリオンが喚きだした。
大方、フィーロを連れていくことに異議を申し立てているんだろう。
「ガエリオン、お前は少人数だと空を飛べて便利だが大人数だと馬車が引けるフィーロに

軍配が上がるんだ。我慢しろ」
「キュアキュア！」
「えっと、ガエリオンだって馬車くらい引ける！　って言ってるよ」
「ぶー！　馬車はフィーロが引くのー！」
「ここ二日はお前の背中に乗って移動してやったんだから、次くらいは我慢しろ」
「キュアアア……」
そんな目をしても俺は引かない。
我慢も重要だ。そもそもお前等の起こした問題に関してまだ許したわけじゃないんだからな。
とは思うが、がんばった分くらいは評価している。
「どっちにしても順番だ。ポータルで馬車を持っていけないから、フィーロ、現地の安物の馬車になるけどいいよな？」
「うん！」
「シルトヴェルト周辺となると、悪い意味で歓迎されることがあるかもしれないから人数は多めがいいだろうしな」
ガエリオンの背中に乗っての移動は悪くはないのだが、国家規模を相手にするなら人数は多い方がいい。

シルトヴェルトを警戒する意味でもな。
シルトヴェルト……盾の勇者を信仰する国。
メルロマルクのような過激な側面がないとは言い切れない。警戒を怠ることはできないな。
「ねーねーごしゅじんさまー。メルちゃんは一緒ー？」
「メルティは避けた方がいいだろうな。王女と思えないほど気が強いがメルロマルクの王族だぞ？」
「なんですって!?」
「行きたいのか？」
「……」
女王だって外交で行ったら危なそうな国だ。
どっちにしても確認を取ってからだし、シルトヴェルト自体に用があるわけではない。
「じゃあ気が滅入るけど母上に連絡を取ってみるわ。フィーロちゃん、行きましょう」
「うん！」
メルティはフィーロリアル化したフィーロの背中に乗って走り去っていくのだった。
なんとも忙しい連中だ。つーか、フィーロは本当、メルティと仲良いよな。

「尚文様ー」
　アトラがフォウルを連れてやってくる。
「お帰りなさいませですわ」
「ああ、明日か明後日辺りにシルトヴェルトに入国することになる。フィーロが帰ってきたからみんなで移動できるようになったぞ」
　俺はフォウルの方に目を向ける。
「で？　フォウル、シルトヴェルトの方に知り合いがいるんだったな？」
「元々面倒を見てくれた連中にそっちの方へ帰った奴がいるくらいだ。捜さないとわからないぞ」
「頼りになるのか？」
　俺の問いにフォウルは腕を組んで考える。
「正直に言えばわからない。俺も幼かったし、親はもとより祖父母に関しても教えてもらえなかった」
「そうか」
　ハクコはクズと争った血の気が多い種族だったはずだ。
　最終的にクズに追い詰められて勢力を減退させたとか聞いたからな。

実際は連れていくのは危ないかもしれない。
かといって……。
「アトラに生まれ故郷の家くらいは見せてやりたいな……」
フォウルがポツリと呟(つぶや)く。
「シルトヴェルトなのか？」
「いや」
フォウルは俺に地図を広げるように頼んでから場所を探し始める。
シルトヴェルト近隣の……ちょうど今晩俺達が立ち寄った地域の近くを指差している。
寄り道ができなくはないな。
「ところで気になったんだが、フォウル」
「なんだ？」
「お前、シルトヴェルトの言葉とかわかるのか？」
俺やラフタリア、錬(れん)や樹(いつき)はそれぞれの武器が翻訳してくれるが、他の連中は知らない言葉は通じない。リーシアは数日で他国の言葉を使えるようになるほどの逸材であるが、みんながみんなリーシアのように優秀なわけではない。
「そりゃあ……ゼルトブルに流れ着く間に数ヶ国語は話せるくらいにはなったが……」

「私もですわ。何分、病弱だった時にはお話くらいしか楽しみがなかったので、お兄様に色々な言葉を教えてもらったのですわ」
「ほう……」
意外な能力だ。
つまりシルトヴェルトに限らず、あの辺りの言語を使えるのか。
商売ルートを拡張する時に使えるかもしれないな。
「フォウルちゃんはメルロマルク公用語はまだカタコトなところがあるわよね？」
「……ああ」
サディナの話に頷くと、フォウルは俺を不思議そうな顔で見つめる。
「そうなのか？　お前の耳には、どんな言葉で、俺の話が伝わっているんだ？」
中途半端なところで区切ってフォウルが話している。
おそらくいろんな言葉を使って話しているんだろう。
「お兄様、いろんな言語を使いながら尚文様を馬鹿にするのはおやめください」
アトラがフォウルの背中を突くとフォウルは痛みで呻いた。
相変わらず手の早い妹だな。
「ぐ……アトラ、コイツに確認を取っただけだ！　特に俺の最後の言葉を訳してみろ」

フォウルは、「お前の耳には（シルトヴェルト語）、どんな言葉で（メルロマルク語）、伝わっているんだ？（何か別の言葉なのか訛りが激しい言語）」というふうに尋ねたらしい。

最後の部分はアトラも知らない言葉だそうだ。

「伝わっているんだ？　ですよね？　ナオフミ様」

ラフタリアの言葉に俺も頷く。

「勇者の武器の影響で会話は翻訳される。どんな少数民族の言葉でも翻訳できるんじゃないか？」

魔物の言葉は翻訳できないのが難点といえば難点であり、救いか？

これで魔物と話せたら厄介極まりない。

そんなのはフィーロやラト、ウィンディア辺りにでもさせておけって感じだな。

「便利な力を使っているな」

「ちなみに最後のは何なんだ？」

「昔の部下から教わったシルトヴェルトの辺境にある方言だ」

方言まで完璧……素晴らしいな。

勇者という立場がなければ通訳者で金を稼ぐ、という手もあったのか？

「セーアエット領も方言くらいはあるわよ？」
「とはいってもな。フォウルとアトラがマルチリンガルなのは有利だ」
キール達ルロロナ村出身の奴隷共は基本的にはメルロマルク公用語しか喋(しゃべ)れない。
ラフタリアの両親はどうだったんだろうか。
「サディナ、クテンロウって国は何語なんだ？」
「多少違いはあるけど基本的にはシルトヴェルトと同じ言語ね。シルドフリーデンも、訛りがかなりあるけど同じよ？」
亜人公用語ってことだな。
「ナオフミちゃんはわかってなかったでしょうから教えると、ゼルトブルはどっちの言葉でも通じるから便利な国よー」
「どちらの言葉の店もある、だろ」
ゼルトブルって随分と雑多な感じだったぞ？
雑多すぎて人種差別をする必要がないってくらいな。
「ちなみにフォーブレイ公用語ってのもあるのよ。そっちがメジャーね」
「なるほどな」
勇者の国ということは高貴な生まれ……貴族が好む言語とかだろう。

昔の英国では言葉の使い方で階級がわかったというし、フォーブレイもそういう文化なのかもしれないな。

とはいえ、そっちはどうでもいい。

いずれ行くことになるのだろうが、今はシルトヴェルトの方が先だ。

「それでナオフミ様、フォウルくんとアトラさんのために寄り道するんですか？」

「ついでに寄るくらいはしてやってもいいが……」

それでモチベーションが上がるならやらない手はない。

帰りたいのに帰れない俺からすれば、故郷に戻ってみたい気持ちは非常によくわかる。

「できれば寄ってほしい。アトラに家を見せてやりたい」

「興味ないですわ。そもそも私は目が見えませんわ」

その割には見えているかのように歩くけどな。

本人曰く、気を感じるらしいけどさ。

「……」

この温度差のある兄妹は何なんだろうな。フォウルが哀れに見えてきた。

「……帰りとか余裕ができたら行ってやるか」

若干しょぼんとしたフォウルが哀れでしょうがないので、後で行ってやろう。

「あらー」
「ナオフミ様に同情の表情が見えましたよ」
「お兄様！　尚文様の同情を買うとは卑怯ですわ！」
アトラにまで言われるとか……ますます可哀想に思えてくるぞ。
「うるさいうるさい！　俺をそんな目で見るな！」
と、叫ぶフォウル……なんか良いことがあるといいな。
むしろアトラはどれだけ過去を振り返らないのか。
「ま、廃屋だったら家捜ししてみるか」
「俺達の家に何をする気だ！」
「良いものがあるかもしれないだろ？」
元々ハクコ種の王族の家……別荘か何かだろ？　家宝とか眠っているかもしれないじゃないか。
「ま、誰か別の奴が住んでいる可能性が高いがな」
どんな場所なのか興味があるのも嘘じゃないし、とりあえずは……な。
「……そうだな。何か勇者の力になるものがあったのかもしれない」
フォウルはなんか頷いている。

そんなこんなで翌日。
出発前にメルティとエクレールが住んでいる町の屋敷に顔を出す。
屋敷の庭にいるエクレールが朝だというのに疲れているように見えるのは気の所為だろうか？
で、錬と一緒に素振りを始めた。
「ああ……素振りをしている時が一番安らぐ……」
「安らぐのか？　これが騎士道というものなんだろうか？」
錬と訓練をしている時が一番輝いているように見えるぞ。
さすがの錬も首を傾げている。かなりシュールな光景だな。
「じゃあついてくる連中は待っていてくれ。ラフタリア、任せたぞ」
「あ、はい……じゃあナオフミ様が来るまで時間がありますし、エクレールさん達と一緒に素振りをしてましょう」
「気持ちはわかりますが、もっと高度な鍛錬をするべきだと思いますわ。模擬戦を提唱します」
「朝の軽い運動なんですから、そこまでやると体力がもちませんよ」
「これだからラフタリアさんは……だからここの方々が見出そうとしている流派の本質を

まだ理解できていないのですわ」

「アトラさん……貴方という人は……」

なんかラフタリアとアトラが言い争いを始めているが、聞かなかったことにしよう。

そうして屋敷の中に入ってメルティを捜す。

すると朝早くからなんか書類の山のある部屋で書類の整理をしているようだった。

「あ、ナオフミじゃないの」

「フィーロと一緒にここにいると聞いてな。フィーロを迎えに来た」

「ああ、そういうことね」

疲れなのかメルティも椅子に腰かけてぐったりしている。

逆にフィーロは元気が良さそうにキョロキョロしているな。

「で？　メルティ、女王と話ができたか？」

「ええ、母上と話をしてきたわよ」

メルティは女王と話し合いをした結果、余計な騒ぎにならないようにここで留守番することになった。

領主代理を任されたエクレールの補佐……ではなく監視役として仕事を見るつもりらしい。

だから書類は弄っていない。
「まあ、妥当な選択だな」
「そりゃあね。さすがに私が同行するのは難しいわよ。それでなんだけど、現地で馬車を用意するんでしょ？」
「ああ」
「シルトヴェルトの方に情報は提供したから、現地に使者が来て馬車を用意してくれるって話を母上から言付けられたわ」
「おお、それは助かるな」
現地で馬車を買うにしても借りるにしても金が掛かりそうだと思っていたんだ。
作るのは勘弁だったから丁度良い。
「ただ……ナオフミがシルトヴェルトに行くっていうのはかなり外交的な問題が起こるから十分に注意するのよ？」
「わかっている。だからといって俺以外の勇者共に行かせて話が上手くいくのか？」
「……難しいでしょうね。むしろナオフミの意見以外、聞く耳を持っているかどうかすら怪しいわよ」
だろうな……ぶっちゃけ盾の勇者のホーム球場みたいな場所である半面、厄介な国の問

題を抱え込むことになる。
今まではラフタリアの故郷の復興とかを言い訳にして行くことを避けていたが、そうも言ってられない状況になってしまった。
できれば世界が救われるまで行きたくなかったが、しょうがないと諦めよう。
逃げていたって始まらない。ラフタリアのために面倒事を突破していかないといけないわけだ。
「まあ……メルロマルクの問題はわたしと母上、国の重鎮が大分片付けているし、大きな問題に関していえば……一応、ないわね」
「お前の姉と脱走した三勇教徒以外はな」
俺の返答にメルティも頷く。
「姉上はどれだけ愚かなのかしらね……こんなに迷惑をかけて……」
「まったくだな」
樹の仲間達も一緒に消息不明ときてるもんな。
しかも聞いた話だと樹の仲間だった派手な鎧のアイツはメルロマルクの貴族らしい。
どんな暗躍をしているかわからないが、今のところは問題がないと……思いたい。
俺の留守中に何か仕掛けてきても不思議じゃないからな。

「定期的には帰ってくる予定なんでしょ？」
「まあな。メルティも様子を見て襲撃者に備えておいてくれ」
奴等がなにも村だけを襲うとは限らない。
口ではあれこれ言い合う仲だが、俺はメルティのことを気に入っている。
姉と違って常識人だし、義理堅い。
俺に対してだけ少々気性が荒いところもあるが、メルティの歳を考えれば自然だしな。
むしろ嫌いになる要素を探す方が難しいくらいだ。
だから、俺達の問題でメルティが傷付くのだけは避けなければならない。
「わかってるわよ」
「その辺りのスケジュール管理は任せる。錬や樹達を早めに呪いの治療ができるカルミラ島に行かせないといけないしな」
「ええ」
「……思ったんだが、エクレールを左遷してお前がこの町の領主にならないか？」
「なに言っているの？」
「いや、アイツは戦闘では役に立つかもしれないが、現状騎士止まりだ。奴の成長を待っている余裕がない以上、現在任せられる奴……つまりメルティ、お前に任せた方が安心できる」

「そ、そうかしら？」
事実を言っただけなのだが照れているメルティ。
あの女王が親で、しかも姉がダメダメだから教育も厳しかっただろうし、もしかしたらあまり褒められた経験がないのかもしれない。
考えてみれば、今まで同い歳のような馴れ馴れしさで接していたが、メルティはまだまだ子供だしな。少しくらいは褒めておいた方がやる気が出るだろう。
「ああ。お前ならあの女王の後を継いでもなんとかやっていけるだろう、くらいには思っている」
「そう、ナオフミがそんな風にわたしを見ていたなんてね」
少しだけ機嫌が良さそうなメルティ。
やはりメルティは褒めて伸ばすタイプだな。
……まあメルティの場合、叱られても伸びるとは思うが、それはメルティが何をされても潰れない性格なだけだ。
モチベーションのために何事も褒めていくのがいいだろう。
増長する奴でもないしな。
「というわけで俺が留守の間を任せたぞ」

「わかったわ！」
俄然やる気を見せているメルティ。
昨日、俺に向かって魔法を放ってきた奴と同じには見えないな。
ともあれ、これで領地の方はなんとかなるだろう。
少なくとも領主として未だに結果を残せていないエクレールに任せるよりは遥かにマシだ。
……後日、エクレールに思い切り睨まれたのは蛇足か。
「じゃあそろそろ出発するか。現地に馬車を手配してあるんだったな？」
「そういう話になってるけど昨日の今日だから、実際に用意されているかどうかは行ってみて確認しなさい」
「ああ。じゃあフィーロ、出発するぞ」
「はーい！」
フィーロが元気よく頷く。
絶好調のフィーロが馬車を引くか……ラフタリアとかは慣れているが他の連中は不安だろうな。
「じゃあフィーロ、移動先に適当な馬車が用意されているから、みんなを連れて言った通

りに移動するんだぞ？」

「うん！　馬車ー」

　ああ、そういや約束してたもんな。安物でいいのが助かるな。

　ピクッとフィーロが俺を見上げる。

「……もしかして約束の馬車？」

　ここで頷いたらフィーロがすねるような気がするが、知ったことではない。

「そうだ。安物でも我慢しろよ」

「むー！　もっと良いのがいいー、前のより良いのがいいのー、作ってもらうのー！」

　フィーロは元康（もとやす）に奪われてから、お気に入りの馬車がないもんな。

「我慢しろ。がんばったら良いのを手配してやるから」

「うー……がんばるー！」

　まあ、運気が斜めに傾いたフィーロには何か良いことをしてやろうと思っているし、今回の問題が片付いたら用意してやろう。

　なんて考えながらラフタリア達のところに戻ってくると……。

「見よう見まねの変幻無双流奥義・一の型、陽ですわー！」

「あ、ナオフミ様」

アトラとなんか熾烈な争いをしていたっぽいラフタリアが俺達に声を掛けてきた。
エクレールや錬、フォウルやいつの間にか来ていたリーシアが青ざめた表情で二人の戦いを見ている。
「ふぇえ……なんでアトラさんができるんですかぁ……」
「ババアが才能があるとか言ってただろ」
「う……俺達が必死に修行しているのに、近くにいるだけでできるようになるだと……」
悔しがるなって。見よう見まねなんだからどっか間違って覚えている可能性が高い。
現にラフタリアに攻撃を捌かれてるじゃないか。
まあ、ラフタリアもアトラの相手をずっとしていて腕を上げているんだろうけどさ。
俺もそろそろ気とやらが見えるように開眼したいところだ。
「あらー」
サディナもいつの間にかいるな。
「こうかしら？　ちょっと難しそうね。疑似的に真似する時はお姉さんだと魔法に頼ることになりそうね」
……そういやサディナは魔法でセルフブーストしてたよな。
ドライファ・ライトニングスピードだったか？

他にも雷神降臨とかもあるし……漫画とかだと電気使いって体の電流を操作してーって感じで気も使いこなせそう。覚えるの早そうだもんな……。

「稽古はそれくらいにして出発するぞ」

「わかりましたわ！　ささ、ラフタリアさん、いつまで稽古をしているつもりなのですか？」

「貴方が言うんですか？　実戦さながらの稽古までさせた貴方が！」

ラフタリアも大変だな……ま、そのアトラの舵取りはフォウルにさせたいのだが。

「フォウル、お前の妹の暴走をちゃんと止めろ。ラフタリアの手を煩わせるなよ」

「く……」

いや、そこで呻かれてもな。

「何か問題があったらラフタリアと一緒にアトラを止めろ。さすがに二人がかりなら止められるだろ」

「どんな障害であろうとも乗り越えてみせますわ」

乗り越えなくていいと、俺がつい言ったあとのゴタゴタは省略する。

「とりあえず、シルトヴェルトでは亜人が一緒の方がいいだろうな。ラフタリアは鉄板でサディナ……フィーロは当然」

後は誰を連れていくか。

「一応アトラとフォウルか。ただ、外交問題で何かあるようだったら即座に事情を説明しろよ」

何かの役に立つだろうと思ってのことだ。

「当然ですわ。ね？　お兄様」

「ああ。依頼人の不利になるような真似をするのは金をもらった傭兵としてやってはならないことの一つだ。ただ、それも依頼人次第ではあるが……今は断る理由がない」

なんだかんだいってフォウルも一応、その辺りは理解してるのな。

むしろ妹の所為で冷静でいられないだけ……か。

「あんまりぞろぞろと連れていくのもどうかと思うし、この人員で行くか」

「ラフ？」

「もちろん、ラフちゃんは連れていくがな」

俺がラフちゃんを抱き上げて言う。やっとフィーロの頭から下りたんだ。

「む……」

アトラがなぜかラフちゃんを見つめる。

「お前はラフちゃんにまで嫉妬するのか。残念だがそれは許さんぞ」

ラフちゃんに乱暴は許さん。
ラフタリアを相手にするのは修行相手だから認めてやるがな。
「前よりも力の密度が上がっていますわ……強くなりましたね」
「ラーフー」
「そうなのか？」
フィーロの頭に乗って、何かをしていたらしいが……変異性を上げた影響が出始めているのかもしれない。
ステータスを確認する。
「お？　Ｌｖのアイコンがあるぞ」
「ラフー」
どうやら変異したお陰で今までなかったＬｖ制度が導入されたらしい。
素晴らしい。フィーロよりもＬｖを上げて戦力にしたいな。
「ナオフミ様？」
「まあ、どっちにしてもここで話をしていたって始まらない。今日中にはシルトヴェルトに入るから十分に注意しておいてくれ」
「わかりましたわ！」
アトラの元気な返事が印象的だった。

三話　シルトヴェルト来訪

そんなこんなでポータルで移動すると、移動先の近くの村で仰々しい格好をした獣人達が幌馬車の前でキョロキョロしていた。

もしかしてアイツらか？　仕事早いな！

「あ、お久しぶりです」

俺を見てペコリと頭を下げるが、俺は首を傾げる。

お久しぶりと言われても知らんぞ。

誰だろうと思って見ていると、それを察したのか俺の機嫌を取るかのように姿勢を低くして目の前の獣人が答える。

「覚えておられませんでしょうが、盾の勇者様が異世界に来て数日後に勧誘した者です」

「あー……」

あの頃は近づく者全てが俺を騙す敵だと思っていたから、よく確認してなかったんだよな。

どうやらその時に俺を勧誘した奴らしい。

……罵って断ったような気がする。

「メルロマルクからの知らせを聞いて……馬車をご所望ということでしたので、我が国として急いで用意したものです。申し訳ありません、情報に間違いがあったでしょうか？」
「間違いはない。むしろ仕事が早くて驚いているくらいだ」
「それは何よりでございます」
すっげー仕事が早い。昨日の今日だぞ？
どういう情報経路があるのか後で聞きたいところだ。
「道中護衛致しましょうか？」
「道はこっちが決めるから勝手についてくるならいいだろう」
「御意」
なんだろうか。絶対の忠誠を誓われた感じで落ちつかない。
「じゃあフィーロ、この馬車を引け」
「はーい」
フィーロが割と機嫌良く馬車を引こうと前に出る。
「他の連中はさっさと馬車に乗れよ。とはいえ、先に罠とかないか調べるがな」
「念には念をですわね。さすが尚文様、たとえどんなに友好的に近寄られても警戒を忘れないのですわ！」

なんだろう。最近アトラにこう言われると逆のことをしたくなる。
自分のやっていることが実は間違っているんじゃないか？　と思えてきた。
「まあ……警戒することは重要ですよね」
ラフタリアが同意する。
うん。俺は間違っていないな。
「じゃあお姉さんも調べるわねー」
「私の仕事ですわ。サディナさんは下がっていてほしいですわ」
「あらー」
まあ……この二人って気とか超音波で物を確認できるから、いたら便利だよな。
なんてやり取りを横目に馬車の中を確認する。
うん。特に何も置かれていない。余計なものとかあったら俺が嫌がるとか考えてのことか。
幌にも特に仕掛けはなさそうだ。
後は魔力的なものと床板の隙間とかに変なものが挟まれていないかのチェックだな。
なんて確認しているとアトラとサディナが俺に声を掛ける。
「特に仕掛けの類は見つからないわねー」

「同じくですわ」
「ふむ……じゃあみんな乗れ。早めに出発して用事を片付けるぞ」
大人数で移動できる分、馬車は便利だな。
ガエリオンも引けると主張していたが、ここはフィーロを優遇してやらないとな。
少なくとも二日は。
みんなぞろぞろと乗り始める。
シルトヴェルトの使者はフォウルとアトラを見てなんか眉を上げていたけど、まあ気にしない。
「じゃあ出発だ！」
「りょーかーい！　発進ー！」
元気よく頷いてフィーロは馬車を引き始めた。
割と速度が出ているな。
「んー」
フィーロが馬車の取っ手を握りながら呻く。
「どうした？」
何かフィーロにしかわからないものでもあるのだろうか？

罠だったら警戒しないといけない。

「なんか使ってる木が違うねー」

「生態系の違いとかじゃないのか？　この辺りの木を使って作ったものだろうし」

「そうだと思うー」

「メルロマルクの方がいいとかか？」

「んー？　どっちもどっちだから大丈夫」

「そうか」

馬車は移動を開始した。で、途中まではよかったんだが、シルトヴェルトに近づくとどんどん馬車の周りに人が増えて大名行列みたいになってきた。

護衛ってか？　逃げられないように人を集めているようにしか見えないのはなぜだろうか？

まあ、ポータルを使えば逃げるのは簡単そうだけどさ。

で、シルトヴェルトの国境は容易く越えた……うん、人が多くて襲撃とかはなかった。仮に勇者の命を狙ってくるセインの宿敵とかが出てきても、こんな人数は守りきれないぞ。

……むしろ数の暴力で返り討ちにしてくれそうだけどさ。

しかもシルトヴェルト軍までやってきて俺を大層厳重に出迎えてくれた。
「ごしゅじんさまー、なんか歩きづらいよー」
「そうだな……どんだけ大行列にする気なんだよ」
「おい。熱烈歓迎とか書かれてるぞ」
フォウルが道行く町民が掲げる旗の文字を読んでくれた。
うぐ……正直、ここまで歓迎されると気色悪く感じてくる。
召喚された当初にここに来ていれば嬉しい気持ちになったのだろうが、異世界の荒波に揉まれた所為か鳥肌が立って仕方がない。
「さすがシルトヴェルトですわ。尚文様を崇め称えるこの姿勢、素晴らしい国ですわね」
「……ここにも信者がいたか」
「当然の行動ですわ」
フォウルがアトラを見て凄く微妙な顔をしている。俺も同じ顔をしていたと思う。
アトラが量産された国に来てしまったのだろうか？
「サディナ姉さん、本当にここを通らないといけないんですか？」
「さすがにお姉さんも驚きねー……ナオフミちゃんってやっぱり勇者なのね」
俺自身も驚いている。

勇者の威光ってのがどんだけあるのか目の当たりにしたな。

ふと……女王に言われたことを思い出す。

『まず、イワタニ様に姫、貴族の令嬢、様々な種族の亜人女性が関係を迫り、ハーレムが形成されるでしょう』

これだけの熱烈歓迎なら間違いなくそうされそうだ……う、想像するだけで吐き気がする。

そもそもメルロマルク内でも、俺に因縁を付けてきた冒険者とか騎士団長とかが殺されている、とか以前聞いた気がする。

で、種馬の如く使われた後は……。

『原因不明の病に冒され……哀れにもイワタニ様は』

これはできる限り避けたい。

それこそ、俺はシルトヴェルトに何かするつもりはないと伝えて、やるべきことをしてササッと出ていこう。うん、そうしよう。

「できる限り早めに国を抜け出せるように努力しよう」

とりあえず奴等の目的を含めてできることからやるしかない。

そんなこんなでフィーロに馬車を引かせ、翌日にはシルトヴェルトの城に到着した。

パッと見の城の外観は……中華風の中に石造りの西洋建築を取り入れたって感じだ。
無駄なコントラストというべきなんだろうか？
城の大きさだけでいうならメルロマルクとあまり差がない。
だが、こう……亜人や獣人基準なのかメルロマルクと比べたら扉や橋、旗などのサイズが大きく見える。
しかも蔓に覆われているし……野性的な印象というのか？
まさしくファンタジーとかで亜人獣人が根城にする城みたいな野蛮そうな雰囲気だ。
馬車から後方を確認する。
シルトヴェルトの城下町……メルロマルクと似た感じの作りだったけど、森とかジャングルみたいなところが塀の外にあったな。
建物自体も少し雑で、地面は石畳じゃなくて、土と芝が場所によって交互にあった。
種族的な問題なのか？
メルロマルクで見慣れていた所為か文明レベルは若干低めな印象がある。
ただ、売られている武器とか食料店の品揃え、露店の雰囲気は負けず劣らずってところだったと思う。
それで、城下町の広場に面したところには大きな野外ステージ……あれって教会だった

のか？
　そこに盾のシンボルが大きく掲げられていた。
「こちらです。盾の勇者様！」
「あ、ああ……」
「馬車はどうするのー？」
「その辺りに放置しておけば誰かがしかるべき場所に駐車してくれるだろ」
　ここはお任せを、とばかりにフィーロから馬車を引く取っ手を引き継ぐ獣人がいる。
　見た感じ牛系……ミノタウロスみたいな筋肉質な獣人だ。
　あれなら確かに馬車を引けるだろう。
「わかったー」
　俺達は馬車を降りてゴクリと息を飲んでシルトヴェルトの城を見上げる。
　本来は俺を信仰する国の城……なのに、なぜだろうか禍々(まがまが)しい魔城のように見えてしまう。
　きっと俺自身が空気に飲まれてるんだな。
　気にしないようにしていかなきゃな。
　そう、メルロマルクの城みたいにズカズカと入れるように。

「お兄様、ここは胸を張っていくのですわ。なにせ、ここは尚文様の国のようなものなのですから」

「城に入った経験はほとんどないけど……落ちつかないな」

「は、はい」

「行くぞ」

俺の国じゃねえよ！

とは思うが盾の勇者を信仰している国となると一理あるから否定もできない。

だが盾の勇者の国であって俺の国じゃねえ。

まあ……国民は村の連中と同じだと思うようにすれば安心できるかもしれないけどな。

城に入ると案内員みたいな奴に声を掛けられて割と早く玉座の間に通される。

「これはこれは盾の勇者様、長旅ご苦労さまです」

玉座の間ではなんか赤い派手な羽を腕や肩に生やした男性が出迎えてくれる。

フィーロみたいな天使っぽいんじゃなくて手足がどことなく鳥っぽい。

鳥系の亜人、もしくは獣人なんだと思う。
年齢は……二十代くらいだろうな。若作りなのかもしれないけどさ。
「私、シュサク種の代表を務めておりますヴァルナールと申します。以後お見知りおきを」
「シュサク種……？」
シュサク、朱(す)、雀(ざく)か？　フォウル達がハクコだからな。おかしくはないか。
ということは玄武はクロムとかか？　鉱石みたいな種族なのだろうか？
間違ってるかもしれないけど、どうせそんなところだろう。
というか四聖獣辺りを人化させたような種族なのはわかるから想像しやすいな。
「盾の勇者の岩谷(いわたに)尚文だ。仲間を順番に紹介するとラフタリア、使い魔のラフちゃん、フィロリアルのフィーロ、サディナ、アトラ、フォウルだ」
詳しい紹介は面倒だから省略するとしよう。
「よろしくお願いします」
一礼した後、ヴァルナールとやらはアトラとフォウルに一瞬視線を向ける。
ここは外交上、念のために注意しておくか。
「この二人はゼルトブルで奴隷に身を落としていたのを買った。純潔のハクコじゃないらしい。権力問題には口を挟まないと思うが、どうだ？」

俺の念押しが効いたのかハッと視線を戻してヴァルナールは頭を下げる。
「左様でございますか！　わかりました」
効果があったかどうかはわからないがな。
「んー……ねえごしゅじんさま、ここでお話しするの？」
「まあな。暇だろうが我慢しろ」
「はーい」
さて、フィーロが急かしてくれたお陰で話をスムーズに進められそうだな。
フィーロも意外なところで役に立つ。
「じゃあ単刀直入に用件を言うか」
「は！」
ヴァルナールが背筋を伸ばし、敬礼するかのように直立不動で俺を見る。
睨むのとも違う。命令に従う所存だという態度が気になるな。
「別に俺はシルトヴェルトを支配しようとかそういう考えはない。あくまで目的のために立ち寄ったに過ぎない。お前等国の上層部が困るようなことを絶対にしないと約束する。だからクテンロウへの交易船を用意してくれ。早めに国を出るつもりだ」
女王が言っていた、俺がシルトヴェルトへ行くことでシルトヴェルトの上層部が困るだ

ろうことを先に潰しておく。
するとヴァルナールは、は？　って呆気に取られたような表情をして首を傾げていた。
「なるほど、盾の勇者様は誤解をなさっているようですね」
「何？」
「まずは長旅の疲れを癒していただき、今夜の夜会に参加してもらってから話を聞いていただいてもよろしいですかな？」
「急いでいるんだが……」
ぶっちゃけクテンロウの刺客共を黙らせることが優先事項なんだ。シルトヴェルトで立ち往生なんてする気は毛頭ない。
「そもそもお前等上層部だって俺がいたら困るだろ？」
「……確かに盾の勇者様がいらっしゃることで困る者達がいないとは言い切れません。ですが、そのような膿を出すのも必要なことだと思っております」
しかし、とヴァルナールは強調して続ける。
「それよりも前に、まずしなくてはいけないのは盾の勇者様に対して忠義を示すことなのです。これは通過儀礼だと思ってください」
面倒くせー！

なんていうかやんわりと俺を抱え込もうとしている匂いがプンプンする。

真綿で首を絞めるように取り込まれてしまいそうな気がするんだが……断ったら協力を得られないのはあっちも前提にしているだろうしな。

サディナに視線を向けるとしょうがないんじゃない？　って態度で肩を上げている。

「……素晴らしい。尚文様への忠誠を示す……」

約一名、まったく空気を読まずに感動している奴がいるのは無視しよう。

「さあ！　どうかごゆっくりとお休みください。話はそれからでも遅くありません」

まったく引くつもりがない態度に早くもウンザリしてきた。

会話をしているようでしていないこの雰囲気はイライラする。

最近の元康(もとやす)や以前の錬(れん)や樹(いつき)を思い出す。

「……わかった。だが、俺の言葉を無視したらどうなるかわかってるんだろうな？」

ここは盾の勇者を信仰している国と聞く。それこそポータルで城から出て大声で国の悪口を吹聴したらどうなるだろうな？　あんまりふざけたことをするなよ？

と、視線で脅す。

「もちろんでございます」

仰々しい礼だな。

「それでは盾の勇者様と同行者の皆さまはそれぞれ招待客用の客室へとご案内いたします。ゆっくりとお休みください」
「別室は困るんだが……」
俺単独での行動はできれば避けたい。
まあ、今の俺に何か仕出かしたとしても、俺の行動を止められる奴はいないと思うが……念のためだ。
「盾の勇者様と他の方を同列に扱うというのはできかねます。私達の信仰を冒涜することになるので」
うーん……一応理解できなくはない。
社長と平社員を同じ扱いで接待しろと言っているようなものだ、と言っているんだと思う。
無理だろうとは思うが、社長が命じているんだから柔軟に対応しろとも言いたい。
「尚文様の隣の部屋を用意できないのですか？」
アトラが一歩踏み出して尋ねる。
ヴァルナールは俺の顔を見てからしばし考える。
これさえできないというのならさすがに譲歩できないぞ？

俺の考えを読んだのか、ヴァルナールは頷く。
「承知いたしました。すぐに用意いたしましょう」
ふむ……アトラのファインプレーに助けられたか。
奴等の理屈だと俺がスイートルームで他の……ラフタリア達はスタンダード……下手すりゃ俺に気付かれないように城から追い出されるかもしれない。
まあ、この面子相手にそれができるとは到底思えないがな。
ヴァルナールの案内のもと、俺達は城の客室で休むことになった。
……のだが。

四話　獣王の盾

「ここって客室じゃなくて王族の寝室なんじゃないのか？」
城の最上階、見晴らしのいいテラスのある大きな部屋に俺だけが案内された。
で、ラフタリア達には王族の指示でいつでも駆け付けられるような使用人の待機室が用意された感じだ。

ベッドしかない、まさに仮眠室って感じの部屋だそうだ。
一応、他の部屋もあるらしいが少し離れている。
「そう……ですね」
ラフタリアが室内を調べながら呟く。
「この部屋で何人も寝れるだろ」
「それは困ります。どうか盾の勇者様のお仲間の方々……ご理解ください」
低姿勢な様子にみんな対応に困っている。
「わかりましたが……」
「隣室に待機できるなら問題ないですわ」
「アトラ！」
「ベッドふかふかー。え？　乗っちゃダメなのー？」
フィーロがベッドに乗ろうとしてメイドっぽい奴に止められている。
どうもいやーな空気が充満しているな。
やはりシルトヴェルトは面倒な場所のようだ。
「それでは仲間の皆さまのお部屋に案内いたします。どうかついてきてください」
案内に俺もついていこうとしたらなんか止められる。

「盾の勇者様は部屋でお休みください。すぐに国の重鎮との謁見、その後、夜会、入浴……就寝となります」
「あー……俺の自由行動はいつだ？」
「常に自由行動の時間でございます」
「じゃあ謁見は後な。仲間と話がある」
「それは困ります。どうかご辛抱を」
自由じゃねーじゃねーか！
イラッとしているとラフタリアが慌てた顔をする。
「ナオフミ様、少しの辛抱です。ここで怒っても解決しないと思います」
「いえ、尚文様の機嫌を損ねた、ということは罰を与えるべきですわ！」
アトラの極端な主張で怒りが僅かに晴れる。
というか……それはどこの暴君だ。俺は独裁者の自覚はあるがまだ暴君じゃねえぞ。
落ちつけ……とりあえず、円滑に交渉するためにはある程度の譲歩はしておくべきなのは確かだ。
「わかった。今日だけだからな、ただし」
俺はラフちゃんに向けて手招きする。

「ラフー？」
近寄ってきたラフちゃんを抱え上げてから告げる。
「ラフちゃんだけは俺の傍にいることを許可しろ。俺のお気に入りのペットなんだ」
「わ、わかりました」
ペットならばいいと、シルトヴェルトのメイドっぽい連中は妥協した。
俺は渋々ベッドの方へ歩き、ラフタリア達に手を振る。
「ラーフー」
「何かあったらお願いしますね、ラフちゃん」
「ラフ！　ラフラフ！」
ラフちゃんは任せろとばかりに立ち上がって胸を叩く。
おー可愛いな。
まあ、ラフちゃんは俺と同じくラフタリアと魔力的な何かで繋がっていて、信号を飛ばせるらしい。いざって時は警報代わりになるだろう。
「それでは……」
「私は隣室で待機しますわ」
「気持ちはわかりますが、まずは客室に案内するそうです」

「ほら、行くぞアトラ！　アイツは俺達とは釣り合わない雲の上の存在なんだ」
「ああ、尚文様ー」
思いっきり嫌味臭い言い回しでフォウルはアトラを引っ張っていく。
フォウル……お前には同情していたが、あれはやっぱ無しな。
「じゃあナオフミちゃーん。後で会いに行くわねー」
「ああ」
些か不安だが、俺はラフタリア達を見送ったのだった。

「ラフー」
ラフちゃんが部屋の中を探索する光景に心を癒されながら、テラスの方からシルトヴェルトの城下町を見る。
日が若干傾きつつあるが夕日ってほどじゃない。
シルトヴェルトの街並み……メルロマルクと比べると野性味が溢れてるのは来るまでにわかっていたが……上から見ると更に歴然としているな。
亜人って大きさに統一感がなくて、大きい奴もいれば小さい奴もいる。
遠目で見る分には面白そうではある。

亜人、獣人……村の連中でさえ個性的なのが多いんだ。いろんな種族がいるのだろう。
建物もこう……原始時代っぽいデザインのものもあれば木造の建物もある。
中華風な要素もあって、メルロマルクよりも本当……雑多な国なんだな。
「ラフー？」
「ん？　どうしたラフちゃん」
ラフちゃんが暖炉の上に飾られている盾を凝視している。
祭式用の盾……だよな？
豪華な感じだし、ただ所々に傷があって……何だろう、いろんな皮をなめして張ってあるのがわかるぞ？
一応コピーできるか試してみるか？　外して持ってみる。

ウェポンコピーが発動しました。
獣王の盾の条件が解放されました。

獣王の盾　0／80　C
能力未解放……装備ボーナス、獣人の能力上昇（大）　亜人の能力上昇（大）
スキル『獣化補助』『領地の改革』

専用効果　忠義の力

うわ、それっぽい！
獣の王か。
……盾の勇者って獣の王様なのか？
なんか脳裏にフィロリアルとドラゴン、そしてラフちゃんが浮かぶ。
複雑な心境だ。
「ラフー？」
ラフちゃんが微妙な顔をしている俺を心配そうに首を傾げながら見上げる。
気にするなと微笑んでから再度盾を確認。
「獣化補助……？」
試しに使用しようとしたのだが、使用不可という文字が浮かび上がった。
何か条件でもあるのだろうか？
能力上昇はなんとなくわかるし、亜人の能力上昇ってのもな。
ステータスは……？
なんだこれ？　数字が安定しない。見る度に変わるぞ。

高いような……低いような？　変わった盾だな。
とりあえずは解放させておくのがよさそうだ。
……盾の勇者を信仰する国なんだから武器屋にも俺の知らない盾とか並んでそうだな。
後で能力を上げるために覗いておこうか。
「領地の改革ってなんだ？」
試しに使用しようとしたのだが、視界に地図が出るだけでよくわからなかった。
なんか俺の領地辺りが光っているのだが、使おうとすると圏外と出る。
村に戻った時にでも使用してみるか。
「……俺が城内を探索するのは許可されていないのだろうか？」
来賓って感じなんだろうが、下手に見られたら困るところとかがあるのだろうか？
まあ、メルロマルクだってそういう場所はあるんだし、城の中を物色するほど俺も野暮じゃない。
ただ、RPGで言うところの宝とか気になるよな？
俺のものにならないとしても、盾があるといい。
コピーすれば強くなれるだろう。
よくよく考えてみれば、錬や樹にだってそういう国があるかもしれない。

余裕があったら錬や樹も他国の……剣だけとか弓だけ信仰してる国に潜入させてみるかな？

俺だけって不公平だし。

「盾の勇者様、国の重鎮が揃ったので謁見をお願いいたします」

「……ああ、わかった」

どうやら俺の仕事とやらが始まったみたいだな。

「ラフー」

ラフちゃんを抱えて俺は案内に従っていったのだった。

案内されたのは円卓の間みたいなところだ。

メルロマルクの会議室なんかよりも遥かに大きいな。

そう思っていたが、俺を待っている重鎮共の姿を見て納得する。

亜人くらいならまだいい。それでも大型だけどさ。

獣人クラスになるとかなりデカイのがいる。

よく考えてみればサディナとか獣人形態では大きいか。

「盾の勇者様に敬礼！」

全員が立ち上がって俺が入ると同時に敬礼をした後、祈りを捧(ささ)げている。
う……凄(すご)くいづらい。
「ラフー」
思わずラフちゃんを抱える力が強まる。
「この度はシルトヴェルトへのご帰還、誠に喜ばしいことでございます」
「ご帰還って……俺の家はここじゃないぞ」
「いえいえ、盾の勇者様といえば我らが国シルトヴェルトの勇者。他国に召喚されたとしてもそれは遠征となるのでございます」
あー……つまり盾の勇者は最初からシルトヴェルトにいて、他国には出かけたことになっているということか。
ぶっちゃけ面倒臭い。
面倒事を全て女王やメルティに預けておける環境がやっぱり心地良いな！
「ではまず自己紹介から始めます。よろしいでしょうか？」
「ダメだと言って話が進むのか？」
司会っぽい重鎮が俺の返答に呆気(あっけ)に取られている。
「も、申し訳ございません！　どうかお怒りをお収めください！」

だから俺の発言一つで人生がダメになるかのような反応をするなっての！
　思い切り溜息をつく。
「別に怒っちゃいないから早く続けろ」
「は！」
　また敬礼された。堅苦しくてウンザリする。
　早くラフタリア達と話がしたい。つーか逃げたい。
「では――」
　と、一人ずつ自己紹介を始める。
　合計十人か……？　本当はもっといそうだな。
　その中でも格上の代表なんだろうか？
　そんでライオンとかそれっぽい獣人や亜人が色々と紹介された。
　マンモス獣人みたいのがいる……そりゃあこんだけ巨漢なら部屋もでかくする必要があるよな。
　俺が凝視していると、なんか恥ずかしそうにみんなして視線を逸らす。
　何か勘違いされていないか？
「で？　謁見をしたのはいいが、何を話すんだ？　俺は目的があってこの国に来たからそ

の用件を言えばいいのか？」

「いえ、その話は後日となります。まずは盾の勇者様に、彼の国メルロマルクでのご活躍を直接語っていただきたく思っております」

どうでもいいわそんなもん。口伝とかで片付けろ！

とは思ったが、直接聞くことに意味がある……とかだろうか。

「その後、我が国の兵達の強さを見てもらい、国の歴史、現状、そして未来を知っていただきます」

「いやいや、そんなの勝手にやってろよ」

「ですが、来るべき波に備えておかねばなりません。盾の勇者様のお耳にも入れてもらわねば困ります」

「あー……」

俺が本来管轄すべき地域で、それを女王の指示でどうにかメルロマルク近隣だけで済むようにしてもらっていたわけだし、霊亀の件で波がしばらく発生しないだけなんだよな。

だが、シルトヴェルトにも勇者……七星勇者がいるはずなんだが。

「そういやこの国を管轄してる勇者とかはどこにいるんだ？」

俺の問いに重鎮共は視線を逸らす。

なんで目を逸らすんだよ？
七星にはメルロマルクに来るように指示してるだろ。
しかも女王経由で、勇者殺しをしようとしている勢力についての話を伝えてるんだぞ。
「何分、我が国を守る七星勇者様は鍛錬に身を置く方で、必要な時以外はあまり人前に出てこないところがありまして……」
「それって消息不明と言わないか？」
「招集には応じることが多いのですが、何分……霊亀の件もあって更なる強さを得るためにと修行の旅に出てしまいました」
勇者の強化方法の共有とかすればあっという間に強くなれるというのに面倒臭い。
かといって絆達の世界のように七星勇者共が碌な奴じゃなかったら強化方法を教えるのは自殺行為なので信用できるか判断できるまでは教えられない。おまけに勇者殺しの刺客までいる状況か。
「とりあえず草の根を分けてでも捜して連れてこい。今後のことを考えるだけでも必要だろう」
「仰せのままに」
まったく……。

「鳳凰（ほうおう）が現れるまでに俺のところに顔を出すようにな」

さて、とりあえず話をしなくちゃいけないことは山ほどあるような気がするが、先に進めるとするか。

「お前等は俺が何の用でこの国に来たのかはわかっているな？」

「えー……」

「確認している最中でございます」

「盾の勇者様のご帰還を我が国は全力で祝い申し上げます」

一同がそれぞれ別々の反応を示す。

おい、最後。人の話を聞いていたのか？

パン！　とライオンっぽい獣人が手を叩いて注目を集める。

「みんな！　盾の勇者様の言葉は絶対。それは我がシルトヴェルトにおいては何よりも優先すべき案件なのは確かではないのか？」

「「おおー……」」

ふむ、コイツは話を理解していると見てよさそうだ。

「早々に我が国から去り、世界のために行動しようとなさっている。それは勇者として世界をより良くしようとしていることの表れ。そのために……世界から争いをなくすのが我が国のするべきことでしょう」

「おい、何を言ってるんだ？」
なんか曲解しているぞ！
「誰が――」
「そのためにすべきことは軍事拡張。勇者様のお力を受け、更なる強さを掴み、無敵の軍団を作るのが当面の課題ではないのか！　勇者様の領地の者達のように！」
俺の制止を大声で遮ってライオン獣人が言い放つ。
みんな賛同して拍手を始めた。
「おい！　聞けって――」
「ラフー？」
あまりのうるささにラフちゃんが耳を押さえる。
「それでは勇者様！　後々勇者様のご加護を我等民達に施してくださるようお願いいたします！」
それってお前等を奴隷にしろということか？
もしくはパーティー編成で軍団指揮をさせろとか……。
「では勇者様の方針を固めるために我等は更なる会議を致します。次の会議へお急ぎください！」

「は？　誰が――」

言い切る前にライオン獣人の指示で部屋から出るように急かされる。

やばい！　コイツ等完全に俺の話を聞く気がないぞ！

くそ！　下がってたまるか！

「ハ！　勇者様を追い出すなどできるはずもない。我らで話を進めようではないか！　では失礼いたします！」

俺が下がらないと悟るなり全員が揃って円卓から立ち上がって出ていった。

まるで逃げるかのように。

「おい！」

「それでは後日！」

バタンと扉が閉じられて、案内員以外がいなくなった。

くそ……こりゃあ相当強引に俺を拘束する気みたいだな。

……黙って逃げるか？

しかし、そんな真似をしようものならクテンロウへ行く手助けをしてもらえなくなる。

というか……この重鎮のいる会議だと四聖獣みたいなのがいるかと思ったがいなかったな。

で、誰もが「用事が済んだら早急に国から出たい」と俺に言わせないように、勝手に喋(しゃべ)っては逃げるようにどこかへ行ってしまう。
　面倒臭いことこの上ないな。
　完全に無視して強引に言い付けるか？
　とはいえメルロマルクとの外交問題になるような勝手な解釈をされそうでな。
　よし……あまりにも目につくようなら言いつけてやろう。
　なーんて思っている間に日が暮れてきた。
　確か盾の勇者の帰還という名目で夜会が開かれるんだったか？
　その時にでもラフタリア達に会えるだろうか？
「そういやラフタリア達はどうなったんだ？」
「ラフー？」
　俺の問いにラフちゃんが何やらジェスチャーで俺に伝えようとしてくる。
「んー……個室、訓練？　違う？　講義？　俺？　本？」
　ラフちゃんが色々と指差したりポーズを取るその姿がちょっと微笑ましい。
「これを総合すると、どっかの部屋で俺との出来事を話しているってところか？」
「ラフ！」

ラフちゃんが元気よく頷く。
なるほどな。だからこっちには来ていないと。
「ラフー」
「お？　話が終わった感じか？」
「ラフー」
その後、ラフちゃんはご飯を食べるポーズを取る。
ああ、パーティー会場の方へ移動したってことか。
「盾の勇者様、夜会の準備が整いましたので、出席をお願いいたします」
「ああ」
「その前にお着替えを致しますので、どうか無礼をお許しください」
と、何人ものメイドっぽい連中が俺を取り囲んで着替えさせようと手を伸ばしてきた。
「着替えくらい一人でできる！　俺は貴族じゃなくて勇者なんだからその程度はさせろ！」
「は、は！　失礼しました！」
「ああ、別にお前等に怒っているわけでもないし、お前等が気に入らないってわけじゃないからな」
まったく……面倒なことばかりしやがって。

メルロマルクだと元康辺りがやってもらってたことなのだろうか？
錬や樹にも後で聞いてみるか。
少なくとも女王はその辺り、割と雑というか俺が嫌がることをしない、いい塩梅の優遇だったな。
で、用意された……なんだこの服は。パンクファッションなのか。
襟とかファーが掛かってて……できそこないのロック歌手みたいな服だ。
しかも肉食獣のかぶり物込み……。
マジでこんな服を着ないといけないのか？
「……」
着ないと注意されるんだろうな……だが、このセンスは受け入れがたい。
「ラフー？」
「よし、頭の装備はラフちゃんで代用しよう」
「ラフゥ……」
なんかラフちゃんが恥ずかしそうにしているが、着替えた俺はラフちゃんを頭に乗せて部屋を出た。

「盾の勇者様のおなーりー！」

ファンファーレと獣の雄叫びみたいな楽器演奏と共に、会場のステージみたいなところに案内された。

滅茶苦茶人が集まってんな！

しかも亜人獣人の国故に人の大きさがバラバラだ。

遠くにはデカイ獣人とかいるし、拍手とか効果音が盛大に聞こえてくる。

「ラフー」

「悪いなラフちゃん」

大きな音に対してラフちゃんがちょっと嫌そうにしている。

「盾の勇者様に祈りを……」

……で、なんで会場のほとんどの連中が手を合わせて祈ってんだよ。

メルロマルクでも神鳥の聖人とか呼ばれていたけど、ここまでのことにはならなかったぞ！

「それでは――皆さま、盾の勇者様への拝謁が終わりましたのでお食事をお楽しみください」

今、俺に喋る猶予を与えなかったよな？

きっと俺の一言とかを予定していたはずだろ。
まあ、この場で俺がクテンロウに行くために、とか言い出したら困るもんな。
だが、させない。
こんなこともあろうかと俺は盾をボイスゲンガーの盾に変更してメガホンの部分に声を出す。
「あーテステス。どうやら俺に喋らせないようにしているらしいが、メルロマルクで伸し上がった俺をこの程度で抑えられると思うなよ？」
お？　ラフタリア達を発見。
アトラがなんかうっとりするように手を合わせているのは無視する。
「先に言うが、お前等のやりたいこともわからなくはない。だが、今は世界のために行動することが優先するべきことだ。シルトヴェルトの連中のことを考えていないわけじゃないのを知ってほしい」
何も自分の要求だけを主張することが交渉ではない。
ある程度、相手の要求を飲まないと道が開けないのも事実だ。
「少なくとも俺はメルロマルクを攻めるなどと言う気はない。なんのための和平、何のための亜人と友好関係にあるセーアエット領なのか考えてほしい」

ぱちぱちと拍手が起こる。

で、ヴァルナールの方に視線を向ける。

これは脅しだ。だが次に何かあったら脅しでは済まさない。

「さて、これだけじゃなんだ。余興くらいは俺の方でも用意しようじゃないか。せっかくの宴なんだしな」

俺はフィーロを手招きする。

フィーロが自分を指差すので頷いた。

アトラ、お前じゃない。フォウルとラフタリア、止めろ。

フィーロが機嫌良くスキップしてきた。

「な～に？」

「ここで歌え。盾の勇者の仲間として会場を盛り上げろ」

そう言われてフィーロはステージで観客の方を振り返って震える。

この反応……絆の方の世界で見世物にされたことをまだ引きずっているのか？

酒場とかだと平気だったのに、できないのか？

いや、元康の所為か？

「大丈夫だ。さすがに元康はいないだろうし、今回は何かあったら俺が守ってやる」

「えーでも槍の人の時はしてくれなかったー」
「アレはお前が勝手にやったからだ」
　今回は俺が命令したから責任くらいは取るぞ。
「わかったーじゃあがんばるー」
「聞いた奴の耳に残る歌を歌えよ」
「はーい」
　そう言ってフィーロは俺の盾のメガホンの前で歌い始めた。
　酒場でも結構な人気を誇るフィーロの歌声。ぶっちゃけ魔性の歌声を聞いてシルトヴェルトの連中は理性を保っていられるかな？
　中毒性のある歌声でフィーロに歌わせて、奴等の強引なやり方を切り崩してクテンロウ行きの交易船を出す話に頷かせる。
　ま、効果がありすぎて問題が起こったらラフタリア達に指示を出して人混みを掻き分けて混乱に乗じて逃げる。
　フィーロが熱唱する。
　ここまで来ると一種のトリップ状態になるのか、ものすごく集中しているのがわかる。
「あ……あああ……」

観衆の中で耳の良い連中がふらふらとステージ前に集まって、歌に聞き入り始めた。
良い傾向か？　洗脳ソングだな。状態異常魅了とか掛かってそう。
どこから元康の声が聞こえてきそうで怖いけどな。
やがてフィーロが歌い終わる。
するとまばらに拍手が起こり始め、最終的に会場が喝采に包まれた。
「つーわけで盾の勇者として、場を盛り上げることはした。みんな楽しんでくれ……但し、余計な謀（はかりごと）を企（たくら）むならその限りじゃない。じゃあな」
フィーロにみんなの元へ帰るように指示を出す。
フィーロが帰っていくと、周りに人だかりができる。
みんなフィーロを褒めているようだな。
「と、盾の勇者様のありがたいお言葉でした」
「ラフー」
挨拶とばかりにラフちゃんが鳴いた。
下手に制止しようものなら俺の機嫌を損ねると思ったのか、シルトヴェルトの連中が下がる。
俺はそのままステージを下りてラフタリア達の方へ向かう。

まあ、俺を一目でも見ようと人が集まろうとするが、紐で柵が作られて遮られる。
そうだ。それでいい。
ラフタリア達のところに辿り着いた。
「調子はどうだ？　何か不手際とかないか？」
「特にはないです。けど、何を仕出かすかわからないのが怖いですね」
「ラフちゃんの話を聞くと、俺との冒険のこと辺りを聞かれたらしいな」
「ええ、私達の出会いから今までのことを説明させられました。みんなも似た感じですよ」
「ふむ」
「サディナ姉さんとアトラさんが、ナオフミ様と肉体関係があるなんて話をして警戒されたようですが」
あの二人は何をかましてんだ。
特にアトラ、お前はまだ見た目も子供だろ！
まあ……この国には俺をロリコンだと思っている連中がいるみたいだがな。
「この後、村に帰してくれると思うか？」
「帰りたいんですか？」
ぶっちゃけ、今すぐ帰りたい。

どこをどうやったらこの状況でゆっくり落ちつけというのか。

「まあ、この後は寝るだけだし、明日こそクテンロウへの船の斡旋を頼まないといけないからここで泊まってもいいが……できる限り注意してくれ」

「はい」

さて……と、そう思いながら俺は振り返る。

シルトヴェルトの連中が腫れ物に触るかのように俺の様子を見ているな。

迂闊なことを言ってほしくないって感じだ。

それならさっさと要求に応えて追い出せばいいものを。

なんて思いながらバイキング形式で出された食い物を食べた。

俺専用に用意された食事があるけど無視だな。

「シルトヴェルトの食い物か」

野性味のある味が多いな。臭いといえば臭いが、その分、変わった味を楽しめるともいえる。

「ふむ……村の連中にこれを出す場合は香草の調整をしないといかんな。レシピは……」

食べながら出された料理を分析する。

どうせ土産話をした時に食べたいと騒ぐだろうし、ある程度再現できるようにしておい

た方がいいだろう。

「わかるんですか？　すごく変わった料理ですよ？」

　巾着袋みたいな果物っぽい食べ物を切り分けて中を分析する。

　なんか卑猥に見えるのは俺の気の所為だろう。

「見た目を再現するだけでどうにかなりそうだ。味付けはかなり素材に影響を受けるみたいだけどな」

　特にコレといった味付けをしてないものが多いな。

　その分、素材の方に癖があるみたいだが。

　ま、別の似た料理として村の連中に食わせればいいだろ。

「ラタトゥイユみたいなのもあるな」

「なんですかそれ？」

「俺の方の世界の料理だよ。田舎料理だったかな？　ま、安価だから刑務所とかで出されていた影響か、臭い飯とか嫌な俗称もある料理だ」

　キール辺りは渋い顔をしそうだ。

　アイツ、犬になった辺りから匂いにうるさくなったし。

　ぶっちゃけ、メルロマルクの味付けに慣れた奴だと臭みが強くて食えないかもしれない

な。

「それって料理なんですか？」

「一応な。良い素材を使えばその分美味い料理になる。似た料理にカポナータっていうのもあるな」

「前々から思っていたのですけどナオフミ様って料理に凄く詳しいですよね？」

「そうか？」

「だって村の子が自慢にしていた料理を、少し食べただけでもっと美味しくしちゃったじゃないですか」

「ああ、あの料理担当を落ち込ませたやつな」

こうしたら美味いんじゃないか？　って細工したら料理担当の奴隷のプライドを傷つけたことがあった。

さすがに俺もやりすぎたと反省して、その後は好き勝手に料理させている。

アイツがやりたい時にはやらせておくべきだろう。

正直、俺が料理していると親の仇みたいに睨まれる。

「俺が料理しない方がいいんだろうけどリクエストがな。料理担当は俺を一生憎んでしまっただろう」

「憎む？」
「だって料理してると思い切り睨んでくるじゃないか」
「アレはどんなことも見逃さないようにと、目を皿のようにしてるんですよ！」
「そうか、そんなにも粗を探したいと」
「違います。ナオフミ様の料理を必死に学んで参考にしようとしてるんですよ」
「憎んでないのか？」
「むしろ尊敬を超えた感情を持ってます！」
ラフタリアに断言されてしまった。
そう言われると悪い気はしないが、ラフタリアの主観じゃな……。
「さすが尚文様ですわ。皆様の胃袋を掴んで使役しているのですわ」
その言い方、嫌なんだよなぁ。
どうも村でも隣町でも同じことを言われる。
俺が中毒性のある料理を奴隷共に食わせて好き勝手に使役してるとかの噂が付きまとうんだ。
「ラフタリアも料理することあるよな。また作ってくれよ」
「……ナオフミ様。自分よりも遥かに上手い人に自分の作ったものを食べさせたいです

か？」

ん？　この流れで言うのは俺が料理が上手いから俺に料理を食べさせるのに抵抗があるってことだよな？

「気にしなくてもいいだろ。それとも俺が美食家みたいに批評したことがあったか？」

「料理ではあまりないですね」

「料理と限定するのが引っかかるが……」

カルミラ島で詐欺商人に商売についてケチをつけた覚えはある。

「まあいいや。後でシルトヴェルトの有名料理でもチェックしておこう。じゃなきゃキール辺りがうるさいからな」

「んー？」

フィーロが馬鹿食いを始めた。こりゃあ、すぐになくなるな。

なんて感じに会食は問題なく終わった。

五話　ハーレム

夜会が終わるとまた部屋に戻る。

「ラフー」

室内でラフちゃんが外の景色を見て鳴く。

亜人獣人には夜行性の者もいるらしく、シルトヴェルトの城下町の明かりは消える気配がない。

というか……蝙蝠っぽい奴が空を飛んでる。

「盾の勇者様、沐浴のお時間です。どうかご同行をお願いします」

「ああ。夜会の後は入浴だったか？」

「ラフー？」

ラフちゃんは……ラフタリアの髪が大本だから女の子だったかな？

とはいえ、ここで留守番させるってのもどうかと思うし、連れていくか。

ラフちゃんを抱えて案内員にしたがって風呂に行く。

城の一階の廊下から続く中庭を出て……なんか木が生えた神殿っぽい場所へと連れていかれる。

湯気が見えるし、あそこが風呂なんだろう。

メルロマルクにも実は風呂ってあるし、この世界の連中って結構綺麗好きだよな。

よくよく考えてみれば定期的に勇者が召喚されて文化を説明していたら入浴の習慣くらいつくか。

便利だな。

冤罪をこうむった時に川辺で水洗いをしていたのを思い出す。

思えば遠くに来たもんだ……。

そう思いながら、脱衣所っぽいところで鎧と服を脱ぐ。

案内員が俺のことを凝視してるが気にしない。

それがコイツ等の仕事なんだろうしな。

「ラフゥ」

ラフちゃんが恥ずかしそうに手で目を覆ってる。

こういう反応が可愛いところだ。

「じゃあ行こうかラフちゃん」

「ラフー」

せっかくの風呂なんだし、ゆっくり入るか。

そう思って浴場の方へと歩いていく。

湯気が酷いな。

湯船を見ると何人かの影があり、人影と表現するには随分と大柄な影もある。

「よくいらっしゃいました、盾の勇者様！」

湯気の中からなんか育ちの良さそうな女が悩殺ポーズを取りながら出てくる。

「私達が盾の勇者様のお身体を洗って差し上げますわ」

「どうか気に入った方を選んで……寝室までご同行……させてください」

こう、ゼルトブルの奴隷市場で見たような奴まで混じってる。

「どうですかー」

胸を弾ませて近づいてくるその姿に、背筋が凍りつくような感覚を覚える。

嵌められた！

ここで俺を悩殺して、卑猥なことをさせようとしているに違いない。

たとえ盾の勇者であろうとも人の子。女の裸体を見れば興奮するはずとか誰かが企んだのだろう。

しかし……サディナの獣人形態に負けず劣らずの大女の獣人まで揃えてハーレムみたいにしているが……どんだけ俺は雑食設定なんだ？

いや、もしかしたら好みの女がこの中にいるかもって、あれこれ揃えたのか？

「残念だが断る」

32%　位置No. 6050 中 1889

浴室から出ようとすると、女共が風呂から出て俺を取り囲む。

「盾の勇者様、どうかお願いしますわ」

「嫌なのは最初だけ。後は癖になるような、とろける時を過ごせますわよ」

う……背筋が……気色悪い。鳥肌が立つぞ。

なんていうかサディナの気色悪い言い回しにも不快感を覚えたが、その比じゃない。

コイツ等に比べたらサディナの方がまだ遥(はる)かにマシだ。

そう、サディナはあくまで俺に選ばせる……逃げる場所を用意しているし、気持ち悪い言い回しをしてもどこかで安心させてくれる。

まさかこんなことに気付く時が来るとは思わなかったぞ。

本気で俺を狙って、しかも俺自身ではなく盾の勇者だからという理由からの囁(ささや)きがこんなにも気色が悪いとは……少しだけサディナを見直してやろうと思ってしまった。

同様にアトラも。

「ささ、どうか勇者様ー私達を選んでくださいー？」

「盾の勇者様のお子が欲しいですー」

と、小さな亜人の女の子に言われた。

幼女っぽいのにこんなことを言われるって……寒気がするぞ。

メルティに誘惑されてるようなもんだ。

本人に言ったら怒られそうだが、十年早い。

「ふざけんな！　出ていけ！」

と言うが女共は引かず、一歩、また一歩と俺に近寄ってくる。

「盾の勇者様、さあ！　魅惑的な行為に勤しみましょう！」

バッと飛びかかってくる女共に俺は冷静にスキル名を叫んだ。

「流星盾！」

流星盾による結界が生成されて女共がゴツッと弾き出される。

助かったぜ武器屋の親父。ここまで流星盾のありがたみを感じたことはなかった。

「く……盾の勇者様！　お楽しみしましょう」

「断る！」

「そうですか。みんな、愛すべき盾の勇者様のため、勇者様の殻を外しますわよ」

「「おー！」」

「おー！　じゃねえ！」

無視してズカズカ突き進もうかと思ったが、どんどんと増援が増え浴場内が女で溢れかえる。

ゲ！　やっべー、ますます逃げ場がない。
しかも俺の結界を破壊すべく、みんなして結界を殴り始めた。
雰囲気もクソもない。
女が結界に群がって防御膜を殴ってくる……怖いなんて次元を超越しているぞ……。
流星盾に反撃効果を付与するアクセサリーは絆の世界でしか機能せず、今のところ代用品がないんだよな……。

「はぁあああああ！」

おい！　そこにいるゾウ獣人！　全体重で俺にボディプレスを掛けようとしてくるな！
つーかコイツも俺を狙ってんのか!?
霊亀の一撃だって僅かに耐える俺の結界を寄ってたかって破壊しようと目論む女共。

「ふふふ……これさえ壊せれば盾の勇者様は私達のものよ」

「う……」

やばい。壊れる心配はなさそうだけど、別の意味で怖い。
どうにかして逃げる手段を考えよう。

「ポータルシールド！」

……使用不可!?

どこからかポータル阻止の方法が流出したのか⁉

いや、この女共を振り切って逃げるのが先決か！

結界で弾けばどうにかなるかもしれないが、無数に出てくる女共を連れてラフタリア達のところへ……逃げられるか？

「ラフー！」

ラフちゃんが俺の頭で鳴く。

それから魔法の詠唱とばかりに意識を集中し始める。

……ラフちゃんとの合唱魔法とかできるか？

上手くすれば窮地を乗り越えられるかもしれない。

俺はラフちゃんの鳴き声に意識を集中する。

唱えられる魔法はよくわからない。それでもこの場所で何もせずにいるよりはマシだ。

歩きながら俺はラフちゃんと魔法を紡ぐ。

む……視界に浮かぶ魔法の形がなんとなく見えてくる。

さすがはラフタリアの毛髪から生み出されたラフちゃん。ラフタリアと魔法の力が似ているぞ。

間違いなくラフタリアと一緒に唱えた合唱魔法が使えるはず。

『二つの力、敵を惑わす幻覚の力を込め、敗北への運命を覆し勝利への未来を紡ぐ力を……』

『ラフラフラフ……』

何かラフちゃんの詠唱がちょっと微笑ましく思える。

だが、元が魔力の塊みたいな存在だからか、ラフタリアの時よりも強い力の流れを感じる。

『龍脈よ我等の願いを聞き届けたまえ。力の根源たる我らが願う。真理を今一度読み解き、我が敵を惑わす幻を見せよ！』

「空即是色！」

「ラフゥウウ！」

空即是色!? 色即是空じゃないのか？

意味合いとしては同じだが、似て非なる魔法が発動した！

バシィッと俺の周囲に居る女共に魔法が掛かる。

ふらふらと女共はトリップし始めて、俺から離れて別の場所でドッタンバッタンと暴れ始めた。

「ああ、待ってー！ 盾の勇者様ー！ ああん！ 勇者様過激です！」

どんな幻覚に支配されているのやら、悶絶しながらそれぞれ倒れる。

よし！　今のうちに逃げるぞ！

「ラフー」

そこにラフタリア達がタイミング悪く駆けつける。

「ラフちゃんからの救難信号を聞きつけてきたのですが……」

「あらー」

辺りを見渡すラフタリア達。

「みんななんか楽しそうー。ごしゅじんさまと何かやったのー？」

「く……先を越されましたわ！」

「この人数とやったのか……」

フォウルがなんかぶちかました。

「やってねえよ！　変な誤解すんな！　ラフちゃんと合唱魔法を唱えて幻覚を見せてんだ。今のうちに逃げるぞ！」

「その必要はありません！」

そこにヴァルナールがやってくる。

「勇者様、これはとんだ失礼を……ここにいる女性達を早く連行しなさい」

ヴァルナールの言葉で夢うつつの女共が連れていかれる。

く……なんていうか変な臭いがしてきたぞ。

あえて言うなら女くさい。サッサとここから逃げたい。

ヴィッチに騙された時のトラウマが……。

「どうか勇者様、この度の不手際をお許しください」

「誰が許すか！」

「代々盾の勇者様に行うサービスだったので、喜んでもらえるかと思ったのですが」

「とうとう正体を現したな！」

俺の指示にラフタリア達が各々武器を持って構える。

だが、ヴァルナールはあくまで戦わないスタンスを貫くつもりか？

「おやおや……盾の勇者様は相当な面食いだということですか」

そこに……ライオン獣人が顔を出す。

ヴァルナールがそのライオン獣人を見て不快そうに眉を跳ね上げる。

「ジャラリス、言葉を慎みなさい」

注意されると、やれやれといった様子でジャラリスと呼ばれたライオン獣人が下がる。

が、フォウルとアトラの方に……舐めるような視線を向けていた。

フォウルがその視線に気付いて首を傾げる。

まあ、俺の配下ってだけでシルトヴェルトでは羨望の眼差しを向けられるっぽいから我慢しろ。

　まずは話を戻すべきだな。

「俺が女に誘惑されて好き勝手すると思っていたのか！」

　異世界に召喚されて以来、そういう話題には嫌悪の感情しか湧かないというのに。

「誠に申し訳ありません」

　絶対に反省してないだろ。

　これをネタに強引に頷かせよう、そうしよう。

「許してほしかったらクテンロウへの船を手配しろ！」

「そ、それは……お時間を要するので少しの辛抱を……」

「本当に時間が必要なのか？　嘘を言っていたら本当にタダじゃおかないぞ！」

「はい……」

　と、それ以降もずっとヴァルナールを詰問したのだが、奴も政治的なことでのし上がってきたのか、のらりくらりと躱しながら一歩も引かなかった。

「とにかく、転移スキルで帰らせてもらおう」

「そ、それは！　困ります！　どうか猶予を！」

「なんでそんなにも俺を城にいさせたがる」
「……盾の勇者様に一日も滞在せずに帰られては国の権威が揺らぎます」
あー……なるほど。盾の勇者に国を任されているという名目で管理しているのに、その盾の勇者を怒らせて帰られてしまったとあっては国の威信に関わると。
「そうなると私共が盾の勇者様の要望に応えられるかどうかが不透明になってしまいます」
筋が通っているような気がしなくもないが、どうなんだ？
すっげー面倒。
「情報封鎖でもしておけ！　村に帰って寝るだけだ！」
「ナオフミ様、あの……最後の猶予でいいのではないでしょうか？　じゃないと平行線ですし、私達も困ることになりますよ？」
こっちが強く出られないと察しているのか、ヴァルナールの表情に余裕がある。
く……俺はサディナを睨む。
「シルトヴェルトの協力なしでクテンロウに向かってもいいけど、入れる保証はないわよ？」
くそ。厄介な問題を……。
「……わかった」

「それでは近日、会議にて盾の勇者様の要望に応えられるように決議致します。できる限り助力いたしますのでお怒りを鎮めてください」

近日？　会議？

「お前等の国はどんだけ面倒な仕組みで動いてんだよ！」

「シルトヴェルトって勇者様が言うにはミンシュセイってのに近いそうよ。いろんな種族の代表が集まって決議することがあるから」

民主制!?　どんだけ面倒臭い政治体系してるんだ。

「昔はハクコ種や上位種の発言力が強かったのだけど、過去の戦争で弱体化しちゃって、だったかしら？」

ここでもクズが俺の足を引っ張るってことなのか？

いい加減にしてくれ。

メルロマルクに帰ったらクズの拷問を女王に頼もうか。

「……なんと、とても愚かなことですわね。愚民がどれだけ集まって話し合おうと名案など浮かばないというのに……」

アトラが小さく呟いた。

少し前の褒め称える態度はどこへ行ったんだ？

というか、発言がやばい。お前は独裁者か何かか？

「……わかった。今回は大目に見てやる。だが、できる限り早く俺の要望に応えるんだぞ」

「は！　盾の勇者様の仰せのままに！」

ヴァルナールは敬礼して浴室から出ていった。

その後はラフタリア達と一緒に部屋に戻り……制度の関係でラフタリア達は隣室で待機することで夜は更けていったのだった。

ちなみにヴァルナールの話では風呂の後に寝室にも女共を配備するつもりだったらしい。

俺が寝室に戻る途中で女共が残念そうにぞろぞろと廊下を歩いている姿を見た。

六話　陰謀

翌朝、シルトヴェルトの朝……ぶっちゃけシルトヴェルトの城下町は眠らない町だったし、朝方でもそんなに違いがなく賑(にぎ)わっている。

コイツ等はいつ寝てるんだ？

とか思うが雑多な亜人獣人のいる国なのだからしょうがないのかもしれない。

そういう点でメルロマルクの方がまだ静かに見えるから不思議だ。
「ふう……朝食はいつだろうか」
日課にしている魔物共の世話と遊び、そして飯の準備をする習慣の所為で目覚めが早かったな。
まだ俺が就寝していると思っているのか、ラフタリア達以外の者の気配がない。
下手に部屋から出たら警報でも鳴りそうだな。
碌に話ができなかったから、今のうちにラフタリア達に会いに行くのがいいか。
とりあえず……隣室をチェックしよう。
ちなみに影のような密かな護衛の類はサディナとアトラに発見させて追い払っている。
今ではラフタリアやラフちゃんも見破ることができるし、風呂での出来事もあって誰が来ても追い払った。
「ラフー」
常時ラフちゃんが監視しているので、そういった連中はもういないだろう。
いたら炙り出して今度こそ怒る理由にしてやる。
そのお陰か静かだな。見張りは昨日追い出したからいない……よし！
こっそりと部屋を出て、隣室の扉を開ける。

するとそこではフォウルとアトラが、見知らぬ……ハクコ種っぽい奴と話をしているところだった。

ラフタリア達は交代で休んでいるのかな？

「尚文様！」

アトラが感激したように声を上げる。

「おはようございます。今日は良い朝ですわ」

「そうか？」

俺はフォウルの方に視線を向ける。

アトラの態度に若干不快そうにしているが、大声で俺を罵倒することはしないようだ。

「そいつは？」

「お兄様の元配下の者だそうですわ」

「アトラ、それは違う。両親の配下だ」

アトラの言葉を訂正してフォウルが答える。

で、フォウルの両親の配下とやらは俺を見て跪く。

「この度はフォウル様とアトラ様を保護し、更にアトラ様を健康にしてくださり、感謝してもしきれません」

「あ、ああ……それは別に気にしなくていい」

シルトヴェルトにいるハクコ種を初めて見た気がする。

「さすがは盾の勇者様……本当に、奇跡を目の当たりにして私は恐れ入るばかりです」

「……前置きはいい。それ以上気色悪い感謝の言葉を言うなら怒るぞ」

俺の言葉に顔を上げてから深々と頭を下げて立ち上がる。

「で、なんの話をしていたんだ？」

「ここに来る前に話していただろ。知り合いがいたら頼ってみるって話だ」

「ああ、いたのか」

「まあな」

頼るといってもな。現状、コイツが何をしてくれるのかを聞くほかないか。

「で、何をしてくれそうだ？　できないなら無理に頼む気はないぞ」

「色々とお話しできることはありますが、まずは勇者様へのお話となると、シルトヴェルトのシュサク派は、本意としては盾の勇者様を国外に出すことは考えておりません」

「お前の話がどこまで信用できるかわからないが、昨日の反応を見る限りそうだろうな」

どうにかして俺を繋ぎ止めて、女を宛てがいたい的な願望が見え隠れしている。

「自分の立場を危うくする可能性のある危険な相手を腹中に抱えておきたいとか、正気の

沙汰じゃないと思うがな」
「勇者様次第でしょう……」
「何がだ？」
「その……」
ま、想像はつくな。
俺に女を嫁にさせるとかだろう。
「他にもあるでしょうが、勇者様のご想像の範囲にあるかと思われます」
「クテンロウ行きの船を出すというのは？」
「……そこまでは掴み切れておりません」
あんまり期待できそうにないというところか？
無駄足の匂いがしてきたぞ……。
「嘆かわしいですわね」
アトラ、お前が言うのか？
「現在、我等ハクコ派はフォウル様のお言葉と盾の勇者様の願いを叶えるために、できる限り要望に応えられるように動こうとしている最中です」
「とはいっても、シルトヴェルト内ではハクコの権力は飾りみたいになってるらしいから、

あまり頼りにするなよ」
フォウルが念押ししてくる。
俺だって鬼じゃない。相手の立場は考えて動くさ。
つーか、さっさとこの国を出てクテンロウに乗り込みたいんだが……。
民主制だから、ハクコ派は俺の要望に応えようと他の連中を説得しているってところなのか？
どれだけの派閥があるのかは知らんが……。
「それで盾の勇者様、フォウル様、どうか注意していただきたい疑惑の方がおります」
「ん？　どういうことだ？」
「参考程度に聞いておくか」
「はっきり言うか？」
フォウルが呆れたような目で俺を見てアトラに小突かれる。
「ぐ……」
「はい。ジャラリスはフォウル様達の父君の最期に立ち会ったという方ですが――」
そこで誰かの足音が聞こえてきて、ハクコ種の使いは会話を止めて挨拶をして部屋から出ていってしまう。

やがてすぐに俺を捜しに来たのか、雌ライオンっぽい獣人が案内員としてやってきた。
「盾の勇者様、こんなところにいらっしゃったのですか」
「俺がどこにいようと城内なら問題ないだろ」
「どんな刺客がいるかわかったものではありません。どうか時間が来るまでお部屋でお待ちください」
「ああ、はいはい」
ふむ……陰謀が張り巡らされたシルトヴェルトで気を付けないといけない相手か。
ジャラリスってあのライオン獣人だよな？
奴がどう関わっているのか知らんが、まあ早めにクテンロウへの船を出すことを頷（うなず）かせなきゃな。
シルトヴェルト内での陰謀？　知らんな。そんなことは勝手にやっていてくれ。
俺には興味のないことだ。俺に迷惑を掛けない限りな。
奴らだってそれが本音だろう。
代々続く盾の勇者への信仰とか、そういうのは遠い場所にいるからこそ利用しやすいんだろうし、今までシルトヴェルトはあまり俺にかかわってこなかった。これが答えだ。
「じゃあなアトラ、フォウル。ラフタリア達によろしく伝えておいてくれ」

「わかった」
「嫌ですわ。次に尚文様に会えるのはいつですか？」
俺が部屋に戻ろうとすると、アトラの奴、露骨なほど不機嫌な態度で案内員を詰問してる。
「朝食の席では勇者様と会食ができますので辛抱を」
「だとさ。じゃあ後でな」
「わかりましたわ」
そんなわけで俺はまたあのデカイ寝室へと戻って食事の時間までラフちゃんとにらめっこをすることで時間を潰していた。
ふむ……事が起こりそうなら機動性の確保の意味で事前にフィーロをペット枠で部屋に連れてくるか。
雛鳥状態に化けられるかわからないが、ラフちゃん枠と同じでいざって時に逃げる足になってもらおう、そうしよう。
ラフタリア達は別枠で逃げてもらう。
これって名案かもしれない。

それで朝食を食べに……なんか見晴らしの良いテラスへと案内され、ぞろぞろと沢山の人が集まったテーブルの一番目立つところに座らせられた。どうやらここで朝食を食うっぽい。

ラフタリア達も来て席に座る。

「調子はどうだ？」

「大きな問題はないです……ただ、時々殺気を感じることがありますね」

「だろうな」

そう思いながら並べられた食事に目を向けた。

……。

俺とラフタリアは目を思い切り細める。

「んー？」

フィーロは速攻で気付いたみたいだな。さすが本性はフィロリアルと言うべきか。

「……」

アトラもその辺りには敏感なようだな。フォウルは気付いていないようだ。

となると亜人獣人でも気付かない代物か。

「あらー」

サディナも気付いている。たぶん、ラフタリアとフィーロの反応だろう。

うちの連中はどうしてこうも察しが良いのか。
俺が仲間達にそれぞれ視線を向け、目で合図を送る。
すると全員頷いてくれた。
俺は黙って事の成り行きを見守ることにしよう。
「ではこれからお食事をしましょう」
そう告げたのは立ち上がったヴァルナールだ。
知ってるのか知らないのかで全てが分かれるな。
で、示し合わせたようにみんな揃(そろ)って手を合わせて祈り始める。
「全ては盾の神様の御心のままに……我等はここに食物を、生命を得ることができました。
世界を守る神の願いを代行する力へと……」
「「力へと……」」
思わず転びかけた！　どんな祈りだよ！
こう……神鳥の聖人と言われたことがあるが、それよりも恥ずかしい。
公然と信仰されるってこんなにも寒気がするものだったのか！
ってそれはいい。
まずは泳がせるか。

俺は黙ってシチューを口の中に含み、食った振りをしてナプキンに吐き出す。
そして辺りを見渡す……ふむ。
俺は立ち上がって、出されたシチューを指差す。
「あー……今、盾の神様として祈られたわけだが、ここで盾の勇者としてお前等に命令を下す。この、俺を含めて俺の配下に配ったシチューっぽいやつを全員、真っ先に食え」
「あ、はい」
ヴァルナール以下シルトヴェルトの重鎮共の一部は、言われるがままそれを口に含む。
「アトラ、許可する」
「わかりましたわ！」
素早く跳躍したアトラがシチューを食べなかった重鎮の背後に回り込んで背中を突いた。
「うぐ！　な、何を！」
「俺が許可した。さて……」
盾から高度解毒剤を出して……シチューを食べた重鎮共に投げ渡す。
「もしかしたら早めに回るかもしれんから摂取しておけよ。でだ……」
俺はテーブルに行儀悪く足を乗せて、食わなかった重鎮達を睨みつける。
「どういうつもりか聞くとしよう」

そう、俺達に配られた食事には毒物が混じっていたのだ。

俺の盾やラフタリアの刀には毒物を事前に察知する技能がある。

毒物感知っていう技能がな。

毒草の類を武器に入れて調べれば視界に警告として浮かび上がる。

こんなあからさまに俺達を暗殺しようなんて不届き者を許す気はない。

政治的な敵ならともかく、命を狙うような連中を見逃して何になる。

「どうやら……お前は関わっていなかったようだがな」

ヴァルナールを睨むと、やはり知らなかったらしく、ショックを受けていた。

だが毒味係は敵の一味なのか、俺を見て舌打ちをしている。

「これはどういうつもりだ！」

ヴァルナールが強くテーブルを叩いて、俺が見破った重鎮を叱りつける。

「く……」

「なんと恐ろしい！　今すぐ処刑せよ！」

「それだけじゃ生ぬるいが……」

俺はシチューを食わなかったライオン獣人の方に視線を向ける。

上手く隠したつもりだが、お前、俺が食う演技をした際に僅かに笑ったな？

それから事態はすぐに動き始めた。

俺達は飯を食わずに玉座の間に移動し、俺が玉座に座る形で毒を盛った連中を跪かせる。

「今から関係者全ての炙り出しをするのでお待ちを」

「悪いがもう我慢も限界だ。いい加減にしろよ！」

俺の視線にヴァルナールが敬礼する。

異議を唱える気はないってか？

「いいか？　俺達は早急にお前等の斡旋でクテンロウって国に行きたいんだ。お前等が困ることをする気もないし、権力闘争ならよそでやってくれ」

盾の勇者一行暗殺を目論むような奴等の元になんていられない。

ここでライオン獣人が頭を垂れるのをやめて一歩踏み出す。

「そうは仰いましても、一度暴走してしまった我が国の民を抑え切れるかどうかわかりません」

「わかりません、とはふざけた話だな」

「ええ、盾の勇者様の領地に刺客が送られているとは聞いておりましたが、その刺客に我が国の民が混じる可能性が否定できないのですよ」

「ほう……それはどういう意味だ？」

「わかりませんか？　いつまで経ってもメルロマルクに留まる盾の勇者に存在価値などない。神を僭称する偽者……と、正義感にかられて蛮行に及ぶ一派が出てきても不思議ではないのですよ」

一応、筋が通っているように聞こえなくもない。

つまり俺の所為で国内の暴走が始まったと、責任を追及したいとでも言いたげだな。

「この問題を片付けるには盾の勇者様にも尽力していただくのは当然。配下の者が事を成すにしてもです」

「……何が望みだ？」

「シュサク種の代表であるヴァルナール様の願い。そしてここにいる国の重鎮の共通の願い。シルトヴェルトの共通の要望を盾の勇者様もご存じのはず」

俺は無言で何を言いたいのかとライオン獣人を見る。

「まずは言うまでもなく、盾の勇者様としてシルトヴェルト専属で活動してもらうことの確約」

「専属？」

霊亀の一件で波が現状起こらない世界であるが、波が再開したら、もちろん俺や錬、樹や元康は波を鎮めるために世界各地に行くことになるだろう。

もちろん、七星勇者共もだ。

どこにいつなのかわからないが、協力して波を鎮めないと絆の世界のような問題が起こるだろう。

今のうちに七星勇者とは話をしておきたいところではある。

「ええ、メルロマルクなどという敵国ではなく、シルトヴェルト専属の勇者としてです」

「勇者は世界中の波を鎮めるために戦うだろ。それに何の不満があるんだ？　ここでも何かしろと言うのなら要望次第では応じてもいいが？」

するとそこでライオン獣人はチッチッチと挑発まがいに答える。

「わかりませんか？　シルトヴェルトが他国に盾の勇者様を出すことなど言語道断。許可なき外出など許されません」

「つまり城に軟禁されろという気か？」

……ふざけるなよ。

額に青筋が浮かぶ感覚を覚える。

理不尽な出来事を今まで色々と経験してきたが、ここまで苛立つ要望も久しぶりだ。

「更に各部族に付き一人は妻を娶り、世継ぎを産ませるのです。そこまでやって初めて盾の勇者様としての最低限の責務を果たすことになります。各部族の不満がどれだけ蓄積し

ているかおわかりですか？」

ハーレムを作って子供を作れだと？

「そうでもしないと、現代の盾の勇者様への不満など解消されるはずもない。クテンロウの刺客が勇者様の領地に？　それは勇者様の業というもの……彼の国も盾の勇者様を狙っての所業なのでしょう。そのようなラクーンが狙われるなど冗談も甚だしい」

挙句、ラフタリアをゴミを見る目で蔑みやがる。

……殺意の限界を突破したような気がする。

決定だな。

流星盾を展開しながら城下町を練り歩き、国の上層部が腐りきっている、今すぐ解任しろ！　革命の旗頭になってやると宣言してやろうじゃないか。

そうでもしないとクテンロウへの道は開かれない。

「ジャラリス！　口を慎め！　盾の勇者様！　どうかジャラリスの言葉などお聞きにならぬようお願い申し上げます！」

俺の怒りを感じとったのかヴァルナールが許しを懇願するように土下座を始める。

だが、そこで引くほど俺は素直じゃないぞ。

「いえいえ……これは国の総意なのは事実……なのですよ。ただし、私は違いますが。盾

の勇者様、クテンロウへの交易船をお任せください」
　ジャラリスは俺の方へと近づきつつ、大きく拳を握りしめて、ヴァルナールを弾劾し始める。
「ジャラリス……貴様！」
「ええ、勇者様、船はご用意いたします。約束しましょう」
「ふむ……」
　コイツは俺がバカか何かだと思っているのか？
　毒を仕込んだ重鎮が、お前の方を見て約束が違うと言おうとしているのが一目でわかる。指摘しても逃げ切るつもりだろうが、盾の勇者としての権利がどれだけあるのか……お前こそわかってるのか？
　ラフタリア達に斬り捨てられても、俺が許可したで済む可能性だってあるんだぞ。
「ねぇねぇねぇ。ごしゅじんさまー、なんであの人本当のこと言ってないのー？」
　そこでフィーロがジャラリスを指差して言う。
「私が嘘をついていると？　はは、何を言っているのやら」
「えー？　でも船を用意するって言ってたけど嘘を言う人と同じ目をしてるよー？　あのメルちゃんのお姉さんや弓の人の配下の鎧の人みたいー」

ヴィッチや鎧と同じか。
確かに、それくらい信用できない奴なのはわかってるぞ。
「そう思われたのなら、残念です。ですがこれは本心ですよ」
「えー？　でも、ごしゅじんさまがご飯食べようとした時に小さく拳を握ってたのフィーロみたよー？」
「俺も見たな。もう少し上手く隠すんだったな」
「ち、違います。そんなの偶然ですよ。拳を握ったら犯人なんですか？　盾の勇者様は冤罪が好きなのでしょうか？」
む……過去の俺の被害を知っててこっちの心を操ろうとするのか。
だが、あの時お前が僅かに笑ったのを俺は見ている。
確実に黒だな。
俺を政治的に利用しているのは明白だ。
さて、どう料理してやろうか。
「冤罪……ねえ？　疑わしきは罰せずなのはいいが、俺もお前が笑っているのは見ているんだ。それをどう弁明するんだ？」
「それは盾の勇者様の目の錯覚です」

強引な返答を……まあ、俺の証言なんて目の錯覚と言い張るか。
「錯覚じゃないよー。ごしゅじんさまがねー、ご飯食べる前からそわそわしてたよー」
　しかしフィーロは相手の嘘を見抜くのが得意なんだな。
「ねーなんでなんでー？　なんで本当のことを言わないのー？」
　上手く使えば詰問に役立つな。
　というかフィーロはメルティ相手にも使っていたか。
　俺には通じないがな。
「さて、毒味役はフィーロに詰問でもさせるか。知らないと言うのなら次の奴を問い詰めよう。で、最後は……お前だぞ？　まあ、仮にお前まで辿り着けなかったとしても、疑われるようなことを散々していたんだ。お前は信用しない」
「おやおや……」
　俺がジャラリスを指差すと、ジャラリスは心外だとばかりにオーバーなリアクションを取っている。
「嘆かわしい……もはや我慢も限界ですわ！」
「は？」
　そこでアトラが一歩踏み出して大々的に宣言する。

七話　真なるシルトヴェルトの民

「なんだ？　汚れた血のハクコであるのは知っているぞ。お前等に発言権などないのだ！　下がっていろ！」
「汚れた血？　発言権？　まったく……シルトヴェルトの人々、特に貴方達は最も大事なことをどこかに忘れてきたのではありませんか？」
　子供でありながら、ジャラリスの発した怒気をアトラはさらりと受け流す。
「なんだと！」
「口を慎め！」
「あ、アトラ？」
「いいえ。ここで引き下がっては私は私を許せなく思いますわ。私の血、本能、そして意識が貴方達が間違っていると断言していますわ」
　そう言い放ったアトラから、虎を模した殺気とも異なる何かが噴出してその場にいた者達に喝を入れたのを俺は感じていた。
　気の応用か何かだろうか？
　アトラが強く足を前に出すと衝撃と共に地面にヒビが入る。

それだけで周りにいたシルトヴェルトの重鎮共はゴクリと息を飲んだ。

「お、お前は……」

「まさか……」

何か心当たりがあるような戦慄の仕方をしているが、今は知らん。

アトラが何を言おうとしているのか、王者の風格とばかりに腕を組んで聞いてみようじゃないか。

「シルトヴェルトの初心、生まれはどういうものか……それをまず思い出しなさい。貴方達は盾の勇者様を信仰すると言いながら、蔑ろにしているのですわ！」

「な、何を言っている！　我等はこうして盾の勇者様を――」

「ならばなぜ盾の勇者である尚文様が不快そうにしているのですか！　尚文様が来訪してからの数々の無礼を私が知らないと思っているのですか！」

まるで母親に叱られる子供のようにシルトヴェルトの連中がビクリと肩を震わせる。

「貴方達の信仰心を誉れだと思った過去の私を軽蔑しますわ」

ああ、さんざ素晴らしいとか言ってたもんな。そのうち注意するつもりだったぞ。

「さて、シルトヴェルトの者達、貴方達にシルトヴェルトがどのようにして建国されたのか、その意味を問います」

「そ、それは……全ては盾の勇者様のために、盾の勇者様の力で建国された国！」

一人が釣られてそう返す。

するとアトラがそいつに手を向ける。

「そうです！　建国の興りは尚文様が復興させたあの村と同じ。なのに貴方達は村へ刺客を送るとほのめかして脅迫した。つまり自分達の国の建国に泥を塗ったも同じなのです！」

「そ、そんな馬鹿な！」

「我等とメルロマルクの村とでは規模が――」

「では貴方達の国は最初から大国であったと？　盾の勇者様である尚文様が復興させている村は小さくて取るに足りないモノだと？」

アトラの詰問は止まらない。なんかすごい勢いがあるぞ。

「錆びついた化石よりも新しき風を世界が望んでいたと後々の歴史に刻まれたいのですか？」

「く……しかし……」

「そもそも私達の力は、爪は、牙は何のために存在するのか考えなさい！　世界を統治するためですか？　それとも人々を守るためですか？　違いますわ。全ては盾の勇者である尚文様のためですわ」

アトラの言葉に重鎮共……特にヴァルナールが何度も頷き始める。
「来るべき時に備えて長い年月の中で牙を研いできたのではないのですか？　私は汚れた血と蔑まれたとしても、この体に流れる血が答えてくれますわ！　尚文様へ忠誠の証を見せよと！」
アトラを中心に謎の空気が生成され、重鎮共が少しずつ拍手を始める。
拍手するのかよ。どこまでも妄信的な連中だな。
「そう！　時代は災厄の波が到来する時……後世を救う盾の勇者のためにシルトヴェルトは……尚文様の力となるべく牙を磨いてきたのではないのですか？　ならば改めて尚文様に忠誠を誓い、家臣として仕えるのです！」
喝采が最高潮に達する。
俺達は茫然としてるんだけどな。ラフタリアなんて呆れた顔をしてるぞ。
で、喝采の中で唯一、ジャラリス一派だけが不快そうに顔を歪ませていた。
「あ、アトラ？」
フォウルも驚きで一杯の表情でアトラを見てる。
「なんといいますか、間違ったことを言ってる気がしないので何も言えませんね」
ラフタリアも概ね同意の様子。

「そうね。ナオフミちゃんへの忠誠の意味や戦うことの意志は間違いないわ」
「んー？　ごしゅじんさまのお願い通りに波で戦うんでしょ？」
当然のことを当然のように答えるみんなにシルトヴェルトの者達は我に返ったように跪く。

「こんな小さな少女に教えられるとは……確かにその通りだ」
ヴァルナールが答える。
「我等の存在価値は盾の勇者様のためであり、来るべき災厄の時に世界を救うためにあったはずなのだ。にもかかわらず勇者様をまるで権力を得るための種馬のように扱うなど言語道断！」
と、俺に頭を垂れる勢力と、逆にアトラと俺を睨む勢力……ジャラリス一派が対立する。

「異議あり！　そこにいる盾の勇者が我等がシルトヴェルトの望む、真なる盾の勇者ではないと異議を申し立てる！」
「ジャラリス……貴様！　無礼が過ぎるぞ！」
ヴァルナールがジャラリスを叱責する。
「無礼？　それは違う。私はシルトヴェルトを大事に思っているからこそ、愚かな決断を

しないように冷静に意見しているのだ」
などとジャラリスが述べた。
ふむ、少々過激だが言っていることは間違っていないような気もする。
そもそも盾の勇者の言葉は絶対！　とか、ちょっと妄信的すぎてやばいしな。
こういう状況じゃなければ悪くない考えなんだが、今は邪魔だ。
さて、どうしたものか。
ん？　アトラはまだ何か言うことがあるのか、息を大きく吸い込み、
「尚文様は……いえ、神は間違えない！」
そう大声で叫んだ。
コイツ……もしかして煽動の天才とかじゃないだろうな？
というか、周りの奴等も頷くなよ。俺だって間違えることくらいあるわ！
アトラ、お前は後で教育してやらないといけないな。
「それとも、愚かにも尚文様が偽者の勇者とでも言うつもりですか？」
「違う。そこまでは言っていません。来るべき時の盾の勇者ではないのではないか？　と言っているだけで」
顰蹙を買わないように、あくまで盾の勇者ではあると認めておきながら、意見すると

いうことか。

　いかにも政治的な反応だ。

「伝承にある災厄の波が本当にこの時なのかと言いたいのです。急いては事を仕損じる。世界が滅ぶと予言される波であるならば、なぜ盾の勇者様はメルロマルクという敵国に召喚されたのですか！　来るべき時ではないからこそ、盾の勇者様が敵国に呼ばれたというのが何よりの証！」

　そりゃあシルトヴェルト辺りに俺だけ召喚されたら今とは違う未来があったかもしれない。

　……なんかハーレムでサディナが言うような肉欲の宴とかしてそうだけど、違うと言いたい。

「いいえ、その意見は破綻してますわ」

　アトラが首を振る。

　なんだ？　何か言い返すのか？

「来るべき時であるからこそ、盾の勇者は他の三人の勇者達と共に召喚されたのですわ。勇者の強さは勇者同士で力を共有することにある。つまり他の三人の勇者に都合のいいメルロマルクに尚文様は合わせて召喚された……これこそが世界の危機の証！」

「詭弁を申すな！」

「どちらがです！　私は尚文様に忠誠を誓う者として進言したのです！」

そう言い切るアトラにシルトヴェルトの重鎮共は息を飲んで黙りこむ。

そこに、玉座の間の入り口から声がした。

「……幼い子供と馬鹿にするのには意志が強く、それでありながらも猛々しい。真にシルトヴェルトの民と言えるのはどちらかと問われれば少女の方だと皆が思うでしょうな」

みんなが振り返るとそこには亀みたいな……獣人がいた。隣には早朝に会ったフォウルの知り合いのハクコ種の奴がいる。

尻尾が蛇？　小太りに見えるのは気の所為か？

「誰だお前？」

俺が首を傾げると、ヴァルナールが驚きの表情から落ちつきを取り戻して答える。

「ゲンム種です。この方はシルトヴェルトでも有名な貴族です。我が国でも一、二を争うほどの権力を有しています」

ゲンむ……げんぶ？

ああ、玄武はゲンム種なのか。後は青龍のアオタツ種とやらが出てきたら四神が全部揃うな。

「これは盾の勇者様、ご活躍は伺っております。お会いできて光栄の極み」

「はぁ……」

「しかしその姿、盾の勇者様の御前です。たとえ貴方様であろうとも許されることではありませんよ！」

ヴァルナールが殺気を放ってゲンム種に微笑む。

「……これはこれは、私は常にこの姿で身を守っておりますゆえ、忘れておりました」

ゲンム種の使者が……亜人の姿になった。

亀みたいだった姿が、小太りの男性に変わる。

六十歳前後の老人……杖(つえ)をついて歩く姿で年寄りであるのだとわかる。

見た目の印象は悪くない。

「皆の者、私達は来るべき時に備えて牙を研ぎ、盾の勇者様の支えとなるように国を存続させてきたのです。それを盾の勇者様がいなくては国が成り立たないなどと、愚かの極みだと……思わないのかね？」

その言葉にジャラリス派以外の奴等が同意を示す。

「汚れた血の言葉を聞き入れると申すのか！　真なるシルトヴェルトの民とは思えん所業だ！」

そこでアトラの殺気らしきものが噴出する。
「そうですか……どこまでも尚文様の歩みの障害となるのならば――」
アトラはジャラリスを指差して宣言する。
「尚文様の言葉は絶対。貴方が障害になると仰るのであれば、物理的に排除しますわ」
おお……っと重鎮共が声を上げる。
「ふむ……では丁度良いのではないですか？　ヴァルナール、避けては通れない道だと思いますよ」
「……わかりました。ではシルトヴェルトの流儀である決闘の開催を許可する！」
二人がそう言った瞬間、重鎮共がざわめき始めた。
「こちらは盾の勇者様の配下にいるハクコ種の後見人になりましょう。ジャラリス、貴方達も自分の信仰を貫くために決闘を受け入れなさい」
「ここまで好き勝手ほざいたのだ。翁、後見人となったからには負けた時のリスクをちゃんと背負うのだな？」
「ええ」
なんかこの爺さん、とんでもなく権力があるのは間違いなさそうだ。
つーかシルトヴェルト流の決闘ってなんだ？

「まず、シルトヴェルトの上位四種の強大な発言権の撤回。次に盾の勇者様を国の専属としての抱え込み、最後にそこの無礼者を厳罰に処すことで了承しましょう」

「そ、それは――」

ヴァルナールが間に入ろうとしてゲンムの翁に遮られる。

「負けたら応じてみせますわ！　尚文様！」

「ふざけた条件だ。アイツに都合が良すぎる。受けなくても済むなら……」

というところでアトラが強い意志を見せている。

俺だったら断るし、賞品が俺みたいな扱いだ。

ふざけるなと言いたくもある。

「こちらも相応の条件を提示しますがいいですね？」

「あぁ」

悠々とジャラリスは頷く。

なんつーか自信だけはあるタイプか？　地味にカリスマというかライオンっぽいところが王者の風格を匂わせるような気がしなくもない。

俺個人としては受ける義理は正直ないが、ラフタリアの出生への関わりと、ふざけた連中へ報いを受けさせるのなら意味がある。

「いいだろう。お前の条件を受けてやろうじゃないか。その代わり、こっちが勝ったらど

んな命令にも従ってもらうぞ？」

「もちろんでございますよ。盾の勇者、様」

どこまでも挑発的な野郎だ。

「……では条件の整理です。ジャラリス派の勝利ではシルトヴェルトの四家の発言権の撤回、勇者様の国在留、汚れたハクコの処分。勇者様達の勝利でシルトヴェルトは勇者様の指示に従う。これでよろしいですね」

「問題ない」

「では決闘の方法の説明です。決闘は決闘当事者同士が戦う相手を決めることになります」

「私が指名するのはそこの——」

ジャラリスがアトラとフォウルを指差す。

「汚れたハクコ共だ！」

「は？」

指名されて呆気に取られたような声を出したのはフォウルだ。

つーか……アトラはわかるが、フォウルもか？

「汚れた血が混ざった分際で調子に乗って！　血の力を思い知らせてくれる！」

「望むところですわ！　ですが……お兄様では少々不安ですわね」

「あ、アトラ!?」

うん。フォウルが可哀想に思えてくるぞ。

「できれば尚文様がいいですわ」

「この戦いに俺は参加できるのか？」

「報酬である盾の勇者様が参加？　これは笑わせてくれますね」

ジャラリスの野郎、俺を指差して挑発的な目で皮肉を言いやがる。

「後で吠え面かくなよ？　……じゃあラフタリアかフィーロ辺りがいいか？」

ラフタリアなら相手をボコボコにできる。

俺のところは猛者が揃ってるからなぁ。

「どうやらそこまで吹聴するのに盾の勇者様は汚れたハクコを信じておられないご様子。これは傑作ですね」

うるせえなコイツは……勝つために変な誘導するんじゃねえよ。

「念のために言いますが、この決闘はあくまで人対人なので魔物の使用は禁止されています」

「んー？」

「ラフー？」

そこでフィーロとラフちゃんが首を傾げる。

フィーロは人枠で出場させられそうだが、NGか。

「あんまり信用していないのは事実だが……ふむ」

ここで決闘の出場者をフォウルからラフタリアに交代すると角が立ちそうだが……。

「その心配はありませんわ尚文様！　たとえお兄様が倒れても私が一人で倒してみせますわ」

「アトラ!?　俺はやれるぞ！」

兄貴を戦力外認定とは……フォウルが哀れに思える。

「少し不安だが……」

「相手の指名に乗り、それを踏み越えてこその強さの証明。お兄様が負けたとしてもやり遂げてみせます。尚文様！　どうか許可を」

石橋を叩いて渡りたいところだが……ここまでの条件を引き出せたのはアトラの主張のお陰でもあるか。

最悪負けても因縁をつけて無視すりゃあいいか。そもそもあのジャラリスって野郎が腹立たしい。

アトラもこの前の目覚ましい活躍があるしな。

「わかった。許可する」
「ありがとうございます！　それでは尚文様の許可も得ました。決闘を始めましょう」
アトラの言葉にその場にいた血の気の多い連中が頷いた。
そして昨日の夜に飯を食った会場へと案内された。
どうやらここで決闘となるらしい。
ジャラリス派の亜人獣人……歴戦の猛者っぽい筋骨隆々のミノタウロスみたいな奴が武器を持って今か今かと勝負を待ちわびている。
昨日馬車を預けたミノタウロスよりも大きいぞ。
「なんと……過去の大戦で生き残った英雄を招集したというのか」
「ええ、大事な盾の勇者様を賭けた一戦、どこの馬の骨かわからないような者を出せるはずもない。もちろん、最初から全力で戦ってもらう」
「全ては……シルトヴェルトのため……」
ミノタウロスみたいな獣人もやる気か。
「娘を盾の勇者に娶らせる」
……嫌だ。こんな筋骨隆々のお前の娘が万に一つの美少女でも断る。
俺は女は基本的に嫌いだし、種馬扱いなど言語道断だ！

「しかし……まさか」
　ヴァルナールが俺に不安げな表情を向ける。
「あら──……確かに腕に覚えのあるような子ね。ササちゃんより強いかしら？」
　誰だよそいつ！　と突っ込もうかと思ったが、確かゼルトブルで見たコロシアムで戦っていた奴だったか？
「どんな相手であろうとも、戦うしかないのならやるしか……ないのですね。アトラさん、できますか？」
「ラフタリアさんに言われるまでもないですわ。これこそが忠義の証となるのなら、どんな死地であろうとも私は突き進みますわ！」
「俺は……」
　フォウルがなんか迷いを見せているような気がするが、まあ頼りにしないようにしよう。
「ところで俺は完全に見ているだけなのか？」
「はい」
　……なんだろう、賞品扱いとはこれいかに。
　ぶっちゃけ元康に因縁をつけられた時のラフタリアの心境ってこんなだったのか？
　とにかく、今まで俺達は勝ち進んできたんだ。

こんなところで躓くわけにはいかない。

「アトラ、フォウル！　絶対に勝つんだぞ」

「もちろんですわ」

「く……これもアトラのため、親父のために俺はやる！」

お？　フォウルも結構やる気を見せてるなぁ。

「ふん。汚れたハクコめが」

「お前は俺の親父と戦友だったと聞く……戦場で親父はどんな奴だった？」

そういやジャラリスはフォウルの父親の最期に立ち会ったんだったか。

しかも疑惑が付きまとうとか……聞くのは筋だよな。

「ふん、紛い物め、知りたければ……拳で語ってみろ！」

「……わかった。俺が親父よりも強いか否か……ここで見せてやる！」

「それでは皆様……決闘の準備はできましたね？」

司会の合図で、ジャラリスとミノタウロスがそれぞれ戦闘体勢に入る。

アトラは平常心とばかりに、特に構えも見せずに立っているぞ。

フォウルも戦いに意欲を見せ始めているところを見るに、なんだかんだいっても戦いは好きなのかもしれないな。

兄妹喧嘩しているところしか見たことがないので不安だが。
ゴーンと銅鑼のような音が響き渡った。

八話　戦いの矜持

「はぁあああああ！」
アトラが構えると風が流れ始める。
対戦相手のジャラリスとミノタウロスは、アトラに尋常じゃない力が集まっているのを察したのか思わず息を飲んでいるように……見えるな。
「ふん！　汚れたハクコに我等、純血の猛者が敗れるはずもない！　行くぞ！」
ジャラリスが腰からナックルを取り出して接近する。
その後方にはミノタウロスが隙を狙うように待ち構えている。
「アトラ！」
フォウルが前に出てアトラを庇おうとするのだが、ジャラリスの目標はどうやらフォウルだったようで、ミノタウロスが二人を飛び越えてアトラに巨大な斧で斬りかかる。

重量級かと思ったが、予想以上に速い！
巨大な体躯からは信じられない速度でアトラに向かって跳躍し、斧を振り下ろすその姿は圧巻の一言だ。
「ぬるいですわ！」
振り下ろされる斧の一撃をアトラは紙一重で避け、衝撃を利用して高らかに空中へと移動する。
「これを避けるとは、その気配……楽しめそうだ」
ミノタウロスの方は脳筋なのか、アトラの動きを見て笑っていやがる。
「そっちは任せたぞ！　こっちの汚れたハクコの……見かけ倒しの奴は私が仕留める」
うわ、フォウルが見かけ倒しだとさ。
若干事実だから笑えないな。
「言っていろ！　俺はお前に後れを取るつもりはない！　早くアトラを守らないといけないからな！」
そう言って殴り掛かってくるフォウルに、ジャラリスは笑みを浮かべる。
「ふ、この程度の拳しか乗せられない相手に負けると思ってるのか！」
と、残像を残すような動きでジャラリスはフォウルの腹に拳を沈みこませる。

「ホラホラホラホラホラ！　防御が甘いぞ汚れたハクコォオオオオオオ！」

息もつかせぬラッシュをジャラリスはフォウルに向かって放つ。

「この程度の雑魚が盾の勇者の配下？　笑わせてくれる！」

蹴りに加え、大きく投げつけ、更にそこから追撃とばかりに正拳突き、そして……魔法か？

「ツヴァイト・アクセルブースト！」

瞬間移動とばかりにフォウルの背後に回り込み、両手を合わせて地面に叩きつけた。

ドシンと衝撃が走り、地面が揺れ動く。

僅かな時間に、これだけの連撃……好戦的な国というのが納得の戦闘能力だな。

フォウルは大丈夫か？

「ふん。この程度で沈むのか……面白くもない」

「おらぁあああ！」

で、アトラの方に視線を向けるとミノタウロスが斧を横に薙いでいる瞬間だった。

真空波でも出ているのか、後方にあった柱が分断される。

「ジャラリス！　邪魔をするな！」

ミノタウロスが笑みを浮かべながらジャラリスに念を押す。

「そうはいかない。これも神聖な決闘なのだ。私の顔に泥を塗った汚れたハクコには相応の報いを受けさせねばならん」

「あら？　私一人でも二人を相手できますが、お兄様に勝った気でいるのは少々気が早いと思いますわ」

アトラがミノタウロスの攻撃を避け、流れるように接近を試みるが、ミノタウロスも隙を見せず、アトラの攻撃を斧で絡めて投げ飛ばす。

「お前のような奴とは戦ったことがある。まともに受けてはやられる。さすがは盾の勇者の選んだ者」

「あらあら、これは受け流した方がよろしいでしょうかね？　ここまでやりづらいとは思いませんでしたわ」

「お前も勝手に勝った気でいるな。自分の対戦相手を見ろ」

「ふん……武人とやらは……これだから……既に私の勝利は――」

というところでジャラリスはトドメとばかりに地面に陥没しているフォウルの片足を掴(つか)んで持ち上げた。

が、フォウルは掴んだ手を蹴り飛ばして素早く手で着地してバックステップをして距離を取る。

「動きは速いが拳が軽い。いや、速いように見せかけているだけで速度もそこまでないか」

埃(ほこり)を払う動作をしてフォウルはジャラリスに向かって構えた。

「何！」

「あら？　お兄様、タフですわね」

「この程度、村での修行に比べればどうってことない。その程度が本気だとかふざけたことを言うなよ？」

ジャラリスが舌打ちをして、先ほどよりも殺気を強める。

手加減していたということか。

まあ、俺も目で追えるほど遅い攻撃だったもんな。

ラフタリアやフィーロなら余裕で避けて反撃できる。

そういえばフォウルは日々の修行に加えてアトラと毎晩戦ってるもんな。

タフという意味ではタフかもしれない。

相手の実力を測るためにあえて攻撃を受け止めたってことか。

「汚れたハクコ相手に本気？　私を侮辱するのはやめてもらいたいものだな」

「本気で相手に挑まないのは侮辱以外の何物でもない」

フォウルは目を鋭くさせて相手に怒りを向ける。

「お前は本当に戦場に出たことがあるのか？　貴族のお遊戯じゃないんだぞ」
フォウルの言葉にジャラリスが雄叫びを上げる。
「抜かしたな！　後悔するがいい！」
と、言い合っているが俺はアトラとミノタウロスの戦いの方に意識を向けた。
タッグ戦なのに一対一の構図になってるぞ。
まあ、いいんだけどさ。
「行きますわよ！　はあああ！」
「ぬおおおおおおお！」
ミノタウロスが渾身の一撃とばかりに斧を振り下ろした！
が、斧は奇妙な軌跡を描いて、アトラのすぐ脇に振り下ろされる。
「む……」
「その程度で私に当てるには百年早いですわよ。単純な剛力なら受け流してみせますわ」
「面白い！　ではコレでどうだ！」
ミノタウロスは斧を両手で正面に持って構え、目を瞑る。
な、なんだ？　斧が僅かに光り輝いているぞ。
「力を馬鹿にするな。受け流せないほどの力があれば、そんな小細工はないも同じ」

「……やりますわね。全てを攻撃に乗せるその考え、感服いたしますわ。ではこちらも全力で攻撃を逸らさせてもらいますわ」

「こちらが力だけだと思うな！　ぶもおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

ミノタウロスの体に謎の紋様がカッと浮かび、筋肉が膨れ上がる。

しかし……その雄叫びはどうにかならなかったのか？　一瞬、気が抜けたぞ。

「こ、これは……」

ラフタリアがそこで絶句する。

「何かあるのか？」

「無双活性ではありませんがフィーロのプチクイックに近い……体に魔力を循環させた能力増加をしています」

ふむ……歴戦の猛者か。

「あら、面白いことをしますわね。参考になりますわ」

で、無双活性の真似事をしていたアトラが相手のモノマネとばかりに何かを始める。

それだけでアトラの周りに何か、魔力的なものが集まっているのが龍脈法を習得した俺には理解できる。

「やはり天才か……では、行くぞ！」

「はあああああああああああああああ！」

ミノタウロスの高速移動！
この巨体で素早く動くって、フィロリアルクイーン形態のフィーロを彷彿とさせる。
「わー、二人ともはやーい」
フィーロはそんな二人を目で追っている。
ま、その辺りのセンスってフィーロにもあるからそこまで珍しくないか。
「その身に受けるがいい！　クラッシュブル！」
ミノタウロスは強く地面を踏み締め、アトラに向かって斧を振り下ろした。
「確かに、この一撃を受けたら命はないですわね。こっちも行きますわ」
軽快なステップを先読みして振り下ろされた斧の側面に、アトラが蹴りを当てる。
更に流れるように肘、踵、そして拳で殴りつけた後に突きとおす。
バン！　っと、ミノタウロスの斧から何か……魔力的なものが吹き飛んだ。
「む！　まさかそんな受け流し方が!?」
「込めた力を外へ出し、振り下ろす力への妨害とする。私のライバルの攻撃を逸らすのに使っている手段ですわ」
「く……」
「そこまで気を見せるのは弾いてくださいと言っているようなモノですわ。それなら命中

する瞬間に込めるか、わからないほど凝縮させねば当たりませんわ」

俺は無言でラフタリアに目を向ける。

「ええ、それくらいやらないとアトラさんには防がれます」

つまりあのミノタウロスの必殺攻撃はアトラにとってラフタリアを相手に対処済みってことか。

修行中にそんな域にまで達していたっていうのか？

う～ん……気が見えないって凄く不便だ。

早く習得したいが、俺に機会を与えてくれない。

まあ、なんとなく見えてきたような気がしなくもないけどさ。

「面白い！　こうか！」

アトラの助言を受けてミノタウロスは斧を横に薙ぎつつ、インパクトの瞬間だけ力を噴出させる。

「まだ甘いですわ！　そして今度はこちらが行かせてもらいますわ！」

ミノタウロスの攻撃を避け、屈んだアトラが、ミノタウロスの腹部、腕、そして脇下を通り過ぎて背中を突く。

直後、爆裂音が響いた。

「ぐ、ぐふ……そんな貧弱な体躯でよくやる。だが……」
血を飲み込んでミノタウロスはアトラへの闘志を見せる。
「あら？　予想よりも遥かに頑丈ですわ」
「ここまで血を滾らせてくれる輩は久しぶりだ。面白い。ハクコとは思えない柔の動き……もっとだ。もっと楽しませろ！」
こう、相手は随分と戦いを楽しんでいるように見えるな。
「いつまでも相手をしている暇はありませんが、血が滾るのは確かですわ！」
「では行くぞ！　ぶもおおおおおおおおおおおおおおお」
ミノタウロスが魔法を使ったのか、頭の角の部分が伸びて鋭くなる。
そして突進するかのように前屈姿勢を取り、頭をアトラに向ける。
「あら、野性的な攻撃ですわね。読みでは突進の後に、その勢いを利用した斧の攻撃……アクセルターンですわね」
「よく読んだ……盲目の少女よ。お前は我が国でも有数の猛者だと俺が保証してやろう」
「これは誉れですわね。ではこちらも……その剛力への対処をしますわ」
と、アトラはまるでバレリーナのように爪先立ちになって相手に手を向ける。
うーん……フォウルとアトラの戦いじゃアトラの方が派手だな。

で、フォウルの方を見ると、ジャラリスと殴り合い……じゃないな。
アトラの受け戦法とは逆に、攻め続けている。
まあ、フォウルの拳に対して、ジャラリスがステップで避けているんだけどさ。
しかも……ジャラリスの方は頭脳派なのか、どうも道具を使用しているっぽい。
「喰らうがいい」
「またそれか！」
ジャラリスが煙玉のような道具を地面に投げつけると、フォウルを中心に煙が立ち込める。
戦いが見えなくなるからやめてほしいがな。
まあ、フォウルもその辺りを察してか、すぐに煙から出るのだけど、その時にジャラリスがフォウルに向かって串みたいなものを飛ばしている。
暗器使いだったのか？　他にも辺りに色々と転がっている。
「素手での戦いかと思ったら卑劣なことを」
「卑劣？　頭脳的と言ってもらいたいものだ！」
で、マントの裏に隠していたのか、ジャラリスは刃渡りの長い装飾された剣を取り出してフォウルに斬りかかる。

「拳だけなどと私は言っていない。どんなことがあろうとも最後に立っていた者が勝者なのだ」
まあ……詳しいルールは決めてないからな。
アトラの対戦相手も斧を使っているし、ルール上は問題ない。
だが、最初は持ってなかったくせに後から隠していたものを出す、その考えが気にくわない。
俺が異議を唱えても逃げ切れるとでも思っているのか？
「ほらほらどうした！」
スパッとジャラリスが隠し持った剣でフォウルの腕に斬りつける。
「ぐ……」
攻撃を受けたフォウルが傷口を見て、めまいがしたように頭に手を当てる。
「どこまでも卑劣な」
「だから言っているだろう。勝てばいいんだ！」
「愚かな……戦いの矜持を理解しない奴に、更なる強さなんて身につくはずもない！」
ふらついていたフォウルがなんともないかのようにジャラリスを睨む。
「なに？」

「どんな毒を使ったか知らないが、その程度で俺は倒れん！」
おー……凄く頑丈っぽい台詞だ。
試しにフォウルのステータスを確認する。
毒物とか摂取してるとわかるはずなのだが、特に変化はない。
既に無効化したってことか。
「さすがはハクコと言うべきでしょうな」
ゲンム種の翁が呟く。
フォウルはアトラに毎日鍛えられてるからなぁ。
俺が稽古で開花しなきゃいけないことをフォウルは先にやっているようなものか。
「ふん！　もう立っているのもやっとの分際で抜かす！」
「いい加減、お前の攻撃には飽き飽きだ！」
斬りつけてきたジャラリスの剣を叩き折り、フォウルはジャラリスの顔面に拳を叩きこむ。
「ぐあ……」
鼻から血を流し、ジャラリスは顔に手を当てて、痛みに呻く。
「く……よくも、よくもこの私の顔を傷つけたな！　汚れたハクコの分際でぇえええええ

ええええええ！」
……コイツ、誰かに似てるな。こう……プライドの塊的な喋り方とか……。
誰だ？　接点があんまりない奴なのはわかる。
ただ……プライドが高くて、礼はあるのだが無礼でよく見ると欲望や野心が旺盛な奴。
思い出した！
樹の仲間をやっていた鎧と雰囲気が似てる！
誰に似てるのかわかってすっきりした。
「あの？　ナオフミ様？　何を考えているんですか？　戦いとは全然違うことを考えてますよね？」
「ん？　いや別に？」
ラフタリアの問いを受け流して俺は納得する。
なるほど、野心旺盛で勇者を利用しようとしてる奴ってことだから似てるのか。
しかもプライドが高い！
「汚れた汚れたうるさい！　お前の卑劣な行動が高貴なものか！」
「く……どこまでも……私を馬鹿にするとは、やはりお前は父親とよく似てるな！」
「やっと親父の話が出てきたか。拳で語れと言いつつお前の拳には親父のことなど何もな

いから呆れていたところだ」

「ああ……親には既に勘当され、国外に出たくせに妙に顔が広かったアイツを思い出して腹立たしい！」

嫉妬か？　何か怪しい臭いがしてくるぞ？

「ああ、それは今朝、親父を慕うハクコから聞いた。親父が最後に赴いた戦に、お前も参加していたとな」

そこで俺はゲンム種の翁の後ろで待機していたハクコ種の奴に聞く。

「どういう経緯があるんだ？」

「あのハクコの父親は過去にシルトヴェルトを壮大なカリスマで支配していたタイランの息子でしたのでしょう。雄々しくはありましたが、戦うことに否定的で、タイランとはあまり関係が良くありませんでしたけどね」

その辺りは想像できる。

だが、俺が知りたいのはその先だ。

確かクズの妹と婚約したんだったか？

「ある日、メルロマルクと和平条約を結ぼうとしていたハクコはメルロマルク側の罠に掛けられ、メルロマルクの和平派の者達を殺した罪をなすりつけられたと後に聞きました

な」
「ほー……」
「それ以降の消息は掴めておりませんでしたが、潜伏していた国が戦争に巻き込まれ、正体が発覚、シルトヴェルトの同盟国の兵士としてやむなく戦場に出ることになったとか……そこであのジャラリスと知り合ったのでしょう」
ふむ……ま、あのライオン野郎の戦い方を見ていればどんなことが起こったのか想像できる。
フォウルの父親は雄々しかったが、ジャラリスは卑劣な手段を取りたがる。
不意打ちが大好きとかだろう。
「ほら、話せ！　親父の最期を！」
「ふん！　敵に向かって愚かに突撃して戦死したに決まっているだろうが！　多勢に無勢、一体も倒せなかった愚か者だ！」
「嘘だ！　親父がそんなに弱いものか！　優しく、それでありながら戦いとなれば一歩も引かない勇敢な親父だったんだぞ！」
どんな親だったんだ？
「幼少時は書物を読むのが好きな方でしたな。生まれ持った才能は父親を超えたものでし

たが、戦いを極力避けようとする人でした。まあ、一度戦うと決めると父親と同じく雄々しい姿を見せる方でしたが」

「優男系？」

俺の言葉にゲンム種の翁は頷いた。

優男で伝わるのかよ。

ともかく……なるほど、戦う時は戦うけど普段は物腰が柔らかいというキャラか。

俺、今すごくアニメやゲーム、漫画っぽい思考をしてるぞ。

お約束って感じ。

「ラフちゃんをあやしている時のごしゅじんさまみたいな感じ？」

「かもしれませんよ？　敵には容赦しませんし、みんなの面倒を見ている時のことを考えると重なります」

「違うだろ！」

俺は暴君だ。優男じゃないし、この世界に来る前はぶっちゃけお調子者のオタクだ！

間違えるなっての！

俺達がそんな話をしている間にも、フォウルはジャラリスに向かって拳を振るう。

ジャラリスも負けないとばかりに腰から折りたたみ式の槍を取り出して、フォウルの猛

攻を退けながら反撃を試みている。
　突然槍から穂先が射出されてフォウルの顔面を突き刺そうとした。だがフォウルは先読みしていたのか頭を傾けて避ける。
「ふん！　そんな攻撃が通じると思っていたのか？　ゼルトブルの傭兵共はもっと卑劣だぞ！」
　まあゼルトブル自体が卑怯者の集まりみたいな場所だからな。
「お前と戦友だった？　それこそ冒涜だな。真実がどうであろうとも、お前の口から出た言葉なんて信用できない！」
「なに！　この私を冒涜する気か！　汚れた存在のくせに！　調子にのるなぁあああああああああ！」
「まさか……」
　何か心当たりがあるように戦慄しているが、今は知らん。
　ガオオオンとライオンの咆哮が響き渡る。
　サバンナの王者とか言われるライオンってこんな卑劣な生き物か？
　まあ、ここは異世界でアイツは獣人なわけだけどさ。
　勝てば何をしてもいいとか思っているのだろうか？

むしろフォウルの株がこの戦いで上がっているように見えるぞ。

　俺達の中で最弱認定をされそうになっていたのにさ。

「何をチンタラしている！　コイツを先に仕留めるんだ！」

　で、ジャラリスはミノタウロスにフォウルを仕留めるよう命令しているが、ミノタウロスの方はアトラと戦うのに夢中で聞いちゃいない。

「そんな避け方があるのか……まるで空を舞う鳥の羽を叩き落とすが如く難しい！」

　ミノタウロスの攻撃をアトラは、全て……手で受けて逸らして回転しているのだ。

　どんなに上手（うま）く攻撃が当たっても、逸らされるその軌道にミノタウロスが舌を巻いている。

　なんていうか怒りに我を忘れて殴り続けるとかしそうなのにな。

　冷静に戦う脳筋って感じだ。うん、強いのはわかる。

「ではこれはどうだ！」

　ガチャリと、斧が縦に二つに割れ、二つの片手斧に変化する。

　そして攻撃を逸らせないように両方から挟み込むようにアトラに振るう。

「こう逸らすまでですわ」

　両方から来る斧の猛攻をアトラは片方の斧に手を掛け、もう片方の斧に残った手を乗せ

て踊るように跳躍する。
「はあああああ！」
で、ミノタウロスが上下から挟む軌道を描くと片方の斧の先を僅かに掴んですっと、体を引いた。
「逃がさん！」
「ええ、こちらも誘導しましたわ」
角の一撃を加えようと頭を近づけたミノタウロスの眉間をアトラは軽く突いた。
「う⁉」
「さて、隙ができましたわね。今までの猛攻でどれだけスタミナを消費しましたか？　私は貴方の攻撃をただ回って逸らしていただけですわ」
着地したアトラがミノタウロスの至近距離にまで高速で近寄り、胸を突き続ける。
「うぐ……ぐふ……おぐ……まだまだぁあああ！」
仰け反り、それでも体勢を立てなおそうとしたミノタウロスは持っていた斧を取り落とす。
「しばらく力は入りませんわよ？　力の入る部分を封じるように突きましたわ」
「……それでも俺は、負けん！」

ミノタウロスの全身から、斧を振りまわした時と同じ魔力がぼうっと噴出する。

「さすがは歴戦の猛者……どんな時でも引きませんわ」

「その王者の如き余裕、あの方の血を感じさせる……ふ、楽しくてしょうがない！」

なんて妙に力の入った決闘をしているところに、ジャラリスはフォウルに攻撃を集中しろと命令している。

「く……これだから野蛮な連中は！　作戦を理解していないのか！」

「作戦？　ふ……これは笑わせる」

俺がそこで笑い掛けるとジャラリスが俺を睨みつける。

「お前のは作戦じゃない。負けそうだから助けてくれって懇願だよ。作戦と呼ぶにはあまりにも杜撰（ずさん）だな」

仮にあのミノタウロスが言うことを聞いたとして、アトラをどうする気だ？

黙ってフォウルがやられるのを見ているはずもない。

まあ、見捨てる可能性もなきにしもあらずだが……どちらにしても被害は確実だろう。

「暗器を使って不意打ちばかり、挙句負けそうになると仲間頼り、責任も擦（なす）りつけそうだな。悪いがさせないぞ。アトラの対戦相手については盾の勇者の権限を使って、擁護してやる」

「く……」

お――……心地良い目を向けてくれるな。

お前のような礼節を重んじている振りして欲望を滾らせている奴は、正直言って好きじゃねえから良い感じだ。

奴隷商みたいなのとはまた違う。お前は内心俺のことを嫌っているのがわかるからな。

むしろ奴隷商達の方が遥かに上手だ。

内心は何を考えているのがまったくわからないからなぁ。

「ジャラリスだったか。お前が全ての責任を取るのは、当たり前だろ？　逃がすかよ」

「あの……ナオフミ様？　なんでそんなに楽しそうなんですか？」

「ん？　多分、アイツが全ての黒幕だからだ？　話が上手くいったら拷問でも薬でも何でもいいから自白させてやろうと思っている」

「堂々と凄いことを言ってるわねー、お姉さんも驚きよー」

「んー？」

「ああ、フィーロ。アイツが嘘を言ったら詰問していいぞー」

「うん、わかったー！」

「確か自白剤を盾で作れたな。今まで使う機会がなかったからな。これでもかと強力なやつを実験に使ってみるか」

毒物を食わされそうになったわけだし、主犯格には使ってもいいだろう。
「いや、俺と酒を酌み交わしてみるか？　ハンデくらいはやるぞ？　ま、ルコルの実で俺と飲み比べをするんだがな」
俺の言葉にシルトヴェルトの重鎮共が揃って口に手を当てる。
ゲテモノ扱いか。
「あら～！　ぜひお姉さんもご一緒させてほしいわ～！」
「ああ、サディナが前に言ってたもんな」
ルコルの実って暗殺に使われることもあるらしい。
急性アルコール中毒だな。
「いいだろ？　勇者と酒を酌み交わす権利だ。酔って死んでも本望だろう？」
どうも嘘ばっかり言ってるみたいだし、この国の膿っぽいし、蹴落として損はなさそうだ。
「つーかさー、お前が負けたら責任逃れなんてさせるわけねえだろ？　勇者舐めるな」
「図に乗るな異世界人がぁあああああああああああ！」
俺の指摘にジャラリスが激怒した。
あ、やっと正体を現したか。ちょっと挑発したら結構簡単に乗ってきたな。

いやー……言い逃ればかりでウンザリしてたんだ。

「フォウル、早く仕留めろ。アトラは戦いを楽しんでいてな、お前が止めなきゃずっと戦ってるぞ」

「言われなくてもわかっている！　もう茶番はおしまいだ！」

フォウルが腰を低く落とし、両手を合わせる。

なんだ？　格闘ゲームの有名な必殺技でも出そうなポーズだぞ？

もしくはスーパー野菜人とかの特技。絶対に逆毛の金髪だけにはなるなよ。

「変幻無双流拳技……」

何やら力を込めて目視できるようになった何かをフォウルは握り締めた。

放つんじゃないのか……。

「なんでナオフミ様は残念そうにフォウルくんを見ているんですか？」

「いや、あのポーズは何か飛び出す流れだろ。メルティだって魔法を唱える時に手を前に出したりするじゃないか」

「意味はわからなくはないですけど……何か私達とは違うものを想像してません？」

してない。格闘の極意を見たかっただけだし。

「滅虎拳！」

フォウルは素早くジャラリスに近づき、持っている槍諸共、拳を叩きこむ。

随分とあっさり当たったな……。

「ぐあああああああああああああああああ！」

思い切り殴られたジャラリスが大きく吹き飛ばされ、壁に命中し大きくヒビが入る。

吹き飛ばされていく時にアトラとミノタウロスが睨み合いをしているところを通り過ぎ、双方がハッと視線を向ける。

「ふん！　生ぬるい！」

ズシッと腕を組むフォウル。

ジャラリスが弱いのか、フォウルが強いのかよくわからないな。

「あらー凄いわね」

「そうだな」

「アトラ！　俺も加勢するぞ！」

「いりませんわ。この戦いは私がすべきことですもの」

「ふ……いいだろう！　やってくれる！」

「アトラ！」

「お兄様、邪魔ですわ！」

それでも止めようとしたフォウルの胸をアトラがゴスッと突くと、フォウルが胸を押さえて蹲る。

「うぐ……」

「この場の最強はアトラということか」

フォウルが強く見えたのは目の錯覚か。

だが、アトラよ。シルトヴェルトに盾の勇者の臣下としての誇りを見せるという話はどこに行ったんだ？

「では行くぞ！　これで最後だ！」

「行きますわ！」

ミノタウロスが二つの斧を一つに再度合体させ、引きずる形の構えを取る。

「またそれですか……一度見た技では面白味は半減しますわよ？」

「違う技だ。受けるがいい」

「残念ですが見切ってみせますわ」

「ふ……楽しかったぞ。タイランを継承する者よ！」

「ま、まさか……盾の勇者様、ここは危険です！」

ヴァルナールが俺に警告する。

「いい。俺を誰だと思っている」

盾の勇者だぞ？　攻撃を耐えきれないのは勇者としての存在意義を問われる。

仮に耐え切れないとしたら、そんな奴、一緒に真っ二つになった方が今後のためになる

だろう。

「流れ弾は俺が受け止めてやる。それで盾の勇者であると証明できるなら安いもんだ」

で、ミノタウロスが床を割りながら駆け出す。

アトラも合わせて走り出した。

「うおおおおおおおおおおおおおお!」

ミノタウロスの咆哮、なんか牛を模した魔力の渦を纏っているぞ。

なかなか凄いな。俺でも受けたら攻撃の衝撃で盾が持ち上がりそうだ。

絶対にそんな隙を作る気はないがな。

「剛牛突!」

ミノタウロスが大きく振り上げた斧を、アトラに向かって投げつける。

斧が牛を形作り、アトラに飛んでいった。

「あら……これは雄々しい攻撃ですわね……確かに誉れに値する奥義ですわ」

その割には余裕を見せているな。

突撃してくる猛牛の形をした攻撃をアトラは正面から……猛牛の眉間に指を突き出す。

「ぶもおおおおおおおおおおおお!」

魔力で作られた猛牛と融合するようにミノタウロスが追随する。

「はああああああああああああああああああ！　は！」
　指から手、そして両手で猛牛を受け止める。
　その手には……うん、なんか凝縮された気のようなものが見えた気がした。
「こちらも行きますわ。見よう見まねで行う……変幻無双流……点……いえ、玉ですわ」
　片手で猛牛の猛攻を受け止めたアトラが残った手で数秒ほど何かを生成して、猛牛の眉間に流し込んだ。
「うおおおおおおお……うぐ!?」
　猛牛の中を何か光る玉がめぐっていき、心臓の辺りで炸裂するのが遠くで見ている俺達でも確認できた。
　パアアアアッと魔力で作られた猛牛を纏っていたミノタウロスが姿を現し、アトラに眉間を押さえられた形で止まる。
「見事……剛ではなく柔……タイランとは異なるが、汝こそ再来なり……」
「貴方の最大限の褒め言葉、確かに受けましたわ」
「またいつの日か相見えることを楽しみに……したいもの……だ」
　と、言い切るとミノタウロスはドスンと倒れた。
　どうもアトラにあまりダメージが入っているように見えないから、そこまで強いように

見えないが……どうだったんだろうか？
「サディナ、アトラが戦った相手ってどれくらい強いんだ？」
「そうねー……勇者の補助がなかったら私でも危なかったと思うくらい強いわよ」
サディナ基準ってのがどうもわかりづらい。聞いた俺が悪かったのか？
とはいえ、サディナにそう言わせるということは程々に強いんだろう。
「力だけではなく速さ、そして戦闘の創意工夫……どれも一級品だと思います。ここまでの猛者は確かにいないと思いますわ」
アトラが誇らしげに答える。
ヴァルナールやゲンム種の翁に顔を向けると頷かれた。
「我が国でもツメの勇者の次に強いと評される猛者です。それに勝ったということは、実質猛者の中でも有数ということになります」
「汚れたと評するのは間違いでしょうな。彼女ほど、シルトヴェルトの戦士を体現した者はいないのは事実」
ゲンム種の翁が誇るように答え、言葉を継ぐ。
「悔しいですが認めましょう。此度はシルトヴェルトの上位四種として、ハクコが正しかったと。だが、家臣として、強さを含めて認められないところもまだあるのですから

ね」
「ハクコ？　違いますわ。尚文様の家臣として当然の務め。たとえ、私の血に人間が混じっていたとしても関係などありませんわ」
「ふふ……それでいいのではないですか？　シルトヴェルトの四聖種としての頂点を誰が担うかは後で決めればいいのですよ。今は盾の勇者様に忠誠を誓う。ただ、それだけで」
「それもどうなんだ？」
どうもこの国の方針にはついていけないな。
だが、これでやっとクテンロウへの船を用意して——
「まだだ……まだ、私……俺は負けていない……」
そこに……ボロボロになったジャラリスが立ち上がって異議を唱えた。

九話　獣化

「お兄様、ツメが甘いですわ」
「あ、アトラ!?　く、わかった。今度こそ、トドメだ！」

フォウルが殴りかかろうと構えたその時、ジャラリスは懐から何やら薬品のアンプルを取り出した。

「ふ……まさか私をここまで追い詰めるとは思わなかったぞ。……だがな、私もこの戦いに負けるわけにはいかないのだ！」

ジャラリスはアンプルの先を折ってグビッと飲み干す。

ドクン……ドクン……と、心臓の脈動が遠くにいる俺達にも聞こえてくる。

「何かやばそうな薬でも服用したか？」

まあ、ドーピングの類を禁止するとかルールを定めていたわけじゃないから一概に反則とは言えないけどさ。

かといってこんなことを許すと思っているのか？

常々コイツとは理解が――

「盾の勇者？　ふ……そんな傲慢で厄介そうな奴が傀儡になるものか！」

「大きなお世話だ」

ジャラリスの傷がみるみる癒されていき、余裕の表情を見せる。

「ジャラリス、口が過ぎるぞ！」

「ええ……先ほどの攻防から察するにどれだけ薬に頼ったとしても結果は既に出ています。

早々に諦めなさい」

ヴァルナールとゲンム種の翁がジャラリスを嗜める。

だが、ジャラリスは聞き入れる気などないのかヘラヘラと笑い始めた。

またこの顔か。この手の顔をする奴には碌なのがいないな。

「諦める？　何を言っているんだ。これは新たな時代の幕開けなんですよ。勇者の伝説などという化石のような信仰を捨て、私という神を信仰する……ね！」

コイツは何言ってんだ？　自分で自分を神とか……。

なんて呆れていると、ボコボコとジャラリスの体が膨れ上がり、四つん這いになって吠えた。

その姿は巨大なライオンのようだ。

「はぁ……はぁ……素晴らしい。力が溢れる……」

「貴方……」

「獣人化の更なる先……伝承に存在する獣化をしてみせたというのですか！」

獣化ねぇ……。徐にフィーロの方に視線を向ける。

「なーに？　どうしたのごしゅじんさま？」

フィーロの方はジャラリスの放つ殺気に触発されて戦闘態勢に入ろうとしているが、一

応、まだアトラとフォウルがジャラリスの決闘相手だ。

まあ……フィーロは本性がフィロリアルなので、獣人形態というのはないか。

そこまで違いがないように見えるのだが……どうなんだ？

そう思っているとヴァルナールが俺の方を見て説明を始める。

「我がシルトヴェルトには伝承が存在するのです。亜人から獣人に変身して能力を引き上げる者がいるように、更なる変身を行うことができるという伝承が」

「で、アイツがそれをやり遂げたと」

「おそらく」

危険な薬で暴走とかしてるんじゃないのか？

ぶっちゃけその色が濃い気がするが……まあいい。

「これだけの力があれば盾の勇者など必要ない！　そう！　世界は俺を称えればいい！」

「強さを手に入れて調子に乗っているようにしか見えないな」

フォウルがそこでポツリと呟く。

奇遇だな。俺も今同じことを考えた。

「ふん。調子に乗るな汚れたハクコめ！」

直後、ジャラリスの姿がぶれたように見える。

速い！　が、俺が認識できる速度で動いて、フォウルの前に移動していく。
この中でこの速度を目で認識できているのは……俺、ラフタリア、フィーロ、サディナ、そしてアトラくらいか。
……結構いるな。
「な⁉　瞬間移動をした⁉」
ヴァルナール達の方は速度に追いつけていないように見受けられる。
一般人のＬｖ基準で言えばどの程度だろうか？
少なくとも村の奴隷連中じゃ反応できる奴はいないだろう。
それくらいの速度でジャラリスはフォウルの目の前にその巨体を移動させていた。
「ガアアアアア！」
咆哮（ほうこう）と共にジャラリスは前足で大きくフォウルを薙（な）ぎ払う。
巨体からの一撃に、フォウルは咄嗟（とっさ）に防御の構えを取る。
「うぐ――」
頑丈なフォウルがジャラリスのツメの一撃をくらって腕に傷を受けて大きく吹き飛ぶ。
「な、とてつもなく速い⁉　がは……」
よろめきながらフォウルは構えを取り直す……直後に追撃とばかりにジャラリスが接近

して何度も前足で叩き伏せる。

「どうだ！　この素晴らしいパワーの実験台になる気分は！　身に余る光栄だろう！　ほらほら！　受けるがいい！」

「うぐ……ぐ……く、くそ！」

　ボコボコに打ちのめされてフォウルが地に膝をつけて防御態勢を取る。

　防戦一方か？　こりゃあやばいか？

「はははは！　その程度か！　やはりハクコは単細胞の猪突猛進の馬鹿でしかないようだな！　お前の親も同じだった。ここは俺に任せてお前等は逃げろ？　違うだろ、お前が犠牲になって俺達を生かすんだよ！　余計な抵抗をされたら俺が困るだろ！」

「なに!?　まさかお前……親父に何をした！」

「ああ、後ろから一突きしてやったんだよ。せっかくこっちの作戦を敵国に流して窮地を演出して、一時撤退後に私の……俺の作戦で快勝するって手はずだったのを何度も逆転なんてしやがってよ！　鬱陶しかったんだよ！」

　なんだ、コイツ。急に自白を始めたぞ？

　仮にフォウルに勝っても豚箱行きが確定していないか？

　視線だけゲンム種の翁とヴァルナールに向ける。

すると何やら考え込んでいるようだ。

「死ね！」

トドメとばかりにジャラリスは大きく腕を振りかぶる。

「きさまあああああああああああああ！」

フォウルが声を大きく張り上げた。

なるほど……フォウルの親父に計画を邪魔をされ、挙句、不意打ちして殺したと……どんだけ下衆なんだ？

うん。こんな奴がいても何の利益にもならん。

どうするかは後で検討するが、どっちにしても権力を永久に剥奪すべきだろう。

「コイツ等を殺したらお前等にも教えてやる！　誰がここで一番強いかをなぁあああああああ！　やれ！　お前等ぁああああああ！」

ジャラリスの咆哮に合わせて、どこからともなく魔物っぽい連中が現れて俺達とシルトヴェルトの重鎮共に襲いかかってきた。

「む!?」

ヴァルナールをはじめとしたシルトヴェルトの連中は戦闘態勢をとる。亜人の連中は獣人化し、獣人の連中は身構えて迎撃する。

が……。
「うぐ……なんだコイツ等は⁉」
「武を極めた我等よりも速く、攻撃が重いだと⁉」
「うろたえるな！　盾の勇者様をお守りするのだ」
どうやらジャラリス派の連中がここで革命とばかりに、獣化する薬でも服用してきたってことか。
数も十分。城にいる連中を皆殺しにして自分こそが崇高な存在だと宣言する、なんて安っぽい野心を滾らせているんだろうな。
さっきの自白は全員を殺す気で、冥土の土産だとでもいう気で話したんだな。
ま、非常にわかりやすくて結構。何の遠慮もしてやる必要はなくなった。
「お前等が俺を守ってどうするんだよ。守るのは――」
徐に立ち上がり、俺は飛びかかってきた巨大なゴリラ……の拳を片手で受け止める。
「俺の仕事だ！　ラフタリア！　フィーロ！」
「なんとなくこんな結果になるような気はしていましたが……わかりました」
「フィーロがんばるー」
俺の意図を即座に察したラフタリアがゴリラを斬り伏せ、フィーロが飛びかかってきた大きなオオカミを蹴り飛ばす。

フィーロの蹴りが命中する瞬間、大きく衝撃が発生したのが見て取れたな。
ふむ……フィトリアが報酬を前払いしたというが、確かにフィーロが化け物染みた動きをするようになっている。
「お戯れは程々にしてほしいですわね。私を忘れていますわよ？」
アトラが近寄る獣共を薙ぎ払い、フォウルを守るように立とうとした。だがフォウルが来るなと手を開いてアトラを睨みつける。
「アトラ！　コイツは俺が……俺が仕留めなきゃいけない相手だ！　だから下がっていろ！」
「あら？　では尚文様の元に駆け寄って抱きついてもよろしいのですわね？」
いいわけねえだろ。こんな状況で何を言っているんだ？
だが、フォウルは頭に血が上っているのか、強く頷く。
おい！
「ああ、アイツはこれまでの戦いで頑丈なのは知っている。今は不服だが守ってもらうんだ！」
「お兄様？　それは誤解ですわ。尚文様を守るのが私の役目ですわ」
アトラも変な訂正をするな。

「なにぃ！　アトラを盾にする気か！」
「するかボケ！」
　襲い来る獣共を薙ぎ払うラフタリア達が、俺を呆れた目で見てくる。
「とにかく、フォウル。そいつはお前の獲物だと言うのなら、ちゃんと仕留めてみせろ！」
　俺の言葉に、フォウルは俺とアトラを交互に見てから強く頷いた。
「親父は勇敢に、仲間を信じて戦っていた……その親父に卑劣なことをした奴を、俺は許さない！」
「ぬかせ！　今すぐ親のところへ送ってくれる！　俺にはまだやるべきことがあるんでな！　神殺しという大業をなぁあああああ！」
　ジャラリスはガオオオオッとうるさい咆哮をかまして、トドメとばかりにフォウルに殴りかかる。
　が、フォウルはジャラリスの巨大な前足を受け止め、力強く吠えた。
「うおおおおおおおおおおおおおお！」
　その時だった。フォウルの方からも強い鼓動が聞こえてきたのは。
「な、なに!?　汚れた血のハクコが獣人化するだと!?」
「おおおおおおおおお！」
　フォウルの全身が脈動と共に膨れ上がっていく。

なんだ？　と思ったがサディナがシャチ獣人に変身する時の姿と重なって見えるので、どうやら獣人化するのだろうってことくらいは想像できた。
「お兄様……まさか獣人の姿になるんですの？」
「あらーそうみたいね。フォウルちゃん、資質はあっても変身はできなかったのに、ここでできるようになるのね」
「やっぱ一度変身できれば、次はいつでもってやつか？」
襲い来る獣に雷の魔法を浴びせかけたサディナが頷く。
「お兄様、まさか可愛らしい獣人姿に変身して尚文様の心を奪う気では」
「またその話か……」
キールの前例から、アトラの脳内ではフォウルの獣人化は俺への誘惑ってことになるらしい。
が……バキバキと姿を変えたフォウルの造形が明らかになっていく。
身長は俺よりも少し高いか？
かなり筋肉質だけど……こう、実用的な筋肉の付き方だな。
ミノタウロスみたいな不自然な盛り上がり方はしていない。
こう……虎男と表現したら、シンプルに想像できそうな、筋肉質な白い虎の獣人が巨大なライオンの猛攻を受け止めていた。

うん。かなり男らしい外見だ。

棒を投げたら追い掛けて取りに行く、シベリアンハスキー犬とはわけが違う。

獣人っていったらこうだよな？
フォウル、お前が俺の想像通りの姿に変化してくれて少し嬉しいぞ。
「行くぞ！」
ジャラリスの素早い攻撃を受け止めて、反撃の蹴りを顔面に浴びせかける。
「うぐ！　こしゃくな真似を！　もっとだ！　もっと力を解放するぞ！」
ジャラリスの纏う魔力の質が上昇し、咆哮が響き渡る。
「あらー、フォウルちゃんカッコよくなったわねー」
「凄いですね……羨むべきなのでしょうか？」
ラフタリアが変身したフォウルを見てポツリと呟く。
ラフタリアが獣人になったらどんな姿だろうかと前にも考えたな。
……信楽焼の雌？　もしくはやっぱりラフちゃんか？
「ナオフミ様、こんな時に何を考えているんですか？」
「む、尚文様がお兄様から興味を失ってラフタリアさんを見ている気がしますわ！」
お前等、よくわかるな！
「ごしゅじんさまー大体倒しきったよ」
フィーロが転がる獣共を足蹴にして言った。

俺が出るまでもなかったか？

「く……」

「しっかりしろ！　傷は浅いぞ！」

俺達を守るように前に出た連中……ヴァルナールとゲンム種の翁以外の重鎮が獣の猛攻を退けたのはいいが、傷が深いようだ。

俺は無言で駆け寄って回復魔法を施す。

「ドライファ・ヒール」

その時、ジャラリスが咆哮を上げると同時に、戦闘不能で倒れた獣共がゾンビのように起き上がって、目を怪しく輝かせた。

「「わおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおん」」

「があああああああああああああああああ！」

で、先ほどよりも早く、集まっていた俺達に向かって襲い掛かってきた。

「盾の勇者様！　危ない！」

俺を守ろうと突き飛ばそうとした重鎮共の手を払い、俺はスキルを唱える。

「流星盾」

群がってきた獣共のツメが俺の作り出した結界にガツンと阻まれる。

「があぁ！」

「ぐるぅうううう……」

獣共はまるで狂犬病に冒された犬みたいによだれを垂らして結界にツメを立て、噛みつこうとしている。

「うー……蹴っても蹴ってもキリがないよー」

フィーロが襲い来る獣をフィロリアルクイーン姿で蹴り飛ばして返り討ちにしながら答える。

「そうねー、お姉さんもちょっとウンザリしてきたわね」

雷を放って、フィーロに蹴られて体勢を崩した獣に追い打ちを放つサディナ。

ラフタリアやアトラも負けじと応戦している。

「ふむ、思ったよりも頑丈だな」

「うん。蹴ってもすぐに回復するみたいだよー。フィーロのキックを体を使って大きく逃がしてるみたいー？」

ふむ……説明が凄く下手なフィーロにしてはわかりやすい表現だな。

たぶんシルトヴェルトの猛者が獣化して襲ってきているんだろう。

生半可な手段じゃ致命傷を与えられないか？

「でもなんか変な感じー？」

「そうね。なんていうかちぐはぐな体付きをしてるわね」
「変って何が？」
「ツギハギのようなのですわ」
フィーロにサディナ、アトラがそれぞれ答える。
ふむ……目を凝らして獣共を見ると、人体改造の痕跡らしき繋(つな)ぎ目が見えた。
大方、異世界でキョウがやっていたような人体改造をジャラリスとやらがやっているんだろう。
ラトを連れてきて調べさせたら面白そうだな。
「しかもあのガオーって声で援護みたいなことしてるー」
咆哮に援護魔法効果か……厄介な。
「はぁあああぁ！」
フォウルがジャラリスの突撃を往(い)なし、大きく足を踏み出して腹に正拳突きを当てる。
ベコッとジャラリスの腹部が大きく陥没した。
「ぐぁ！」
ジャラリスが大きく血を吐く。
「まだまだ！」

フォウルは手を大きく広げてジャラリスに飛びかかり、その手のツメで顔面を横に切り裂いた。

「うぐあああああ!?　め、目があああ!　ぐ……おのれぇえええええええ!」

ジャラリスが呻きながら目に手を当てる。

一〇秒もするとジャラリスの目は……肉が不気味に蠢いて再生した。

「血だ……血が足りん。肉……いや、もっと力だ!　力が足りない!」

キョロキョロと辺りを見回したジャラリスは、俺達が仕留めた獣共に目を向け、飛びかかってきた。

「危ない!」

俺の声にフィーロを含めてみんなが距離を取るのだが、ジャラリスは倒れた獣共にかぶりついた。

「うぐああああ!?」

「じゃ、ジャラリス様!?　な、何を――」

「うるさい!　貴様等は黙って俺の糧となれ!」

ジャラリスがぐしゃっと部下の頭を砕き、貪り始める。

共食い……か!?

「これは……」
　さすがのフォウルも戦慄(せんりつ)して、青ざめる。
「させるか！　もはやこれはフォウルとの一騎打ちって次元じゃない！」
「はい！　盾の勇者様の命ずるままに！」
「行きます！」
　ラフタリアが駆け出して、居合斬りを放とうと接近する……が、ジャラリスが喰(く)らっていた方の獣の肉が蠢いて触手となり、それを薙ぎ払う。
「く！」
　抜刀したラフタリアの攻撃で触手が斬り裂かれたが問題はそこじゃない。
　ぐちゅ……ぐちゅっと……もはやジャラリスは口で肉を喰らっていない。
　喰らっていた獣の死体がジャラリスの体となって、触手を生やし、倒れている獣共をかき集めて、膨れ上がっていた。
「ふふ……ふははははは！　そうだ！　こういう力の使い方があったのだな！」
　うげ……それはどっちかというと、碌な結末にならない方の強さだぞ？
　ジャラリスの奴はどんな危険な薬を飲んだんだよ！
「俺こそが至高……神を超えた力を得た！　この力で世界の全てを手に入れてくれる！」

肉塊となったジャラリスが、まるで粘土を捏ねるかのように喋る。
挙句、何かを形造ろうとしている。
待ってやる義理はないな。
「ぐにぐにの肉ねんどー！　やー！」
フィーロが脅えたように俺のところへやってきて、俺を盾にして隠れる。
ああ、この前フィーロは似たようなのに取り込まれたもんな。
ここのところ似たような敵が多いな。
だが、この相手にはそんなのとはスケールが違う不気味さがある。
辺りに漂う血の臭いにウンザリしてくるぞ。
「ナオフミ様！」
「ああ」
「やるしかなさそうねー」
「尚文様の命ずるままに行きますわ」
「アトラ！　く……俺もやるぞ！」
仲間達は特に問題はなさそうだな。
で、シルトヴェルトの連中は……。

「お前等は下がっていろ。取り込まれるかもしれないからな」
ここで下手に前に出られて死なれたら寝覚めが悪い。
「は！」
「わ、わかりました！　盾の勇者様にご加護があらんことを」
「ここはお任せするべきでしょう」
ヴァルナールとゲンム種の翁の言葉に重鎮共が頷く。
で、フォウルが一番前に立つ。
「ジャラリス！　ここでお前の命を断つ！　親父の仇(かたき)だ！」
どうやら先ほどのジャラリスの自白からするとフォウルの父親の仇らしいからな。
策略を張り巡らせ、背後から不意打ちとは。
どこまでも卑劣な野郎だ。
俺はこういう奴が大嫌いなんだよ！　クズやヴィッチみたいでな！
相応の報いを受けさせてくれる！
「概(おおむ)ね同意だ。フォウル、状況が状況だからお前だけで仕留めろというのは無理だ。だが、ここにはお前に力を貸す奴が沢山いる。そのことを忘れるなよ」
俺はそこでフォウルにオーラを……サディナと協力して雷神降臨の詠唱に入る。

「ああ……たとえどんな力、どんな奴と共にいたとしても、俺は奴を仕留めなければならない！」

そこで……俺の視界にアイコンが出現する。

対象に力を注ぎ、獣化させますか？

はい／いいえ

獣化……？　何か俺に選択させるのか？

アイコンが浮かんでいるのはどうやらフォウルだ。

他にもできそうな気配がないわけじゃないが、今はフォウルしか選べない。

なら、やってみる価値はあるだろう。

「フォウル」

「なんだ⁉」

「尚文様がお兄様の名前を呼びましたわ！　ささ、お兄様！　ちゃんと答えるのですわ。どんな指示にも従うのですわ」

「アトラは少し黙ってろ！　どうやら何かしらの技能でお前に特別な力を授けることができるらしい。試してみるか？」

俺の問いにフォウルはしばし迷った後。
「わかった。アイツを仕留めないと更なる被害が増えるなら、俺のため、アトラのためにやってやる！」
「そうか……じゃあ行くぞ！」
俺はフォウルに向かって盾を向け、『はい』を選択する。
すると盾が光り輝き、その光と共に援護魔法がフォウルに振り注ぐ。
「な、なんだ!?　何が――」
フォウルは宙に浮き上がり、魔法の光のようなものに包まれていく。
「な、ナオフミ様！　何を施したんですか？」
「先ほど言った通り、何かの技能でフォウルに力を注いだだけだ」
「こ、これは――」
そこでヴァルナール達シルトヴェルトの連中が手を合わせて祈り始める。
「これこそ神の奇跡……伝承は真実だったようですね」
ゲンム種の翁も祈りを捧げている。
どうやらこの力は勇者の伝承にもあることらしい。
「力が……みなぎる！」

フォウルを包み込んでいた光が散り、俺達の目の前に何かが着地する。
そこには大きな白い虎が立っていた。
「こ、これは……俺が白虎になっているのか？」
「どうやらそのようだな」
俺は徐にフォウルのステータスを確認した。
こ、これは……フォウルの全てのステータスに大幅な補正が掛かっていた。
具体的にはほとんどの項目に俺のステータスに合わせた付与が掛かっている。
フィーロも随分と成長したがその比じゃない。
ラフタリアよりも高い能力値になってるぞ。
こりゃあ、新戦力として大いに期待できそうだ。
だが……俺の魔力が一秒単位で減っていっているのはどうなんだ？
「時間制限があるみたいだ。さっさと仕留めろ！」
「ふははは！　さあ！　新たな神話の幕開けだ！　古(いにしえ)の神を滅ぼしてくれる！」
と、ジャラリスが素早く接近してくる。その姿は更に変化して、キメラのような不気味な化け物と化していた。
速い！　さすがの俺も対処できるか怪しい……というところで、白い残像がジャラリス

の顔面をツメで切り裂く。
「うぐ!?　な、なに!?」
「何を悠長に走っているんだ？　ふざけているのか？」
　自らの変化に対してそこまで抵抗がないのか、フォウルは吹き飛ばされたジャラリスに向かって悠々と答える。
「盾の勇者から卑劣な加護を受けた卑怯者め！　それで勝ったつもりか！」
「お前が言うなと指摘すべきだろうな」
　俺が鼻で笑うようにジャラリスに言い放つ。
「怪しげな薬を服用し、それでも勝てなかったら部下を取り込んで王者気どり、そんな歪な化け物を……誰が信仰するのかよく考えてみろ」
「化け物!?　俺を化け物だと！」
「そうだ。醜いんだよ！　このキメラモドキ！」
　俺の指摘にジャラリスはやっと我に返ったのか、触手を目玉に変化させてうろたえた声を出した。
「馬鹿な！　俺が化け物？　そんなはずがない！　あるものかぁああああ！　うがあああああああああ！」

で、獣のような雄叫びを上げて突進してくる。
「させるか！」
「お兄様！」
なぜかアトラがフォウルの頭に乗っかり、ジャラリスに向かって仕掛ける。
「力を一点に集中して貫くのですわ！」
「ああ、わかった！　アトラ、振り落とされるなよぉおおおおおお！」
フォウルの体から光が放たれ、魔力の渦となって前方に展開される。
これって……ミノタウロスがアトラに向かって見せた技じゃないか？
光に包まれたフォウル達は、光る虎となって突撃した。
「こ、これは古（いにしえ）のハクコにのみ伝わる。伝説の技……猛虎暴君撃!?」
そんな技があるのか？
しかし、この世界の連中はみんなリーシアや錬（れん）みたいなことを言うな。
とは思ったが、俺は黙って魔力維持に努める。
地味に魔力が吸われてくらくらしてんだよ！
「はぁあああああああああああああああああ！」
「うぉおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

61%　位置No. 6050中 3612

アトラとフォウルが一丸となって、ジャラリスに向かう。

そして……風を切る音と共にジャラリスとすれ違い……フォウルが変身を解いて、アトラと二人着地する。

「ぐあああああああああ!?　ば、馬鹿な！　あの薬を飲めば俺は最も強い獣人になるのではなかったのか！　あの野郎！　俺を謀ったというのか！　ありえん！　俺は……俺は――」

着地と同時にジャラリスの内部から光が溢れ……大きく炸裂する！

眩しさを堪えて目を凝らす。

光がジャラリスだったものを飲み込み……弾けて辺りに飛び散った。

まあ、演出というわけじゃないが、巨大な衝撃に建物が大きく揺れたわけだがな。

「親父……仇は討ったぜ」

「やりましたわ！　国賊を仕留めましたわ！」

発言に温度差のある兄妹が揃って俺達の方を向いて手を振る。

「えー……既に答えは出ていたが、勝負あり！　勝者、盾の勇者様の配下であるハクコ兄妹！」

ヴァルナールが勝負がついたことを確認してアトラ達の勝利を高らかに宣言したのだっ

た……。
「これで俺達は自由に活動できるんだな？」
「はい。全ては盾の勇者様の心のままに……我等シルトヴェルトは盾の勇者様を来るべき時の勇者として認定致します」
「随分とアッサリと受け入れたな」
まあ、ジャラリスが仕掛けた反逆を俺達が制圧したというのが大きいんだろうけどさ。
「はい。その大きな理由として、先ほど盾の勇者様の力による更なる変身を見せられたことがあります」
「シルトヴェルトの伝承にあるのですよ。我等が民の真なる姿……力を解き放てるのは盾の勇者様であると」
「ほー……なるほどな」
で、ヴァルナールはアトラとフォウルに頭を垂れる。
「汚れた血と申したことをここで訂正いたしたい。汝達こそ、シルトヴェルトの真なる国民です」
「違いますわ。私は尚文様の臣下ですわ」
アトラは迷いがないな。

「お、俺は……」

　フォウルの方は対応に困ってるって感じだ。

「かっこよかったー。フィーロもあんな感じに変身してみたいー」

　フィーロがフォウルを見て言った。

　お前の場合、本性が獣だろ。

　かといって、獣人みたいに中途半端な鳥のフィーロは見たいような見たくないような……。

「素敵だったわねーナオフミちゃん。お姉さんにはできないのかしら？」

「さあな……」

　というところで脱力感が体を支配する。

　それはフォウルも同じなのか仰向(あおむ)けに倒れた。

「な、何が!?」

「うぐ……ち、力が入らない……」

　必死に立とうとするフォウルが呻きながら答える。

　俺だってかなりだるいぞ。

「よいしょ……」

アトラが倒れたフォウルを足場にして、勝利を宣言するポーズを取る。
……いや、なんでお前は兄貴を踏んでるんだよ。
「お兄様、ご褒美ですわ。よくやり遂げましたわね」
「アトラ！　や、やめろ！」
なんで少し嬉しそうな顔してるんだよ！
「何をしているんですか！」
「あらー……」
「ラフー？」
「んー？」
なんて感じに俺達はシルトヴェルトでの決闘を終えた。
その後、ジャラリスが使っていた薬や反乱作戦の出どころを調べた結果、どうも怪しげな連中と繋がりがあったという話までは行き着いたのだが、ジャラリスが負けると同時に、その連中はフッと姿を消したそうだ。
薬は詳しい奴に解析させることになり、俺は村からラトを呼んで調べさせることにした。
薬を持ち込んだ奴の正体が掴めないのが嫌な感じだな。
ありえるのはセインの宿敵かヴィッチの手の者か……と推測しかできない結末を迎えた

のだった。

十話　勇者の配置

その後、シルトヴェルトから全面バックアップを受けることになった俺達は、シルトヴェルトの船に乗ってクテンロウ目指して出発し、東の国の港に停泊。港でポータルを取って一度村に戻ってきたのだった。

「あ、盾の勇者様、おかえりなさい」

村に帰るとイミアや村の連中が出迎えてくれた。

「ああ、今帰ったぞ。ちょっと時間が掛かったがな」

「皆さん心配していました」

イミアの報告を聞いて、村にいる連中の顔を見る。

セインも来たな。

見たところ大きな変化はないか？

「数日前にセインさんがそわそわしていたんですけど……」

「ああ、見ていたのな」
俺が呼ばなかったから出るに出られずって状況だったのか。
まあ、勝てない相手じゃないと思っていたからな。
余裕はあったし。
「時折、セインさんの使い魔さんが、盾の勇者様が何をしているのかみんなに報告してくださっていたので、大体は把握していますよ」
「ん――」
ふむ、便利なのか、それとも覗き見されていたことを怒るべきなのか……。
まあボディガードみたいなものだし、見られて困るのは犯罪行為を咎められたり証拠にされたりする時だから、セインの行動からして問題はないってことにしておこう。
「襲撃はなかったか？」
「何度かありました」
「ああ……やっぱりそうか」
シルトヴェルトの方でも一度あったらしい。
感覚の鋭敏な奴が警護しているお陰で、クテンロウの刺客は俺達のところまで来られなかったそうだ。

ま、船旅の最中にサディナが潜って雷を放っていたので刺客が来たのはわかっているが、大々的な迎撃にまでは至っていない。シルトヴェルトという大国を相手にクテンロウも大きく出られる状況じゃないだろう、ということだった。

「剣の勇者様と弓の勇者様のご活躍で追い払うことができました。ただ、最初の襲撃に比べて数は少なかったです」

「ふむ……錬と樹は？」

「現在、隣町に稽古に出かけています」

　ババアのところにいると。

「メルちゃーん」

「ああ、フィーロ。隣町に行くなら錬と樹に俺が村に帰ってきたことを伝えておけよ」

「はーい」

　フィーロは相変わらず元気だな。

　というかメルティのところへ遊びに行くのが好きすぎだ。

　まあ、いいか。仲の良い友達だしな。

　しばらくして錬と樹、リーシアが村の方へ帰ってきた。

「尚文、帰ってきたと聞いたから来たんだが」

「ああ、シルトヴェルトの方の問題が大分片付いた」

「聞いた話だが、かなり面倒なことに巻き込まれたらしいな。俺達がいた方がよかったか？」

「いや……あれはお前等がいたらもっと拗れたかもしれない」

錬や樹がいたらきっとシルトヴェルトの重鎮共の対応もかなり変わっていただろう。

敵国の勇者と親しい関係を築いている盾の勇者など信仰に値しない、とかあのライオンはぶっ放した可能性が高い。

「全て私の活躍で事が丸く収まったのですわ」

「……」

アトラの奴、絶妙なタイミングで自分の活躍を宣伝してきたな……。

否定できないのが非常に悔しい。

結局は力技になったし、アトラとフォウルの活躍でシルトヴェルトの連中が納得したのだから、文句も言えない。

しょうがないからアトラの頭を撫でてから後ろに下がるように指示をする。

「アトラ！　く……」

フォウルは悔しげに呻くが、事実だからな。黙ってもらうほかない。

連れていったのが良いのか悪いのか……ほんと、借りを作ってしまった。
この埋め合わせをどうしたらいいかを考えなきゃな。
「悔しいですが、アトラさんが活躍したのは間違いないです……ね」
ラフタリアもしぶしぶ同意している。
「色々と大変だったんだな。それで、あとどれくらいでクテンロウに入れそうなんだ？」
「船が順調に進めば明後日頃には入ることができるらしい。ただ……一波乱ありそうだ」
「お？　アンちゃん」
そこになぜか武器屋の親父がやってきた。
「調子はどうよ」
「今、その経過について話していたんだよ。武器屋の親父こそ、どうしてこんなところにいるんだ？」
一度城下町に帰ってもらったはずだ。
「あの後、まったく音沙汰がなかったから店を休んでトーリィと一緒に様子を見に来たんだよ」
「そうだったのか……悪かったな。色々と忙しくてな」
アトラの活躍でシルトヴェルトの問題が片付いた後は割とせわしなく行動していたからなぁ。

ジャラリスの背後関係や部屋を調べ、急いで船の手配をしてもらい、船に乗って移動を開始等……村に帰る暇もなければ報告のために武器屋に寄る暇もなかった。

「で、アンちゃん達は明後日には目的の国に入国ってところか？」

親父に聞かれて俺は地図を指差す。

「あー、この辺りか、丁度良いから連れてってくれねえか？　その辺でしか採れない素材があってな。クテンロウに入るなら一緒に連れてってくれよ」

親父が両手を合わせて頼んでくる。

それから親父はこの前渡した、刺客が持っていた武器の破片を取り出す。

「トーリィと調べてわかったことなんだけどよ、この武器なんだけどな」

「ああ」

武器屋の親父に調べてもらっていたんだ。

何か進展があったのだろうか？

「どうやら俺の師匠が作ったものみたいなんだ」

「なに？」

確か武器屋の親父とイミアの叔父の師匠の話は少しばかり聞いた。

「親父の師匠がクテンロウの謎の武器の作り手？」

「その可能性が高い。だから俺も連れてってくれねえか？　もう少し調べてえんだ」

「しかし……」
　それが事実だとして、武器屋の親父を同行させる必要があるのか？
　できれば村で待っていてもらうか、隣町に出張してきてほしいんだが……。
　とはいえ、今まで良くしてくれたしな。
「危ないぞ？」
「危険は承知の上だぜ、アンちゃん。それに俺はそれなりに腕に覚えがあるんだ。無駄にやられたりしねえよ」
　ふむ……他ならぬ親父の頼みだしなぁ。
　迷っていると錬が手を挙げる。
「たぶん大丈夫だと思うぞ？　町の方で稽古をしている俺達にレクチャーしてくれるほどだ」
「そういえば、私は親父さんに剣の使い方を教わったんでしたね」
　ラフタリアが思い出に浸るように答える。
「基礎の基礎だけだけどな」
「最近じゃお姉さんとやってるわよねー？」
「はい。刀の使い方がやっとわかってきました」
「そういえばそうですわね。厄介な相手になってきましたわ」

「アトラさん、負けませんからね」
ああ、そういや船旅の最中、ラフタリアはサディナと稽古をしていた。
主に刀の使い方を詳しく教わっている最中だ。
サディナの奴、一番得意な武器は銛とか槍らしいのだが、他にも心得があるそうだ。
どんだけハイスペックなんだ？
「具体的なLvは？」
「冒険者業も一緒にやっていたからなぁ……87ってところだぜ」
地味に高いな！
それなら問題は……ないか？　かなり不安だけどさ。
「ふむ……わかった。できればクテンロウで安全を確保できてから連れていきたいんだが……」
「冒険も時には必要だぜ。それに……下手に敵側に師匠がいて、アンちゃんや嬢ちゃんに倒されたりしたら、後で行っても意味ないだろ？」
……そうだな。
刀鍛冶ってくらいしかわからないし、戦う相手一人一人を確認するのもどうかと思う。
顔を知っているイミアの叔父を連れていくのも手ではあるが、Lvの点から考えると親

父か？

「絶対に無茶せず俺から離れるなよ？」

「わかってるって。アンちゃんは心配性だな」

そりゃあ今まで色々と良くしてくれた相手を気遣うのは普通の感情だろう？

「尚文は口は悪いが、基本的には誰かを守ろうって姿勢だ。心配するのは当たり前だろ」

錬が代弁してくれるが、勝手に俺をわかった気になるなよ？

……指摘したら地雷を踏みそうだから黙っておこう。

「で、俺達も一緒に行った方がいいか？」

「村の方に襲撃があったら対処してもらうつもりだ。だからある程度の戦力は残しておきたい」

一応、村の連中も心得がないわけじゃない。

だけど代理のリーダーとして戦ってくれる奴が必要なのもまた事実。

錬や樹はなんだかんだいっても、ゲーム風で言うなら強ユニットだ。

クテンロウへ攻め込む時に連れていったら心強いが、その分、拠点の守りが疎かになる。

今のところは襲撃が少なくて助かっているが、俺達の留守中に村を占拠されて村の連中が人質にされたら非常に厄介だ。

「もちろん、それはクテンロウに入るまでだけどな」

ポータルで移動できる俺達はいつでも村に戻れる。

このアドバンテージを使って防衛をしていけばある程度はどうにかなるだろう。

そのために常時、俺を監視できるセインが遠くで見張っているんだしな。

「そもそもまだ船旅だし、船上で戦うことも考えなきゃならない。そこに錬を連れていったら危ないだろ」

「う……」

俺の言葉に錬が呻く。

そう、錬は泳げない。

しかもサディナを量産したような敵だって出てくる可能性は大いにある。

そんな危険な場所に錬を配置するのはかなりリスクを伴う。

やっとのことで味方になったのに、戦死されたらたまったもんじゃないしな。

「まあ、暇があったら泳ぐ練習でもしておけばいいんじゃないか？　幸い、海の魔物の素材で出た武器で泳ぎやすくはなるしな」

「わかった。だが、すぐには無理だな……」

「もちろん、それくらい承知の上だ。だから錬は村と町を守ってくれていればいい。必要になったらポータルで呼ぶ」

「そうか……力になれなくてすまない」

ほんと錬は真面目になったなぁ。
俺の中で日に日に評価が上がっていっている。
「気にするな。それよりも早めにカルミラ島の温泉で呪いを解除してもらいたいところなんだがな」
警戒を強めちゃいるが、温泉へのポータルを取りに行く余裕がない。
完治までまだ時間が掛かるのが問題なんだよなぁ。
どうしたものか。
「樹は泳げるよな?」
「はい。僕は泳げます」
相変わらず樹は呪いの所為で受け答えはするけど感情が感じられないな。
以前の樹に比べれば遥かに楽ではあるが、こうも感情がないとちょっと不気味だ。
「クテンロウに同行するなら船上からでも射撃ができる樹の方が好ましい」
「尚文さんが命じるのなら……」
うーん……樹の運用も錬同様に悩むな。
クテンロウに入るまでもそうだが、入った後で何か起こった場合……具体的には現地の戦力だけで挑まないといけなくなる可能性を考えると、連れていくべきなのは確かだ。

錬の場合は船上戦闘は期待できないが樹の方はまだ役に立つ。
リーシアもセットならかなり強力だ。
ただ、クテンロウの敵が使用していた、勇者の攻撃を弱体化させるあの武具が怖い。
まあ、それはどこで戦っても変わらないけどさ。
「じゃあ樹とリーシアは明日、同行してくれ」
「わかりました」
「ふぇえええ……未知の国に行くんですね！」
相変わらず普段のリーシアって情けない声を上げている。
どっちにしても今はやるべきことをやるしかないか。
「ナオフミちゃん、ナオフミちゃん」
「なんだ？」
サディナが話を終えた俺に声を掛ける。
「この先のことを考えてガエリオンちゃんも同行させるといいと思うわよ？　竜繋（つな）がりで、水竜様が近づいてきたらわかると思うわ」
竜の縄張り的な要素か？
それならフィーロだって代用できるだろうと言いたくなったが、ガエリオンは飛べるか

らな。何か困ったら使えるか。

「わかった。結構な団体で乗り込むことになりそうだな」

よくよく考えてみたら村の連中総出で乗り込むという手もあるんだよな。

しかし、なんだかんだで行商とかは平常業務でさせているんだ。

金は重要だ。

シルトヴェルトからの多大な援助とか期待できそうだけど、これ以上あの国を利用していると深みに嵌りそうだしな。

雁首揃えて祈られるのは気色悪くてかなわない。

「どっちにしてもだ。明日の朝には船で出発するから準備をしておいてくれ」

「承知しました！」

とまあ、時間は過ぎていった。

十一話　問題のある名工

翌日、精鋭を集めた俺達一行を乗せて、クテンロウ行きの船は出発した。

船員はシルトヴェルトの連中ばかりだ。樹を乗せる時に若干警戒されたが、俺が睨んだら静かになった。

で、夕方に差しかかった頃。

「ラフー」

「じゃーん」

「船の先端でポーズを取るな！　縁起が悪い！」

フィーロとラフちゃんが何を血迷ったのか船の先端で両腕を上げてポーズを取っていた。

それ、沈没する豪華客船の映画で有名なポーズだぞ。

誰から教わった？　錬か樹の可能性が高いか。

船の先端近くには凝った装飾のランタンが吊るされていて、火が灯っている。

ヴァルナールやゲンム種の翁の話ではこれがクテンロウへと進入するための道具らしい。

これがあるお陰で荒れ狂う海流の中を抜けることができるとか何とか。

「不思議な光ですね」

ラフタリアがランタンに近づいて中の明かりを見ながら呟く。

「特殊な力の流れを感じますわね……これを辿ればいいのでしょうが、不規則に変わりす

ぎて真似るのは難しいですわ」

「うう……」

フォウルは船酔いでダウン気味だ。

船に乗ってからずっとこうだ。

シルトヴェルトでの決戦の時とは雲泥の差ってほど、悲しい姿をしてるぞ。

「ナオフミちゃん、ラフタリアちゃん。あの渦を見てー」

サディナが船の周りにある渦潮を指差す。

よくよく見ると渦潮の中を進んでいるんだよな。

「よーく確認すると、外向きに渦が発生してるのがわかるんじゃないかしら？」

「言われてみればそうだな」

全ての渦の向きが一定でかなり気色悪い。

なるほどこれが、出るのは簡単で入るのが難しいという海域か。

「サディナやラフタリアの両親はこの渦を抜けてきたのか？」

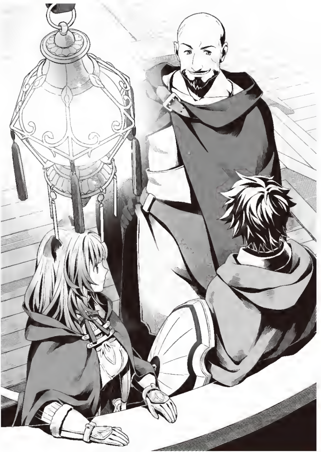
「そうよー」

よくもまあ、こんな渦の海域を抜けたな。素直に感心するぞ。

「アンちゃんの仲間は騒がしくていいな」

武器屋の親父がそんな俺達に声を掛ける。

ちなみに出港前に親父は港周辺のものを色々と買い込んで、俺に輸送を頼んできた。
まあ、多少時間があったから応じた。
帰ったら良い武器を作ってくれるらしいから期待しておこう。
ちなみにシルトヴェルトの先の国々はぶっちゃけ和風っぽい匂いのする国の集まりだ。
亜人も人間も、人種の隔たりこそあれど割と問題はないように見える。
「ところで親父の師匠ってどんな奴なんだ？　なんか元康（もとやす）っぽい奴だって聞いたが」



武器屋の親父の過去にどんな歴史があるのか気になる。
「あー……そうだな。腕は一級品だぜ。俺も未だに勝てる自信がねえな」
「で、村に来た刺客の持っていた武器がその師匠が作ったものに似てるんだったか？」
「ああ、間違いないと思うぜ。ただ……師匠はクテンロウ出身だったのかと聞かれてもよくわからねえな」
「そうなのか？」
「なんつーか風来坊的な人でな。俺だって最初は鍛冶を学びながら各地を巡っていたんだが、師匠の打つ武器を見て一目惚れして弟子入りしたんだ」
武器屋の親父の話をかいつまんで説明すると、親父は若かりし頃、鍛冶師としての見聞を広げるためにいろんな国で冒険者をしていた。
ある日、立ち寄った……近隣で作られた武器を代理で販売する武器屋で凄い作りの武器を見て、その武器を作った鍛冶師に弟子入りをしたらしい。
それほどまでに研ぎ澄まされた武器……刀と剣だったそうだ。
それまで武器屋の親父は剣に特化した鍛冶師だったとか。
「そういや当たり前のように親父にいろんな武具を頼んでたけど、よく考えたら凄いことなんだよな？」

武器にしたって剣だけでもものすごい工程があると聞く。
ここに槍や弓、短剣、その他多数の武器、更に防具まで揃えているのだから素直に賞賛できる。
「あー……まあ、俺の店は雑多に扱ってるな。オーダーメイドにもできる限り応える方針だ」
親父はなんとも気恥ずかしそうに答える。
「師匠の言葉で『鍛冶師ってのは特定の武器専門なんてやってるとどこかで行き詰まる。広い視野を持って武具の製作に当たれ』ってのがあるのよ」
「だから着ぐるみまで扱ってんのか」
「アンちゃんがあんな際どいのを持ってくるのが問題なんだろ」
フィーロ着ぐるみ然り、ペックル着ぐるみ然りだな。
「まあ、専門家に聞くことはあるが、素材を最大限生かせるように分析は常にしてるつもりだぜ」
「わかっている。で？　親父はそいつに弟子入りして色々とやっていたわけだろ？」
「まあな。世界中を巡りながら、色々とやっていったな……まあ、師匠の女癖の悪さに振り回されたり、多額の借金を返済させられたりとか色々と経験したぜ」

「それ……鍛冶関係なくないか？」
俺の言葉に親父が苦笑いを浮かべる。
「まあ、そんなわけで師匠の腕は凄くても最後まで弟子を続けたって奴はごく一部なわけよ。俺とトーリィ以外はみーんな逃げちまったぜ」
「イミアの叔父か。奴も結局は途中で抜けたんだったか？」
「あと少しで免許皆伝ってところで、実家の方で色々あったらしくてな」
「聞いた話じゃ金物屋をしていたらしいが……」
共通点はあると思う。
が、鍛冶師が金物屋でいいのか？
「話を戻すぜ。で、弟子入りしていたんだが、ある日、置き手紙を一つ置いてどっか行っちまった。もうお前に教えることはない。好きに店を開くがいいってな」
「そこだけ聞くとカッコいいが……オチがありそうだ」
俺が親父を半眼で睨むと親父は思い切り苦笑いをした。
「ああ、半日もしないうちに女と借金取りが怒涛（どとう）のように押しかけてきてな……」
……うん。完全にダメ人間だ。
出会ったら有無を言わさず処罰すべきだろう。

「親父の目的はわかったぞ。その時の恨みと今後のことを考えてだな」

「……アンちゃんにこの話をしたのは失敗だと今、心の底から思ったぜ」

何か親父が俺を半眼で見てくる。

なんだ？　俺は間違ったことを言ったか？

「違うのか？」

「まあ、あの女癖の悪さと金使いの荒さをどうにかさせたい気持ちはなくもねえぜ。ただな、そうじゃねえんだよ」

ふむ……親父なりの考えがあるということか。

「師匠が作った武器を奴等が偶然持っていただけかもしれねえ。クテンロウに行っても何の手掛かりもないことだって考えられるんだ」

「確かにな」

別にその鍛冶師がクテンロウにいなくたって問題はないだろう。

だけど親父は師匠とやらを未だに尊敬していて、知りたいことが山ほどあると。

おそらくそんなところだろう。

「どっちにしてもだ。師匠の武器がアンちゃん達に迷惑を掛けているなら俺は調べなきゃならねえ。アンちゃんに贔屓(ひいき)にしてもらっている鍛冶師としてな」

俺のため、果ては師匠のために、親父がやらなきゃいけない問題だってことなんだろう。

「それにな。師匠の武器を追っていけば、行き詰まっている問題が晴れるような……そんな気がするんだ」

そういえば俺は武器屋の親父に盾の製作を頼んでいたんだった。

霊亀の素材は癖が強く、盾と呼べるものを作ることに行き詰まっていると親父は言っていた。

イミアの叔父と話をしていくうちにある程度の目処は立ったが、まだ納得できる状態ではないと。

ここで親父の悩みを解消させることさえできれば、もっと良いものができるかもしれない。

なら俺は付き合うべきだろう。

この世界で俺が濡れ衣を着せられた時、最初に真実に気付いて手を差し伸べてくれた人なんだから。

「わかった。手掛かりが見つかるように協力しよう」

「おうよ」

そんなわけで親父の話を終えて、俺はクテンロウがある方角を見つめる。

「キュアアアア」

で、ガエリオンは空を飛ぶ鳥のように船の周りを飛んでいる。

セイン、ウィンディアも同行したがったが、ラトと一緒にシルトヴェルトでの調査に行くことになったので別行動となった。

特にセインは敵の匂いを察知していたので任せた感じだ。俺の肩にガエリオンが子竜モードでとまる。

「ふむ……良い風だ。だが、船から離れると急な風で飛ばされそうだぞ」

錬もウィンディアもいないからか遠慮なく親が出てきて喋(しゃべ)っている。

「何か不穏な気配があったら言えよ」

「わかっている。だが、不穏といえば不穏であるな」

「そうなのか？」

「強いて言うならはっきり察知はできないが、ドラゴンの気配が遠くからでもわかるな」

「サディナの言う水竜って奴か？」

「おそらくな。気配的に言うならば……結界維持に努めていてこちらに対して敵意はない」

「そうか」

「ただ、何が起こるか常に警戒しておいた方がいいだろう」

そんなこと、言われなくてもわかっている。

「もう少しでクテンロウの領海に入るとのことです。ですが、まだ時間が掛かるのでしば

しのお待ちを」

ヴァルナールが俺に近づいてきて敬礼して言う。

……盾の宝石が光った。

「ん？」

何かあったのかと思ったが、それ以上の変化はない。

俺達の船は問題なく進んでいった。

その日の夜……霧の立ち込める海域を進んでいると大きく船が揺れた。

「な、なんだ？」

船室で休んでいた俺達は部屋の扉を開ける。

「敵襲！　敵襲！」

「敵襲だぁ？」

まあ、ありえると思っていたが、懲りない連中だな。

「賊が船に乗り込みました！　現在応戦中！」

ヴァルナールがやってきて俺に報告する。

「どうか安全な場所に避難ください」

「ここで俺が避難してどうするんだよ」

68%　位置No. 6050中 4050

「そうですわね！　賊には命をもって償ってもらうべきですわ！」
アトラ、またお前は過激なことを言うのな。
「あらー……」
「何事もなく潜入するとかはできないんですね」
半ば諦めるようにラフタリアが呟く。
「なになにー？」
フィーロが眠そうな顔で聞いてくる。
その足元ではガエリオンが寝息を立てていたが、騒ぎを聞きつけて起きた。
本当は、地味に仲良いんじゃないのか？
「ま、敵の狙いはラフタリアだからな。しょうがないだろう」
「既に弓の勇者様達が甲板で応戦しているとのことです」
別室で休ませていた樹達はさっそく戦闘に入っているわけか。
大丈夫だと思いたいが、行くしかないか。
「行くぞ」
「うう……」
未だに船酔いでダウンしているフォウルはどうする？
「お兄様、まだ無様な姿をお見せになるのですか？」

無様って……船酔いで困っている兄貴に向かってぼろくそ言うんだな。
船酔いなんて体質なんだからどうにもならないだろうに。
しかしアトラの声にフォウルがむっくりと起き上がって首を振っている。
「アトラ、俺は行くぞ」
妹の言葉ならどんな無茶でもするってか？
ホント、よくやる。
まあフォウルがそれでいいなら別にいいけどさ。
「よし！　今度こそ賊を捕らえて色々と吐かせるぞ！」
「はい！」
「吐かせられるといいんだけどね～」
「がんばりますわ！」
「フィーロがんばる～」
「ラフ～」
「キュアアア」
というわけで俺達は甲板に上がった。
俺は辺りを確認する。ふむ……サディナみたいなシャチ獣人が甲板に何人も集まっている。

他に人魚っぽい奴に河童っぽい奴がいるな。
更に白蛇みたいな獣人か？　烏天狗みたいな奴もいる。
結構バリエーション豊富だな。
渦潮の中から船を目掛けて魔法を放ってきているようだ。
シルトヴェルトの魔術師が応戦している。
「河童か」
「ふえええええ」
あ、リーシアも絆の方の世界で経験しているからか、河童を警戒している。
「この世界じゃ河童って魔物か？　それとも獣人枠か？」
「というと？」
「ああ、異世界では魔物枠でな」
って冷静に話をしている暇はないか。
襲いかかってくるシャチ獣人と河童に対して戦闘態勢を取る。
「流星盾！」
流星盾を展開し、周りにいる仲間を守る。
「ドライファ・チェインライトニング！」

サディナが魔法を唱えて甲板にいる敵に向かって雷を放つ。

「うぐ……」

敵も熟練者なのか、サディナの魔法を逃がすように銛を避雷針代わりにして避けた。

「我等シルトヴェルトの者を甘く見るな！」

と、シルトヴェルトの船員とヴァルナール達が甲板にいる敵と交戦している。

うん、動きは五分五分だ。

「流星弓！」

樹がリーシアと息を合わせて近寄ってくる敵を矢で射抜く。

「お兄様、行きますわよ！」

「おう！」

アトラの指示に従ってフォウルが駆け、敵を蹴り飛ばしに掛かるが、相手の力量の所為で決定打にするには一歩及ばない。

それでも腕力などの能力面では勝っているのか、押している。

「スターダストブレイド！」

続いてラフタリアも鞘から刀を引き抜いてスキルを放った。

ここ最近の練習の成果なのか、ラフタリアの刀が流れるように敵を捉えている。

「ぐわあああぁ！」
　ズバッと綺麗に斬られてラフタリアに襲いかかった獣人が倒れ伏した。
「ラフタリアちゃんも大分、刀を使えるようになってきたわね」
「まだです……もっと、上手く使えるようにならなくては」
「天命様は一人で十分だ！　死ね！」
　と、刺客が斬りかかる。
　が、そこは俺から見ても見当違いの場所だぞ？
　ラフタリアに背中を見せて空を切るとはどういう発想だ？
「ラフー」
　ボフンと切られた場所の真下でラフちゃんが鳴く。
　ああ、幻覚を見せていたのな。
「どっちにしても――」
　俺はラフタリアに狙いを絞る刺客達を睨み、エアストシールドなどのスキルを発生させて行動を遮る。
「隙がないなら隙を作って、ラフタリア達に仕留めてもらうまでだ」
「はい！」

「行きますわよ！」
　アトラが駆け抜けざまに相手を手で突く。
「ぐふ……」
　それだけで刺客共は前のめりに倒れる。
　続いてフィーロが飛び出して蹴りを放った。
「とー！」
　フィーロの蹴りを受けてシャチ獣人が船から落ちた。
　落ちたシャチ獣人にフィーロが追い討ちを掛けようとしている。
「フィーロ！　追撃はやめろ！　海中ではあっちの方が有利だ」
「はーい」
「キュアアア」
　ガエリオンは空中で烏天狗共の相手をしているのだけど、風が強くて敵も煽られている感じだ。
　動きは良いが、ガエリオンが広範囲に放つ炎のブレスを受けて焼け落ちる者が結構いる。
「喰らえ！」
「おっと！」

俺に向かってまた怪しげな刀で斬りつけてきた獣人の攻撃を、武器屋の親父が受け止める。
鍔ぜり合いだ。
若干親父が押している。
「その刀はどういった経緯でお前等の手にある？　教えてくれねえか？」
「は！　賊に語る口など持たぬ！」
「なら吐かせるまでだ！」
親父が剣を強く握りしめ、相手を突き飛ばしながら——剣先を回転させて巻き打ちを放って相手の刀を弾き飛ばす。
「あ……く——」
「隙だらけだぜ！」
刀はスタンと甲板に深く突き刺さった。親父は腰から中ぐらいのハンマーを出して、得物を失った獣人の懐に、鎧諸共衝撃を与える。
「ぐう……く……このまま無様な姿をさらすものか！」
相手は倒れる直前、何をどうしたのかわからないが、体が破裂して自爆する。
「死ぬことはねえのに……」

「まったくだ」
親父の言葉に俺も同意する。
別に負けたら取って食うわけじゃない。拷問して吐かせるだけだ。フィーロの餌の刑もいいな。
「ナオフミ様が何かより酷いことを考えているような気がします」
「そうか？」
大分敵が減ってきたな。
なんだかんだいってシルトヴェルトの猛者も乗船しているし、万全の態勢で来ているからどんな刺客が来ても対処できる。
敵も不利を悟ったのかピーッという音と共に船から逃げ出して海面へと落ちていった。
「待て！」
「深追いはお勧めしないわねー」
サディナの警告に、シルトヴェルトの連中も後を追うのを躊躇する。
ああ、確かシャチ獣人……ルカ種だと思われる連中って水中じゃあ地上最強のハクコ種ですらも勝てないんだったか？
「また来るかもしれない。乗員常時警戒態勢！」

「「は！」」

とまあ、頼もしいシルトヴェルトの連中は平常業務に戻っていった。

親父は甲板に突き刺さった刀を引き抜いて刀身を確認する。

「製作時期は……この前のより新しいな」

「そうなのか？」

「ああ、偶然、師匠のものがあったのかと思っていたが……どうやら違うみてえだ」

「ふむ……」

樹達も安全を確認して俺達の方に来る。

「これで敵は全部ですね。バリスタの準備はしておくべきでしょうか？」

そういや樹はバリスタが使用できるんだったな。

今の樹ならばラフタリアに撃たせていたのとは別次元の強力なやつを放てる。

……どうも対勇者用の武具を使っているみたいだけどな。

「この渦の中を襲ってくるって凄いです。見ていたら当然のように泳いでいきましたぁ」

「何かしらの加護でも掛かっているのか？」

「水竜様の加護を直接受けている品を持っていたのかもしれないわね」

サディナが警戒気味に呟く。

「それだけ、俺達に来てほしくないってことだろ」

相手の困ることをするのが戦いの基礎だ。順調に事が進んでいるな。
「やりましたわね」
「フィーロ達の勝利ー」
「それもそうよね。お姉さんも心配しすぎ――」
と、俺達が甲板で話をしている最中だった。
「キュア!?」
まずガエリオンが反応して俺達の方を向いた。
その瞬間！
スパンと……何かが俺とラフタリアがいる辺りを、人を避けるように器用にくり抜き、海面へと通り過ぎていった。
と、同時に渦潮が水の竜巻となってくり抜かれた甲板の一部を引きずりこむ。
「うわ――」
俺はラフタリアと一緒に急いで移動しようとしてその竜巻に引きずりこまれそうになる。
足場として、エアストシールドを唱えようとしたが、間に合わない。
「ナオフミちゃん！　ラフタリアちゃん！」
「キュアアアアア！」
サディナとガエリオンが追うように飛び出し、その数秒後にアトラが追い掛けてくる。

「尚文様！」
「アトラ！」
「お兄様!?」
そこでフォウルが咄嗟にアトラの手を掴んで引きとめる。
「ごしゅじんさま!?」
「ふぇえええええ！」
「尚文さん！」
「アンちゃん！」
フィーロ、リーシア、樹、武器屋の親父が俺に声を掛けるが、僅かに遅く、揃って渦に落ちてしまった。
俺達は竜巻に飲まれてもみくちゃにされた。視界が高速で移動していく。
「ラ、ラフタリア」
「ナオフミ様！」
咄嗟に手を掴んで離れないように強く握りしめる。
前にも似たようなことがあったな。
「ナオフミちゃん！　ラフタリアちゃん！」

サディナが俺達を守るように飛び込んできて、必死に泳いでいる。
サディナの背中にはガエリオンがくっ付いているようだ。
「ポ、ポータルを……」
俺は意識を総動員して叫ぶ。
「ポータル、シールド！」
一旦戻ることになるが、しょうがない。
そう思って唱えたのに、転送不可の文字が浮かび上がった。
こんな時に限って！
竜巻に巻き込まれ、俺の意識は遠ざかっていったのだった……。

十二話　水竜の斡旋

「う……」
ピチョンと雫が頬に当たってぼんやりとしていた意識が覚醒する。
目を開けると、仰向けに寝かされていた。

顔を横に向けるとラフタリアも同様に寝かされている。
右手でずっとラフタリアの手を掴んでいた……らしい。
「あら？　気が付いた？」
頭を振りながら起き上がると、立っているサディナが覗き込むように、俺達に声を掛ける。
「キュア！」
サディナの肩にはガエリオンが乗っていて、俺達を心配するように声を出す。
「ここは……？」
辺りを確認すると岩肌が緑色に光っている……洞窟か？
少し離れたところに水……海水が流れ込んでいるようだ。
奥の方には祭壇と道があるっぽい。
「水竜様の隠し穴ってところみたいね」
「そのようだな」
ガエリオンがサディナの言葉に同意する。
「水竜？　そいつが俺達をこんなところに強引に連れてきたのか？」
「たぶんねー」

「うむ……渦巻く竜巻の中で我も確認したぞ。我等を強引にここに引き寄せたのだ」
　ということは……その水竜とやらは俺達と戦う気なのか、と俺は警戒を強める。
「ラフタリアは――」
「ん……」
　俺が振り返るとほぼ同時にラフタリアも意識を取り戻した。
「ナオフミ様……ここ、は？」
「俺達を引きずりこんだ奴のアジトらしいぞ」
「え!?　じゃあ……」
　ラフタリアが刀を強く握りしめ、いつでも戦えるように起き上がる。
「サディナ、水竜とやらはどこにいるんだ？」
「生憎とわからないわねー。ただ、あそこの祭壇を見てほしいのよ」
「ん？」
　俺はサディナが示す祭壇を見る。
　祭壇には水晶玉のような何かが安置されていた。
　魔力的なプレッシャーを感じる何か……なのはわかる。
　魔法が使えるようになる水晶玉とかともなんか違う。

「なんだアレ？」
「巫女とかしてたけど、お姉さんも見るのは初めてよ」
「アレは竜帝の欠片だ」
そこでガエリオンが水晶玉を指差して答える。
「そんなものが安置されているのか？」
「どうなのかしら……？　少なくともお姉さんは知らないわね」
ガエリオンが竜帝の欠片だという水晶玉へ近づく。
特に何か罠があるわけではなさそうだ。
「魔竜の件があるからな。安易に手に取って大丈夫なのか？」
水晶玉がふわりと浮かび上がってガエリオンに光を当てる。
「汝……問題はなさそうだぞ。どうやら言付けをしたいそうだ」
水晶玉は光となってガエリオンの中に入っていく。
「ふむ……これはその水竜とやらが我宛てに残した置き手紙のようだ。能力が上昇したし水系統の耐性も増加した」
「置き手紙？　じゃあ水竜はここにいないのか？」
「あくまで汝等を招くためにここに引きずりこんだようだ。国の監視者としての仕事を含

めてな。盾の勇者の接近は既に察していたようだぞ。信号も受け取ったようだ」

ふむ……どうやら水竜にも事情があると。

信号……そういや盾の宝石が光ったことがあったな。あの時か？

「ガエリオンがいなかったらどうしたんだ？」

「あの水晶玉に言霊が封じてあった。同様の説明ができたのだろうな」

「で？　監視者というのは？」

俺の問いにガエリオンが若干眉を寄せながら答える。

「どうも上手(うま)く読みとることはできないのだが、クテンロウという国にはとある結界が張られていて……何か……魂的なものの侵入を阻む？　無垢(むく)の魂しか入れない？　ようだ」

「その魂の監視か？」

「正確には結界の維持が水竜の仕事らしいぞ。何から守っているのかよくわからん」

「あーあったわねー水竜様の結界維持。お姉さんも小さい頃に儀式に追われてたわー」

サディナが思い出に浸るように答える。

「水中に町があってねー、水流の激しい深海層は水竜様とコンタクトしないと行けないんだけど、見たことあるわ」

「あの……それで、私達はどうしてここに？」

「うむ。どうやらシルトヴェルトからの船だけではクテンロウに入れないように結界を弄られてしまっているそうだ」
「じゃあシルトヴェルトから船で来るのは無意味ってか？」
それって完全に無駄足みたいなもんなんだが……。
「そういうわけではない。水竜に招かれた結界周辺まではシルトヴェルトの船がなければ来られなかっただろう」
なきゃないで来られないと。
まあ、それならいいんだが……ってその理屈だと俺達が乗っていた船はクテンロウに到着してないということになるぞ？
「船でも入ることはできるのだろうが、クテンロウは時間稼ぎをするつもりだそうだ。だから双方の隙を衝いて、汝と我等を引き寄せた」
「つまり水竜が強引に俺達を招きこんだってことでいいんだな？」
ガエリオンは素直に頷く。
「それで？　何か裏でもあるのか？」
「いきなり裏を探るのはどうなんだ？」
ガエリオンが呆れたように答える。

知らんな。それが俺のやり方だ。

「ナオフミ様らしいですね」

「入念に事に挑んでいるのよねー」

俺が言う前にサディナに言われてしまった。

まあいいか。

「要約すると、国の行動を嘆き、国の本来の役割を果たすために汝等を引き寄せたようだな」

「船ごと連れてくればいいだろ……」

呆れる俺にガエリオンは困ったような顔をした。

「それで？　国の本来の役割ってのは何なんだ？」

「ふむ、その辺りもきちんと解析できず意味がよくわからんが、汝の相棒の一族が担うモノだそうだぞ。精霊具……の調停者としてな」

「精霊具……調停者？」

また訳のわからないことが出てきたな。

精霊具はこれまでの流れから勇者の武器である可能性が高いが、調停者とやらはわからない。

「私がですか？」

73%　位置No. 6050 中 4359

「そんな話あったかしら-？」
　サディナも首を傾げる。
「長い年月と鎖国の所為で風化したとかじゃないのか？」
　女王やシルトヴェルトの連中によると伝承の一部が争いで消失してるとか言ってた。どうせこの国も似たような歴史を歩んでいるんだろう。
「部署ごとに知ることができる情報が違ったから、お姉さんはわからなくても他の人には伝わってるかもしれないわね。ラフタリアちゃんのお父さんがその辺りを知っていたかもしれないわ」
「お父さん……」
　ラフタリアが父親を思い出して、寂しそうな声を出している。
　何か良い言葉でも掛けてやれればいいんだが……既に死んだ人に答えを求めても何にもならないだろう。
「ラフタリアは……」
　親のことを詳しく聞かれるのは、イヤか？
　さすがに俺もその辺りの気持ちを察することができないわけじゃない。
「大丈夫です……ですけど、お父さんが何か言っていたかと言われても心当たりは……」

うーむ、口が堅かったってことなんだろうか？

「しょうがない。憶測なんだが、精霊具というのは聖武器のことなんじゃないかってくらいしかわからないな」

「ですね」

「そうねー、刺客の人達もそれっぽいことを口走っていたし、間違いないと思うわ」

「でだ。調停者ってフレーズと、襲撃者の武具や道具から察するに勇者に対して何かしら意見できる立場の者くらいだと想像できるが……」

ここで俺はメルロマルクで盾の悪魔とか詰られたことを思い出す。

盾の魔王とか色々と言われたな。

仮にだ。異世界召喚された勇者が好き勝手暴れた場合を考えてみよう。

樹相手にリーシアが戦った時の弓みたいな、洗脳能力を持つ怪しげな武器を振りまわして世界征服を企てた場合だ。

確か勇者って世界の窮地に召喚されるって話だ。

呪いでも何でもいいから世界征服を企み、魔王化した勇者に、召喚された勇者が敗れたらどうなる？

世界は真っ暗だろうな。新しい勇者が召喚されたとして、自分を脅かす奴を魔王が見逃

すか？
俺だったら間違いなく召喚直後に殺すし、勇者召喚なんてさせない。
そんな歯止めのきかない時に勇者を調停する連中がいたら？
情報封鎖し、自分達の痕跡を残さずにいる調停者という名の連中……勇者の武器を封じる力を持っていたとして、魔王を相手に戦ったら？
ありえない話じゃないが……突飛すぎるか？
「鎖国することに意味があると水竜は強く進言しているようだぞ」
「わかった。その辺りは後々わかるだろう。で？　国の行動を嘆くというのは？」
「ここから出ればある程度は察することができるそうだ。で、巫女と共に国に侵入し、仲間の乗っている船を阻む結界に揺らぎを与えろ、だそうだ」
「要約すると水竜は俺達に協力したい。だからできる限りの隙を衝いて国に招き入れた。船を入国させるために結界を阻めと？」
俺の問いにガエリオンが頷く。
「結界の管理をしている仕掛け自体の場所も記されているようだ。そこへ行けと指示されているぞ。従うか？」
「正直言うと、こんな強引な手を使いながら姿を現さない奴の言うことなんて聞けるかと断りたいところだが、そうもいかないんだろ？」

かなり強引なやり方だったし、言うことを聞かずにここから出るという選択肢だってある。

水竜とやらの言うことを聞く必要はない。

だが、ある程度情報を仕入れないと動きようがないのも、また事実だ。

「とりあえずここから出られるなら指示に従う従わないに関係なくやるしかないだろ」

「汝らしいな。まあいいだろう」

「あ……ラフちゃんから信号が……」

そういやラフタリアってラフちゃんとどこかで繋がっているんだったか？

目を瞑って意識を集中している。

「えっと、何を言っているのかわかりませんけど、こっちの事情がある程度伝わったみたいです。フィーロに声を掛けてますね」

「そうか。あっちはどうなんだ？」

「クテンロウへ入ろうとしていますが、どうも何かに遮られているのか進めていません。突破できそうですが、まだ時間が掛かるようですね」

ふむ、概ね水竜の話と同じ状態だということか。

「じゃあ出発ね」

「そうなるな……とりあえず人里があるところまで移動してみるしかない」

というわけで俺達は洞窟を探索することになった。

まあ、割と一本道で途中から水中になっていたんだけどさ。

「ちょっとお姉さん見てくるわね」

「気を付けろよ」

「わかってるわよー」

サディナが獣人形態になって先行して水中へと進んでいく。

大丈夫か？

そう思っていると割と早く戻ってきた。

「いやー、巧妙に偽装されてておお姉さんでもこんな隠し水路があるなんて知らなかったわー」

「いいから、教えろ。外に出られるのか？」

「ええ、ちょっと深いところだし、巧妙に隠蔽の仕掛けがあるみたいだけど出るのは簡単みたいよ」

「そうか。じゃあ行くか？」

「了解ー。みんなーちゃんとお姉さんに掴まっているのよ」

「はい」

「我は水中でも活動できるようになった。後を追う」

ガエリオン水中仕様か……地味に技能を覚えていくな。

俺達はサディナに掴まって薄暗い水中洞窟を抜け、海面に出る。

ペックル着ぐるみがあればよかったが、不幸にも手元になかった。まあ、最悪はバブルシールドってスキルを使えば息継ぎはできるか。

海面に浮上し、辺りを見渡す。

近くには陸地があるようだ。

松の木っぽいものや竹っぽい植物が見える……ぶっちゃけ和風な匂い。

ただ、中国っぽい山も見えるので日本ってわけじゃないな。

絆の世界とも違う雰囲気だ。

遠くの方に港町っぽいところが見える。船が結構あるな。

帆船ではなく……弁才船ってやつだ。どんな船かっていうと宝船みたいなやつだと言えばわかりやすいか。俺の知る限りじゃ異世界であんな船は見たことがない。

「潜入するには港から離れたところに行った方がいいわよね」

「ああ、そうだが……」

水中を見渡す。

すると水生獣人や亜人共が素潜りで水中を泳ぎ回っているのが遠目に見える。
「水中感知をすると気付かれるかもしれないから、しないわね」
「敵だと思うか？」
「気配からして民間人だと思うわよ？　ただ……漁をしてるわけでもないようね」
サディナがそっちの方角を見て首を傾げている。
……よくよく考えてみるとシャチと一緒に泳いでいるとか……なんか変な感じだな。
「あ、海藻を採ってるのか。魚がいるのにおかしいわね」
「どうでもいいが陸地に行きたい」
俺の指示にサディナが頷く。
「そうね」
「行きましょう」
ラフタリアの言葉にみんなして頷き、俺達は人目を避けるように岩礁へと進んで陸地に辿り着く。
「さて……ポータルシールド」
……うん。薄々予想はしていたが、どうやら転送不可なようだな。
こりゃあ錬を連れてくるのはかなり難しそうだ。

どこかに龍刻の砂時計があれば別だがな。
「速攻で帰ろうとするナオフミちゃんは凄いわねー」
「できることは試さないとな。非常時に離脱できるかできないかでは相当変わる」
「確かにそうですね」
ラフタリアも刀で帰還スキルを唱える。
帰路の写本だったか。
「……ダメですね。転移妨害されています」
「そう上手くいかないか」
「じゃあ潜入するわよー」
どうしてこうも俺達は潜入することが多いんだろうな？
俺の脳内じゃクテンロウにシルトヴェルトの権力を使って正面から乗り込む予定だったのに……。
はぁ……。
「衣服の類が準備されていたから着替えましょう」
で、水竜によって用意されていたのは、俺は麻っぽい服……とでも言えばいいんだろうか。

ラフタリアは袴……巫女服の方が似合うがこれも悪くはない。
サディナも同様だな。
ガエリオンは……しめ縄を首に巻かれている。
首輪か？　玉みたいのが首の下に付いていて微妙に似合う。
「何から何まで丁寧なことだな」
「これは何なのだ？」
「神聖な魔物だって証明みたいなものね。水竜様の加護が付いてるから高貴な存在だと認識されるでしょ」
「ほう……」
俺達は鎧を脱いで民間人に偽装したってことか。
あと、サディナとラフタリアは薄布みたいなものをローブのように羽織って、顔が見えないようにしている。
なんかそれだけで映えるんだが……。
「顔でばれたりしないのか？」
「お姉さんが国を出てから十年は経っているのよ？　警戒すべきでしょうけど知ってる人の方が少ないわ。だけどラフタリアちゃんは尻尾と耳を絶対に見せないようにね。そこで見破られちゃうかもしれないから」

「特別な種族なんだったか？」
尻尾と耳で区別がつくのだろうか？
メルロマルクやシルトヴェルトだとラクーン種だと思われていたのにな。
実際は違うそうだが……。
「どっちにしても二人とも気を付けろよ」
「ええ」
「人間はこの国にいるのか？」
俺の問いにサディナは首を縦に振る。
「いるけど地位がそこまで高くないのはシルトヴェルトと同じね。ただ、奴隷とかはないわ」
ほう……と感心しながら、念のために俺も何の種族かわからないように手ぬぐいで頭を覆うように縛る。
「じゃあ行ってみるか。どこへ行けばいいんだ？」
「ふむ、港町の一番大きな建物……塔があるところだそうだ」
「ああ……あの灯台な」
そういうわけで俺達は港町の灯台目掛けて移動を開始した。

その道中、古墳みたいな場所を見かける。

「あら、ここに出るのね」

「知っているのか？」

「ええ、有名な場所よ。ラフタリアちゃんのご先祖様が倒した魔物を供養している遺跡だもの」

俺の脳裏に土蜘蛛とかの呪いに脅えて作られた塚が浮かぶ。

そういったものなんだろう。

それと同時にタイラントドラゴンレックスが封印された石碑を思い出した。

「封印されてるとかじゃ……ないよな？」

「ありましたね、そういうこと……非常に嫌な予感がします」

「ふむ、汝の盾の中で見たな」

「お姉さんもそれはわからないわよー。だからって遺跡を壊すのはお勧めしないわよ？」

「わかってる。サッサと行くぞ」

「ええ、触らぬナオフミ様に祟りなしですね」

「どこでそんな言葉を覚えたんだ……」

奴隷商とかその辺りから聞いたのか？

ありそうだな。
他にエクレール辺りだろうか？　錬とかとのやり取りで呟(つぶや)いたのかもしれない。
ラフタリアの教育を一から考えないといけないかもしれない。
『俺に触って祟りなし』とか……。
「……？」
ガエリオンが首を傾げながらついてくる。やめろよ。不安になるだろ。
で、古墳を抜けると港町に辿り着いた。
江戸風なのは変わらないが、竹みたいな植物が使われている建物があって……なんか違和感があるな。
でも和風ではあるんだよな。
桜っぽい木が満開で……こう、風流を感じさせる。
じっと見ているとサディナが桜っぽい木を指差す。
「アレは桜光樹(おうこうじゅ)……この国のエネルギーを生産してくれる植物ね。夜になると光って明かりになるし、いろんな道具のエネルギー源になるのよ」
「ほう……そんな技術があるのか？　結構便利そうだな」
「お姉さんもそこまで詳しいわけじゃないけど、クテンロウ国内じゃないと育たないそう

76%　位置No.6050中 4515

よ？　シルトヴェルトの方にも植えようって話があったのは聞いたわねー」
どんな植物なんだ？
まあ、風土の関係で、とかの問題なのかもしれない。
俺がバイオカスタムとかでどうにかできるならやってみたい。
つーか、ラトが喜びそうな植物だな。
バイオプラントの問題点とかが解消できそう。
「ふむ」
……所々に狸（たぬき）っぽい装飾がされたものがあるのが個性的だな。
あ、招き猫みたいな狸発見……ラフちゃんみたいだ。
他にも沖縄のシーサーみたいに狸の石像が置いてある。
信楽焼とも違うし、屋根もどことなく狸っぽいような感じだ。
「ナオフミ様、キョロキョロしすぎです」
「なんかちょっと目移りするな。和風ラフタリアランドって感じで」
「なんですかそれ!?」
怒鳴るラフタリアにシーっと指を立てて静かにさせる。
「そんなに騒ぐなって」

俺達がいるからってわけではなく、こう……住民全てが何かに気を使っているような雰囲気がある。

「そういえば……何でしょうか？」

「しかし……町の雰囲気がピリピリしていないか？」

ああ、そういやラフタリアの一族が国を牛耳っているんだったか？

「ラフタリアちゃんならしょうがないかもしれないわね ー」

「ですが――」

「指名手配されてて人相描きが配布されてるとかか？」

何やら看板が立っているので確認のために近寄る。

……うん。読めない。

シルトヴェルトと同じ文字だったか？

「サディナ、何て書いてあるかわかるか？」

「えっとー」

サディナが文字を目で追っていく……なんだか眉を寄せている。

サディナがこんな反応をするなんて珍しいな。

と、思った直後。

「うわあああああああ！」

子供の叫び声が聞こえてきた。
見るとどこから迷い込んできたのかオレンジニードルエイトという冗談みたいな名前のかなり大きなハチが子供に襲いかかっているところだった。
他の住民共はオロオロとするばかり。
俺は咄嗟に近づいて子供を庇うように立ち、オレンジニードルエイトの攻撃を受け止める。
「ラフ――」
俺が指示を出す前にサディナが駆け寄ろうとしたラフタリアを遮る。
「ガエリオンちゃんが行って！　ナオフミちゃんは絶対に反撃しないでね！」
「は？」
「キュア？」
サディナの指示を受けてガエリオンがオレンジニードルエイトに飛びかかる。
俺も言われたまま盾の反撃機能を意識的に抑える。
ガエリオンの噛みつきを受けて、オレンジニードルエイトは絶命した。
「あ、ありがとうございます」
「気にするな」

周りの人達は何やら青ざめた顔で俺達を見ている。
「あ、あんたら」
「役人が恐ろしくないのか？」
「は？」
すると高そうな袴（はかま）を着た連中が駆け寄ってきた。
「貴様！　ここで魔物を殺したところを見たぞ」
そこでサディナが一歩踏み出して答える。
「この人は、あくまで魔物から子供を守っただけ。後はたまたま近くにいた魔物が魔物を食べたにすぎないわ」
「戯言（ざれごと）を！　国のお触れを知らんのか！」
「キュア？」
ガエリオンがそこで首を傾げる。
なんだ？　何があるんだ？
「知っているに決まってるでしょー？　恐れ多いわ。あと……この魔物がどんなのかお姉さんだってわかってるわよ？」
サディナはガエリオンが首輪にしているしめ縄の玉を指差す。

「こ、これは水竜様の眷属……!? 失礼しました！」
そう言って役人共は去っていった。
「キュアアア？」
役人がいなくなると周りの連中から拍手が起こる。
これはどういうことだ？
「ナオフミちゃん、ラフタリアちゃんも、ここじゃ人目を引くわ。少し移動するわよ」
「あ、ああ」
「わ、わかりました」
「おっと」
そこでラフタリアが役人の後をついてきた野次馬っぽい男とぶつかる。
見た目は三十代後半か？　耳が犬っぽい。
だけど何だろうか？　キールやウィンディアとはなんか形が異なる。
ラフタリアとラクーン種の連中みたいな微妙な違いがあるように見えるな。
この国の独自の種族なんだろう。
「おや？　お嬢さん大丈夫ですか？」
転びかけたラフタリアの体を抱きしめて男が言う。
「あ、はい。大丈夫です……ですから、手を離してください！」

ラフタリアはぶつかった野郎の手を強引に振り払う。

「いやいや、せっかくの出会いなんです、お嬢さん。どこかでお茶や団子を食べませんか？」

「おい……」

コイツ、どう見てもラフタリアをナンパしている。

ドスを利かせてラフタリアと男を遮るように立って睨む。

「コイツは俺の連れだ。ナンパならよそでやってくれ。ついでに歳を考えろ」

どう見てもラフタリアの実年齢から考えて親子くらい離れている。

いくら亜人の成長が早いといっても老いまで早いとはサディナの例から考えてありえないだろうし、外見から考えても釣り合わないだろう。

まあ、この世界でも歳の差結婚とかありえない話じゃないんだろうけど。

「おやおや、男は幾つになっても女性と楽しみたいもんなんだぜ？」

コイツ……。

「あらー？　あんまりおいたをするとお姉さん怒るわよ？」

バチッとサディナが雷を宿らせて殺気を放って野郎を睨む。

「ちょっと急いでいるのよー。というわけでさようならー」

サディナは満面の笑みを向ける。

だが、この野郎、引く気がないのか、今度はサディナの手を握る。

「これはこれはお嬢さん。貴方もお美しい。今日は良い日のようだ。こんなにも綺麗な人達に出会えるとは」

……元康だな。奴に似てる。

いや、元康はフィーロ馬鹿になってしまったんだったか？

第二の元康と認定しよう。

「お嬢さん達、一緒に酒を飲みませんか？」

どこにもいるんだな、こういう奴。

「ご免なさいねー。お姉さん、好意を寄せてる人がいるからお相手できないわー」

と、サディナは野郎の手を強く握りしめて雷の魔法を放つ。

「ツヴァイト・サンダーボルト」

「あぎゃぎゃがああああああ!?」

思い切り野郎が仰け反り、黒焦げになって倒れる。

「お、おてんばな子達だ……はは」

と言って野郎は動かなくなった。

なんかスゲーな、サディナもこの野郎も。

「じゃあ行くわよー」

「あ、ああ……」

おい役人共、コイツを感電させるのはお咎めなしなのかー？

悔しそうに俺達を見るが追ってくる気配は……ない。

不思議に思いながらサディナの案内のもと、灯台目指して人気のない道を進んだ。

十三話　クテンロウ革命派

民間人に襲いかかる魔物を仕留めて助けたのに咎められそうになるって、どんな状況だよ。

「で？　何がどうなっているんだ？」

「どうも国の頂点……天命様がお触れを出してるみたいなのよね。生き物を大事にしろって。魔物や生き物を殺した者には重い罰を与えるって話みたいなのよ」

「は？　生類憐みの令みたいなものか？」

どこの江戸だよ。

そんな悪法が国を支配している？　馬鹿じゃないのか？

「ナオフミちゃんの世界にもあるのかしら？」

「ああ、俺の世界ではかなり過去のことだが、そういうことをやらかした殿様……王がいたらしい」

サディナの話を聞いて、ガエリオンに仕留めさせた意味を理解した。

つまり町の住人では魔物を殺したら罰が下される。

だけどガエリオンはドラゴン……つまり魔物で、魔物は魔物を仕留めても罰せられることはない。

「水竜様から頂いた装飾具も助けになったわねー」

「水竜の眷属扱いで、罰することができないということか」

「賭けだったけどねー」

「キュアアアア」

俺達の役に立ったと、ガエリオンはご機嫌で俺の肩にとまる。

「魔物を使役している場合は飼い主に罰が下されるらしいけどね」

「だから野生の魔物で、しかも水竜の眷属ってことにしたのか」

どうもこの国じゃ水竜ってのはかなり偉いらしいからな。
天命様とやらの方が偉いけど、こんなところで厄介な問題に首を突っ込みたくないと役人共は引き下がったのだろう。
そもそも生類憐みの令だとして、水竜は該当しないはずは……ない。
法律的な問題としてもグレーゾーンだったわけだ。
「ガエリオンちゃんがドラゴンだからできた荒技ね」
「我が誰かの眷属だと？　屈辱だ」
お？　親ガエリオンが喋（しゃべ）っている。
「飼い主は一応、俺とウィンディアだがな」
「く……」
ま、子ガエリオンの方は受け入れているみたいだけどな。
「なんとも……そんな酷（ひど）い法律があるなんて」
「ラフタリアが天命とやらに収まる危険性を重く見ているのも納得だな」
そんな悪法を広めていちゃ立場が危うい。
そんな状況で、王族の血を継ぐ奴が王族の衣装を着ていたらなおのこと、国の重鎮共は焦るだろう。

国民がどう動くか……俺の例を見れば明らかだ。
「なんとなくナオフミ様の気持ちがわかったような気がします」
「仲間だな」
ラフタリアの悩みは痛いほどわかるぞ。
俺の場合は盾のお陰で大分解決するがな。
「どっちにしてもこれはチャンスだな。上手く立ち回ればこの国を転覆させるのも簡単だぞ」
サディナの言動から察するに、今まではそんな法律はなかったはずだ。
そして、国民はこの法律に対して不満を持っている。
バカな殿様……この世界では王か？　そいつを引きずり下ろすことも不可能じゃない。
「あら？　ナオフミちゃんに考えがあるのかしら？」
「まあな。とはいえ、どっちにしてもフィーロや樹達を乗せた船が来られるようにするのが先だ」
灯台が大分近づいてきたので俺達は襲撃の準備に入る。
まったく……ここ最近の刺客騒ぎにはウンザリしてたんだ。
襲撃される方の身にもなれ！

いっちょ大きく暴れさせてもらうとしよう。
　そう思いながら塔に近づいていって、気付いた。
　……これ、大きく伸びている桜光樹を支えるように木材で囲ったモノだ。
「アレを焼けばいいのか？」
「いや、警護の者を倒して、龍脈法で桜光樹にアクセスできるそうだぞ」
「そうなのか？」
「ああ」
　ふむ……というところで、なんか鎧武者のような格好をした奴が、路地裏に隠れて灯台を見ている俺達の方へ走ってくる。
　やばいな……役人が通報でもしたか？
「何食わぬ顔でかつ速足、ラフタリアは隠蔽魔法で隠れる準備をしながら撤退する」
「は、はい！」
「あらー……強行突破は確かに難しそうね」
「灯台を破壊してから我が巨大化して飛んで逃げる手もあるのだが……」
　ガエリオンの作戦も一つの手だな。
　問題は叩き落とされる危険性があることだ。強行突破するにしても夜を待つとかして退

路を確保するのが先決だ。
　鎧武者から逃げるようにラフタリアが隠蔽魔法の詠唱を終える。
「じゃあ曲がり角を曲がったら発動しますね」
「ああ」
　速足で曲がり角を曲がってラフタリアは魔法を発動した。
「アル・ツヴァイト・ハイドミラージュ！」
　ふわぁっと俺達に隠蔽の魔法が掛かり、たぶん姿が消える。
　で、曲がり角を曲がった鎧武者が俺達を見失ったのか辺りをキョロキョロと見回し始めた。
　よし、後は気付かれないようにここを去って機会を――
「どうか姿を現してくださるようお願いいたします！　某は貴方様方の敵ではございません！」
　と、いきなり鎧武者が土下座を始める。
　俺達は少しだけ距離を取り、囁き合う。
　鎧武者は一歩も動かず、頭を下げたままだ。
「どう思う？」

「えっと……何なんでしょう？」
「そうねー……お姉さんの勘だと悪意はないというか、嘘を言う気はなさそうね」
「汝の過去に似たようなことがなかったか？」
ガエリオンに言われて心当たりを思い出す。
……二度目の波に挑む時に似たようなことがあったな。リユート村出身の少年兵だ。
確かに似てるような気がする。
「話くらいは聞いてもいいんじゃない？　何か問題があるようだったらお姉さんがちょちょいと処理してあげるわ」
「果てしなく面倒なことになる気がするが……わかった」
灯台へアクセスするにしても厄介なことなのはわかり切っている。
ちょちょいというのがものすごく物騒なことのように思えるが、何も聞かないよりましか。
「じゃあラフタリア。隠蔽を解除してくれ」
「わかりました」
ラフタリアが隠蔽魔法を解除し、俺達は土下座している鎧武者の前に姿を現す。
「俺達に何の用だ？」

姿を現した俺が声を掛けると土下座していた鎧武者は……頭を上げない。
何の用だ？　と尋ねているのにどういうことだ？
……もしかして頭を上げよ、とかいうのを待っているんだろうか？
「頭を上げて話を聞かせろ」
そう言ったところでやっと頭を上げた。
すると、なんだ？
ガエリオンを見た後にラフタリアの方を見て、胸に手を当てて頭を垂れている。
「次期天命様……どうか某達にお力をお貸しください」
「え？　え？　あ、あの？」
「事情を説明しろ。じゃなきゃ俺の配下の酒乱女が何をするかわからんぞ」
「あらー」
俺がサディナを指差すと鎧武者は首を横に何度も振る。
「は、はい！　そのために、どうか某の屋敷に赴いてくだされ。無理でしたらここで軽く事情をお話しします」
「ついてったら罠に掛けられるかもしれないだろ。まずは事情を話せ。自己紹介も含めてな」

俺の言葉に鎧武者が頷いて背筋を伸ばして話し始める。

「失礼しました。某はこの町の長である父上からの命を受けてお迎えに上がった者です」

町長の息子？　証明できるかわからんが……つーか凄い格好だよな。

鎧武者って、今から戦争にでも行くような格好だ。

「では……次期天命様とそのお付きの……シルトヴェルトから来た方々は、国の内情を少しはご理解いただけたかと思います」

「ああ、魔物を殺すなとかその辺りか？」

「はい……父上を含め、クテンロウの各地で不満の声が募るばかり。しかし政府は天命様の勅命として民を虐げている次第です。ですが、先ほど水竜様からの交信を海の民の密偵が届けてきて、天命様の血を継ぐ方を国に導いたと聞き、お迎えに上がりました」

あー……つまりコイツ等の目的がわかったぞ。

「目印はコレか？」

ガエリオンの首に巻いたしめ縄を指差すと、鎧武者は頷く。

「シルトヴェルトからのお仲間を入国させようとするお考えも理解しております。その作戦を成功させるために、どうか一度、屋敷に来ていただけないでしょうか？」

ふむ……俺達が話していないことを確かにコイツは喋っている。

裏取りも確かだが……どこかに罠がないとも限らない。

……うーむ。
「サディナとガエリオン、最悪この町を焼き払って逃げることはできるか？」
「焼き払うのが前提なんですか!?」
「密偵辺りとコイツが繋がっていて、罠に掛けられる可能性を視野に入れている」
「あらー」
「町を焼き払うのはできなくはないであろうな。その手でいくのだな？」
「最悪の最悪な。そうならないことを祈るばかりだが」
　俺達の言葉に鎧武者が震える。
「ど、どうか物騒な発想は！　信じてもらわねば話が進みませぬ！」
「ああはいはい。だが、覚えておけよ。俺達はそういう選択だって辞さないんだからな」
「心に刻みまする！」
　コイツの言葉は何なんだ？　盾が翻訳してくれているはずなんだが……。
　某とか……つまり、かなり変な喋り方ってことだな。
「わかった。とりあえず兜を脱いで顔を見せろ」
「はい！」
　と、鎧武者は兜を取って顔を見せる。

えっと……鳥系の亜人だ。ハヤブサみたいな羽とも毛とも違う髪が生えてる……。
二十代前半の若者で、和風。美青年ってほどじゃない。
どっちかというと武人系か？
武に心得のある顔立ちって表現するといいかもしれん。
武骨なサムライって感じだ。
「尻尾とかあるのか？　尾羽か？」
背中に回り込んで腰を見ると、なんか手で隠された。
「し、失礼！」
震えながら隠すのをやめた鎧武者の腰には、尾羽っぽいものが生えていた。
「なんでそんなことを気にしているんですかナオフミ様？」
「いや、何の亜人なのかと思ってな」
「シュン種ね」
サディナの言葉に尾羽を見ながら考える。
シュン……しゅん……隼（はやぶさ）？　やっぱハヤブサか。
「鳥系亜人か、ということは手が羽なんだっけか？」
フィーロみたいに、背中に羽があるわけじゃないんだったよな？

シルトヴェルトのシュサク種もそんな感じだった覚えがある。
やっぱ足の力……蹴りが主体なのか？
「あの……種族分析を続けるんですか？」
ラフタリアの言葉で我に返る。
考えてみれば、野郎の尻を凝視して分析してもしょうがないか。
「こ、こほん。わかった。じゃあ行くか」
というわけで俺達は、若干恥ずかしそうにしている鎧武者の屋敷に案内された。
大きな屋敷なのは確かだ。
和風情緒がある、庭園付きの大きな武家屋敷……水が引かれて鹿威しが落ちる音が、異世界にあってはかえって違和感を感じさせる。
枯山水まであるとか……絆の方の世界よりも和風の色が強いな。
俺達は畳のある部屋に通された。
ちなみに鎧武者の親とやらは獣人だった。
獣人化が可能な種族らしい。
子供がアレなら親は幾つだ？　亜人はＬｖで成長補正が掛かるからよくわからん。
ただ、獣人……鳥人姿でも若干歳を取っているのはわかる。

「よくぞクテンロウにお戻りになりました。直系の天命様の忘れ形見……ラフタリア様と呼ぶべきでしょうか」

土下座するように祈りを捧げる相手にラフタリアはかなり引いている。

「拙者の名前はラルヴァと申します。以後宜しくお願い致します」

「ここじゃあどうか知らんが盾の勇者の岩谷尚文だ。で、こっちのは俺の相棒のラフタリアで、その姉貴分のサディナ。一緒にいるドラゴンはガエリオンだ」

なんて感じに自己紹介をする。

で、ラルヴァはラフタリアに近づいて若干覗き込むようにして呟く。

「お顔を拝見させていただいてよろしいでしょうか？」

「あ、あの……」

ラフタリアが俺に視線を向けるので、俺は溜息交じりに頷く。

羽織っていた薄布を取り、顔と尻尾をラフタリアは見せる。

するとラルヴァは「おお……」と声を漏らして頭を下げた。

ラルヴァの名を聞いて、サディナが頷いている。

「あー知っているわー、ラフタリアちゃんのお父さんと親しかった協力者」

「元水竜様の巫女であるな。拙者を見た覚えがないか？」

「国を出る時に会ったのを覚えてるわよ？」
ラルヴァはサディナと視線を交差させて頷く。
元々ラフタリアの父親の派閥の人間だったのか？
「で、単刀直入に聞きたい。お前等の目的はなんだ？」
俺の言葉にラルヴァは顔を上げる。
「こちらの要望でしょうか？　もちろん、真なる天命様であるラフタリア様が国を継承なさることです。分家にはやはり荷が重く、悪法によって民は困窮を極めております」
ふむ……利害自体は一致しそうな方向に話は進んでいるな。
「そのためならば我が一族はもとより、民も力をも貸す所存です」
「お前等はこっちの事情を理解しているか？」
俺の言葉にラルヴァは首を横に振る。
なるほど、水竜に言われて従う意志を見せているだけか。
「まずは状況整理だ。どうして俺達がここに来たのか……わかっていないだろ？」
どうせラフタリアの親父の忘れ形見が国を嘆いて戻ってきたとか思いこんでいるのだろう。
だからこっちの事情をわからせておかなきゃ国家転覆をさせた後にラフタリアを頭に据えて鎖国再開とかやらかしそうだ。

交渉は既に始まっている。

勝った時に、それまでの味方が敵になる可能性は考慮しとかなきゃいけない問題だ。

「この国は鎖国しているみたいだから知らないかもしれないけどな。外の世界じゃ色々と厄介なことが起こっている」

「そこは既に存じております。何分、この町はシルトヴェルトと交易のある町であり、その長を拙者は務めております」

じゃあ、波に関してもわかっているのか。

「貴方様がクテンロウの外では盾の勇者と呼ばれる方だというのも」

「なら話は早いな。俺達がこの国に来たのはラフタリアの命を狙う奴等を倒すためだ。事が解決したら出ていくぞ？」

ラルヴァ達にとっては受け入れがたいだろうが、あとで揉めるくらいならここで交渉決裂になったほうが……いや、解決したらここを後任の便利そうな奴に任せるのも手だろうか？

「承知の上です。それこそ、天命様は世界のため、民のために存在するのです。今の腐りきった政府の傀儡など愚の骨頂。ラフタリア様の父上も同様の考えだったのを、今こそ理解できます」

ほう……耳当たりの良い返事をしてきたな。

本音はどこにあるのかはわからないが、利用する分にはいいか。
「そのために、ここ最近、外界との接点となっている結界を強引に占拠している役人を排除したいと思っております」
どうやらシルトヴェルトの船を遮っている結界は最近になって役人が権力を使って、強引にやらかしていることらしい。
で、ラルヴァは国の役人とは犬猿の仲となっており、ラフタリアを旗頭とした革命を起こすことを提案してきた。
強引なやり口に国民やその代表である町長も不満が爆発寸前ってことだな。
「ナオフミ様、笑っています」
「ラフタリア！　巫女服の準備だ！」
「なんでそこまで生き生きしてるんですか！」
なんて感じにラフタリアの巫女服を用意させようとすると、ラルヴァが息子に服を持ってこさせていた。
「水竜様が過去に天命様に渡したといわれる衣装を模倣したものです。どうかお受け取りください」
広げて確認する。
色合いは少し異なるが、巫女服だった。

水竜の巫女服
衝撃耐性（小）　斬撃耐性（小）　水耐性（中）　潜水時間向上　魔力防御加工　受け流し

絆の世界で着た白虎の巫女服よりも性能が落ちるが、なかなか優秀な装備品だ。
ただ……防御力は低めだな。攻撃はかわすのが前提か？
「さあ、ラフタリア」
着るのだ、と、手渡す。
「なんか乗せられているような気がするんですけど……」
「やるしかないのは理解しているだろ？」
「まあ……そうですけど」
「じゃあラフタリアちゃん。お姉さんが着せてあげるわね」
サディナと一緒にラフタリアは別室へ着替えに行く。
「とりあえずお前等も革命をしたいというなら相応の覚悟を見せろよ！」
「もちろん承知の上での提案をしています！」
ラルヴァの指示なのか、屋敷の中には戦闘の準備ができている猛者みたいな奴等が集まっている。

これを利用しないのは愚策だな。
どうやら目的は色々とありそうだが、利害は一致している。
コイツ等が俺達に対して何か損になるようなことを仕出かすのなら、その時に報いを受けさせればいい。
「よーし！　お前等、俺がラフタリアの代理で指揮を執る！　これから横暴な政府とドンパチやるぞ！　その覚悟がある奴はついてこい！」
「「おー！」」
同意の雄叫びを聞いて、俺は状況が好転していることを確信した。
「手始めに、シルトヴェルトからの協力者を町に招く……そこからの快進撃だ！」
「「おー！」」
そんな戦意高揚をしているとガエリオンが俺の肩によじ登ってくる。
「上手く乗せたのだな」
「まあな」
こういうのは勢いだ。
クテンロウの天命って奴が馬鹿なことを仕出かして威信が傾きつつある状況下で、ラフタリアが巫女服を着ているから国を支配するんじゃないかと邪推して、余計なことをした

のが運の尽きだ。

望み通り支配してやろう。
お前等の馬鹿な考えが身を滅ぼしたのだと教えてやる。
なんて決意のもとに作戦を立てていると、ラフタリア達が着替えを終えてきた。
「ただいま戻りました」
ラフタリアの巫女服姿を見て俺は何度も頷く。
やっぱ似合うなー。
「ラフタリアちゃんは本当に巫女服が似合うわよねー。それもしょうがないんだけどね」
「でも、ナオフミ様は気に入りすぎだと思うのですけど……」
ラフタリアが若干愚痴っていると、俺が先導していた連中がポカーンと口を開けた後、揃(そろ)って土下座した。
え？　何やってんのお前等？
「ははー！」
「天命様、どうか拙者達をお導きください！」
「此度(こたび)のこと、国のために正しきことだと確信いたしました！」
「命を賭すことに間違いはない！　ええ！」
「天命様、ラフタリア様のために戦い散ることこそが武の定めなり」
なんか凄いことになってきた！

「ラフタリアも一躍有名人だな。フィーロやアトラに負けないようにがんばるんだぞ」
地味に酒場で人気のあるフィーロのように、ラフタリアもその魅力を発揮してほしいもんだ。
「がんばりたくありません！　やらなきゃいけないのはわかりましたけど、どうしてこの格好だとみんな頭を下げるんですか！」
泣き言を言っているラフタリアを無視してっと。
「さ、ラフタリア、後はお前が命令を下すだけで、コイツ等は死地にだって平気で飛び込んでいくぞ」
「行かせませんよ？　そんな責任を負いたくないです」
「神の名のもとに、国の民のために、腐りきった政府を倒すのだ、戦士達よー」
とか扇動してみる。
ぶっちゃけシルトヴェルトで俺がやられた手だな。
ラフタリアの気持ちもわかるが、今はアトラの真似をしよう。
「お前達は誇り高きクテンロウの民。自らが信仰する天命様のために、その忠誠を見せろ！」
「「おおー！」」
「ナオフミ様！　アトラさんの真似をしましたね！　皆さん、ナオフミ様の話術に乗って

――」

ラフタリアが言い切る前に血気盛んな者達が飛び出していった。

ラフタリアはその姿を見て、額に手を当てて嘆いている。

「ま、死者が出ないように俺が前に出る。ラフタリアも十分注意してついてこい。作戦はこれからだぞ」

「お姉さんワクワクしてきたわー」

どこの戦闘民族の台詞だろうか？

「キュアー」

ガエリオンもやる気を見せている。

まあ、俺かサディナかガエリオンが灯台の桜光樹にアクセスできればシルトヴェルトの船を邪魔している結界を解除できるみたいだし、行くしかないだろう。

「はぁ……わかりました。避けられないなら進むしかありませんね」

溜息をついた後、ラフタリアが俺の後ろについてくる。

「それに、お父さんのことをもっと知りたいっていう気持ちもあるんです」

「存分に知る機会があるだろうさ。後は……犠牲は最小限、相手の損害は最大限で行けばいい」

これだけの人数で乗り込んでいけば、戦力にならなくても威圧はできる。

「お姉さんもこの国を出る前よりも遥かに強くなってるしー、一騎当千の活躍をしちゃうわよー」

サディナが陽気に銛を持って構える。

「期待している」

コイツも出生の謎が多いが、今までの襲撃者を大抵返り討ちにするほどの強さを持ってはいるんだ。

敵の持つ道具の類は謎が多いが、警戒しても始まらない。

今は、協力者を集めて国家転覆をしようじゃないか。

メルロマルクを実質乗っ取った時と同じようにな！

「ククク……汝といれば退屈せんな」

ガエリオンがなんか楽しげに呟いたのが印象的だった。

十四話　桜天命石

武家屋敷から団体で灯台へと向かい、灯台の入り口を正面突破する。

「何奴（なにやつ）！　ここはクテンロウの天命様の名で政府が占有している神聖な地であるぞ！」

正面から入ると同時に敵の衛兵っぽい連中が駆けつけてきて武器を片手に宣言した。

賊に一々そんなことを言っても無駄だと思うがな。

「天命様？　こちらにおられる方こそ、真の天命様也、そちらの天命は分家の偽者……その違いをわからないでか！」

とラルヴァがラフタリアを手で指して口上を連ねる。

巫女（みこ）服着用のラフタリアの威光……魅力は随分と効果があるのか、敵の亜人、獣人共はざわめき立った。

「うろたえるな！　そのような国を捨てた偽りの天命の血を引く者が真なる天命様であるはずがない！　即刻斬り捨てよ！」

そこに何か偉そうな……カエルっぽい獣人が言い放つ。

ここに来るまでにウサギっぽい奴とかいろんな人種の亜人獣人を見てきて、ふと気付いたことがある。

うん、鳥獣戯画だな。

「ナオフミ様、戦闘に意識を集中してください！」

一触即発の状況でラフタリアに注意されてしまった。

「やれ！　早く逆賊の首を刎ねるのだ！　精霊具の所持者用の武器を持て！」

　またそのワードか！

　間違いなく国の連中は対勇者用の武器を持ってるな！

「斬り捨て御免！　異国の邪神よ！」

「流星盾！」

　槍を持って襲いかかってくる敵の攻撃を、流星盾で結界を作り出して受け止める。

　が、やはりこの手の敵の攻撃にスキルの効果は薄く、即座に砕け散る。

　だがな、俺だって毎度悠長に結界を破壊されているだけだと思うなよ？

　こんなこともあろうかと、シルトヴェルトの方で色々とアクセサリーを作ってきたんだ。

　ラトが錬金術師なので、ある程度弄り方を知っていたのが幸いだったな。

　流星盾が砕けると、同時に破片が閃光を放つ。

「ぐあ!?」

「な、なんだ!?」

「今だ！」

　意識を集中させて俺はツヴァイト・オーラをラフタリアに施す。

「ラフタリアちゃん、お姉さんとやった訓練と同じく、踏み込んでいくのよ！」

「はい！」

ラフタリアが腰に下げた刀を居合斬りの要領で抜いて俺の目の前にいる敵を斬り伏せ、そのまま突撃していく。

「皆の者！　うろたえるな！　敵がどれだけいようと狙うはただ一人！」

「おっと、そうさせるわけないだろ？」

「お姉さんも忘れてもらっちゃ困るわねー」

サディナがラフタリアを守りながら魔法の詠唱に入る。

そう、お前等は村を襲撃した時に真っ先にサディナと俺達を分断しようとした。俺がその意味を考えないはずがないだろ。

奴等が対勇者対策をしていたとしても、サディナのような単純に強い奴とは普通に戦うしかない。だが、今までの襲撃者から考えるにサディナほどの猛者は数えるくらいしか存在せず、この場にいないのはすぐにわかる。

「はぁあああぁ！」

ラルヴァとその息子も刀を抜いて俺達に負けじと襲い来る敵を屠(ほふ)っていく。

思ったよりも動きが良いな。

やっぱクテンロウ出身の亜人獣人は戦闘能力が高めなのだろうか？

「あんな動きがあるんですか」

ラフタリアがラルヴァの刀技を見て何か分析している。

サディナが教えたのとも若干構えが異なるな。

流派が違うんだろうけど……。

「お姉さんがラフタリアちゃんに教えたのはお姉さんの地元の流派だものねー。レプワダツミ流っていうのだけどね」

ラルヴァの刀さばきをサディナは凝視している。

「アレはクテンオウカ流っていうのよ。ちゃーんと見ておきなさい」

ラルヴァが刀身に魔力を流し、素早く相手の懐に入って通り過ぎる。

「がは……」

通り過ぎて刀に付いた血を振るって落とすと同時に、斬られた敵の血が桜の花びらのように飛び散った。

おー……なんか凄いけど、ラフタリアのスキルに似たようなのなかったっけ？

「ラフタリアの刀にあるスキル『細雪』みたいだな」

「確かに似てるわね。お姉さんのところとあの流派を覚えればラフタリアちゃんはかなり強くなると思うわよ？」

サディナも見たことがあるのか。
そういや訓練中にスキルを放つのもやっていた気がする。
「ついでに変幻無双流を覚えれば無敵だな」
「エクレールさんや師匠の話だと、変幻無双流の刀技は応用で、別の流派を習得した方がいいって話です」
ああ、なんかババアがそんなことを言っていたな。
どんな流派にも応用を利かせることができるのが変幻無双流の良いところなんだったか。
「えっとこうやって、こう……」
ラフタリアが、構えのモノマネをしているとラルヴァがなんか敬礼する。
「ラフタリア様のご要望とあれば、拙者、誠心誠意お教えいたします」
「あ、はい……今後の戦いの参考になります」
というところでカエル獣人の上司っぽいクマ獣人みたいなのが奥から出てくる。
「いつまでチンタラしている！　偽者の天命などさっさと屠らんでクテンロウの武の者か！」
十字槍を持って襲いかかってきた。
速いな。少なくとも敵の中では一番動きが良いだろう。
「ぐあ⁉」

俺が守るよりも早く、手近にいた奴を一突きした。
致命傷は避けたようだが……と、俺は吹き飛ばされた奴を受け止めて回復魔法をかけながら盾を構える。
「精霊具を所持するシルトヴェルトの神め！　偽りの天命を連れてくるとはいい度胸をしている。ここで真なる天命様に祝福されている我の力を知るがいい！」
十字槍を地面に突き立て、クマ獣人が何かを唱える。
すると辺りにあった道具から何かが打ち出されたのが見える。
で、桜色した檻みたいなものが灯台の周りを覆い尽くす。
かなり範囲が広いぞ……百メートルはあるか？
「あれは……桜天命石!?　こんなところで使用するのか！」
ラルヴァが戦慄するように言う。
「なんだそれは？」
そういや村を襲撃してきた奴等も言っていた。
確か持ってきていないとか。
サディナも知らない道具らしいが……。
「桜天命石とは精霊具の力を弱め、天命様に祝福されし者の能力を極限まで引き上げる特

殊兵装のことです。どうかご注意を！」

ラルヴァが言い終わるよりも早く、桜色をした結界のような何かが周囲を通り過ぎる。

「な、なんだ？」

ぐ……盾がなんかスパークしたぞ……。

バチバチと盾から電気が走ったような感覚が全身を通り過ぎて、体が重く感じられる。

「こ、これは……」

ラフタリアも同じように感じているらしく、刀を持って僅かに体を傾けている。

「あら━……どうやらナオフミちゃんがお姉さん達にしてくれた加護ってのがなくなってるわね」

「なに!?」

サディナのステータスを確認する。

記憶にある数字よりもかなり減っているのがわかる。

厄介な真似を……。

「では行くぞ！」

クマ獣人が十字槍を器用に振りかざし、凄い速度で俺達に突撃してくる。

く……。

盾で受け止めようと考えたが、咄嗟の本能で横っ跳びをして避ける。
それが正解だったと即座にわかった。
まず先ほどの三倍以上の速度でクマ獣人が動いている。
次に攻撃力も上がっているのか、槍が振りかざされたところが寸断され、更に爆裂した。
どんだけ能力が上昇してるんだよ。

「ツヴァイト・オーラ！」

下がった能力を補うようにオーラを唱えるのだが……発動しない。
勇者の魔法を封じる効果も持ってるのか？
念のためにガードの方を詠唱してみる。

「ツヴァイト・ガード！」

今度はすんなりと作動した。
嘘だろ？　勇者専用魔法の使用ができない？
となると合唱魔法の使用も怪しいぞ!?
させてもらえるほどの余裕があるとは思えないけどさ。

「早く国賊を仕留めるのだ！」

ラフタリアを殺すことが奴等の目的。　俺はラフタリアを守るように盾を構える。

「「おおおー！」」

くそ、こんな時はどうしたらいいんだ？

「ナオフミちゃん！」

俺に向かって対勇者用の武器で襲いかかってくるクマ獣人とその仲間達へサディナが魔法の詠唱を終える。

『力の根源たる私が命ずる。真理を今一度読み解き、雷よ我が前の者達を撃ち貫け！』

「アル・ドライファ・チェインライトニング！」

高電圧の雷が俺の目の前にいる全ての敵を射抜く。

「ぎゃあああああああああああ！」

「なんの！」

雷を槍で弾いてクマ獣人はサディナに飛びかかる。

「たとえ誰であろうとも、ラフタリアちゃんとナオフミちゃんはお姉さんが守るわよ」

「我を忘れてもらっては困るな」

サディナの背中にくっ付いていたガエリオンが高密度に圧縮した熱線のようなブレスを放った。

不意打ちとなってクマ獣人の顔面に命中する。

「ぐあ!? どこまでも卑劣な」
「卑劣？ そんなのお姉さんは知らないわよー？」
ぐももとサディナは獣人化を始める。
膨れ上がるサディナを見てクマ獣人が絶句する。
「さて、貴方はお姉さんといい勝負をしましょうね。十年以上この国を離れていたけど、どれくらいの猛者がいるのか楽しみよー」
「おのれ殺戮の巫女め！ その汚れた身で我等に歯向かう気か！」
「ええ……じゃあお姉さんの殺戮を楽しんでもらいましょうかね」
そう言ってサディナが俺とラフタリアに目を向ける。
今のうちに何とかしろってことか。
どうも目を見るだけでサディナの意図がわかるようになってきた自分に呆れる。
……こういう時に一番効く攻撃ってなんだ？
結界を発生させたようなものだよな？
で、俺達の武器は機能不全……スキルも使用不能みたいだし、単純に技とかの駆け引きで行くしかない。
「ラフタリア、やれるか？」

「戦うこと自体はいつでも可能です」
ラルヴァやその部下、サディナ達が襲い来る敵を抑えてくれているが不利な状況は変わらない。
敵はラフタリアの命を狙っているし、俺は盾が機能不全で、戦えなくはないが守ることしかできない挙句、スキルが使用不能。
魔法も一部使用不能で、こんな時にできることといったらそこまでない。
「偽者の天命め！　お命頂戴！」
「させるかよ！」
襲い来る敵の刀を盾で弾き、胸倉を掴むと、反射的にラフタリアが素早く斬りつける。
魔竜の盾の反撃効果、C魔弾は作動するようだけど、威力は雀の涙ほどに下がっている。
反撃も難しい。
ラースシールドに頼るのは危険だし、結局は盾に頼り切った戦い方だ。
何か……もっと他に手はないか？
スキルが使用できないとなると途端に俺自身の問題が露呈するな。
ここは改善しないといけない点だ。

「その身に受けよ！　偽者の天命と悪しき精霊具の所持者共！」

クマ獣人の配下であるカエル獣人とその仲間が俺達に向かって魔法を放ってきた。

「ドライファ・アクアスラッシュ！」

「ドライファ・ロックブラスト！」

高圧縮された水と岩の同時攻撃が一直線に俺とラフタリアに向かって飛んできた。

その時、メルティに魔法で不意打ちされた時のことを思い出す。

俺の盾は壊れることはない。

強力すぎる場合、貫通して俺がダメージを受けることはあってもだ。

そして俺はメルティの魔法攻撃をどうやった？

「受けるかよ！」

盾を構え……盾に意識を集中して気……まだ使い方を完全に理解したわけじゃないが、なんとなくで気を込めて思い切り振りかぶった。

奴等の魔法が俺の盾に当たり、角度を変えて辺りに飛び散る。

その方角を……調整するんだ！

意識して、サディナと死闘を演じているクマ獣人がいる方向へと弾き飛ばした。

「おりゃあ！」

「なに!?　く……」

「おっと、逃がさないわよ」
　サディナが避けようとしたクマ獣人を捕らえ、魔法に対する盾にする。
「ぐあああああ!?」
　これで多少はダメージが入っただろう。
「あは、ナオフミちゃん面白いことをするわよね」
「できると思ったからやったまでだ」
「魔法を弾いて、利用した!?」
　だが、クマ獣人は負けじとサディナを押し返す。
「ふ……お前等はよくここまでやった。予想外だったぞ」
　笑っちゃいるが、怒ってるのはわかるからな？
　何を企(たくら)んでいるんだ？
「外界のお前等はこんな技術があるのを知っているかな？　桜天命石の力を引き出せし者に許された秘技を」
　ラルヴァがクマ獣人の方を見て青ざめる。
「まさかそこまで許可されているというのか!?　ラフタリア様！　盾の勇者様！　お下がりください！」

「もう遅い！」
　クマ獣人が叫ぶと同時に、魔法を詠唱していた連中が祈るように手を合わせる。
『天命様、調停者の代行の施行を致します。己の全てを刃（やいば）に変え、我と汝（なんじ）が力を合わせ、愚かなる者に滅びの運命を授けん！』
「アストラルエンチャント！」
　クマ獣人の持つ十字槍に敵全員の体から何かが集まって宿る。
　その代償に……周りの連中が倒れ始める。
「な、何が……」
「ふ、勝敗は決したようなものだ！　受けるがいい！」
　クマ獣人がそう言うと同時に、その姿がふっとぶれて俺達のほうへ加速してくる。
　盾の機能が落ちてはいるが……まだ対処できない速度じゃない！
　軌道を読んで相手の攻撃を受け止める。
　幸いなことに相手の十字槍は俺の盾で受け止めることに成功した。
　後は槍の刃の付いていない柄を掴み、絶対に離さないとばかりに力の限り握りしめる。
「その程度か！」
　だが、敵は何倍にもなったかのような力で槍を振りかざす。

俺は敵の力に振り回されて壁に打ちつけられるが、手を離すわけにはいかない！
どんだけ強い力を宿してんだコイツ……もはや霊亀にも勝てるんじゃないのか？

「ナオフミ様！」

「いいから攻撃に備えろ！」

「は、はい！」

ラフタリアは刀を持って構えに入ったっぽいな。
対処が早くて助かる。

「お姉さんを無視しちゃいやよ！」

「こちらも忘れられては困る！」

その場にいた全員でクマ獣人を押さえつけようとしたが、全く動きを止められない。
盾で押さえて致命傷は避けているが……いつまでもつやら。

「何なんだコイツ！　さっきの魔法の所為か？」

「はい。先ほどの魔法はアストラルエンチャント……天命様の高度の祝福を受けた相手に祝福を受けた者が己の能力を全て付与し、守る特殊兵装魔法です」

ラルヴァがそんな説明をしやがる。

「まさかそこまで高度の祝福を受けているとは思いもしませんでした」

しかし……それって聞き覚えがあるフレーズだな。
この前、俺がフォウルに授けた能力に似ているような……？
「お姉さんが行くわよ！　ナオフミちゃんお願い！」
「ああ！」
俺は地面に足を置き、深く腰を落としてクマ獣人の攻撃を押さえつける。
もって数十秒が限界だ。
その後はブンブンと振り回される。
「く……往生際の悪い！」
サディナが雷を銛に纏わせてから、思い切り足を踏み込んでクマ獣人を突く。
ゴスッといい感じにクマ獣人に命中……したはずなのに、まるで薄い流星盾を纏ったかのように銛が膜に阻まれる……。
「うぐ……硬いわねー」
そう言うのとほぼ同時だっただろうか。
周りにいる敵の部下の口から血が滴る。
「おのれ……よくも同士達を傷つけたな」
生命力すらも共有状態にあるってことか。

何人分もの能力を合わせればそりゃあ優秀な戦士になる。
その時ラフタリアが刀に魔力を溜め切った。
「八極陣」
ん？　バチバチとラフタリアの周囲に、まるで妨害するかのように魔法陣が浮かんでいる。
「大丈夫か!?」
「はい……桜天命石の力なのかもしれませんが、邪魔をしようとしてます」
「行けるか？　無理はするなよ」
「問題ありません、振り切ります！　皆さん避けて！　天命剣！」
居合斬りの要領で素早く抜刀したラフタリアの刀の光が一直線に波紋となって飛んでいき、相手の全てを斬りつける。
「受けるものか！　精霊具の持ち手が受けるがいい！」
俺をラフタリアの技の盾にしようとクマ獣人は槍を振りまわす。
「おっと」
槍から手を離し、呆気に取られたクマ獣人の背中に回り込んで、羽交い締めにして命中させた。

「うぐ……」
ま、他のみんなは屈んで避けたんだけどな。
「ちょこまかと！」
ダメージの方は辛うじて受け切っているが、かなり痛いのは確かだ。
当たりどころが悪かったら死ぬ。
これまでの経験……主にアトラとの訓練が生きている。
俺自身を狙った攻撃なら避けることができるし、ラフタリア狙いなら俺が足を引っ張って妨害可能だ。
だが、こんな化け物をどうやって止めるんだ？
もっと強い奴がいると考えると先が思いやられる。
そう思った時……桜光樹に八極陣天命剣を放った時に浮かぶ紋様が出現する。
「あれは!?　ガエリオンちゃん！　桜光樹に触れて！」
サディナが背中に乗っかって援護をしていたガエリオンを掴んで、投げつける。
「我の扱いが粗いぞ！」
そう言いながらガエリオンは、桜光樹の紋様が浮かんでいるところに飛びつく。
「ふむ……なるほど、こうか」

首に巻いたしめ縄が合わせるように光る。
するとクマ獣人が纏っていた何かが弱まったように見える。
「く……桜天命石の力が霧散していくだと⁉」
桜光樹ってのはそんな力もあるのか。
その桜光樹を占拠して相手の弱体化に成功した。
「どうやら、その便利な力を弱体化させることができたな」
更にガエリオンはアクセスを続ける。
「外界を遮っている結界設定の解除は終わった。しばらく操作は受け付けられないようにした。後はそいつらの討伐だけだぞ」
いいことなのか？
目的は達成したが敵の討伐はできちゃいないぞ。
その時……。
「これを使え！」
俺達の背後から何かが投げつけられる。
それは幾つもの物の影……咄嗟に受け止めたその時、盾が再度スパークした。

十五話　桜陣結界

ウェポンコピー作動。

桜天命石の盾の条件が解放されました！

桜天命石の盾　０／100　C
能力未解放……装備ボーナス、精霊拘束限定解除１　封印耐性（弱）　スキル『桜陣結界』
専用効果　精霊の加護　ステータスチェイン　桜力光
熟練度　０

その盾は今まで見たどの盾よりも作りこまれた、よくできた盾だった。
形状は陰陽のタオみたいな球体に桜の花を散りばめた装飾をプラスし、中央には俺の盾みたいな宝石が埋め込まれている。
桜の花弁がうっすらと浮かぶ……不思議で綺麗な宝石だ……魔法的な意味もありそう。

もしかしてこれが桜天命石ってやつなのか？

持つだけで基本性能が高いのがわかる。

なんだこれ？　今までこんな経験をしたことなんてないぞ。

コピー元の盾自体にこんな感覚を覚えたことはない。

コピーすると同時に項目が出現する。

スキル
魔法
ステータスボーナス
成長補正
熟練度
エネルギー付与
レアリティ
精錬
スピリットエンチャント
ステータスエンチャント
強化
アイテムエンチャント

ジョブLv
残り4

この項目全てが暗くなっていて、スキルを選ぶと項目が明るくなって「残り4」が3に減る。

……これは間違いなく桜天命石が発する勇者の武器の封印効果を解除する効果だ。

装備ボーナスの精霊拘束限定解除1の効果と見ていい。

俺は迷いながらスキルと魔法、ステータスボーナス、成長補正の項目にチェックを入れて決定を指示する。

すると盾が再度スパークして力が湧いてくるのを感じた。

難点は、この盾の能力が未解放なので別の盾にすることはできないことだが……。

再度ステータスを確認すると盾自体の能力に変動が掛かっているのに気付いた。

おそらくステータスチェインという専用効果のお陰だろう。

手持ちの素材で強化は……できそうにない。

封印状態だしな。

「お前は!?」

クマ獣人が俺達に武器を投げ渡した……後から来た奴……ラフタリアをナンパしていた奴を見て驚きの声を上げる。

なんだ？

というかこの盾や刀……他にもいろんな武具を、その場にいた俺達に協力してくれる連中に投げ渡している。

「それを使えば多少は桜天命石の結界内で能力が上がるぜ？」

「そ、そうか！」

各々武器を握りしめ、クマ獣人に向かって構える。

それはラフタリアも変わらない。

が、勇者の武器はコピーできても装備はできない。

だから手近にいる味方に受け取った盾を投げ渡した。

「これで多少戦えるようになりました……今度こそやります！」

「あら？　お姉さんも何か元気が出てきたような気がするわね」

「ふむ……汝の成長補正の力が多少回復したぞ」

敵はまだ倒せていないが状況が好転したのは間違いない。

この勢いで畳みかける！

「貴様！　裏切るのか！」
　クマ獣人が、ナンパ野郎に向かって怒鳴る。
「裏切る？　いやいや、勘違いしないでくれよ。金に困っていたところに頼まれたから作ったのは事実だ。だが、愛国心はある」
「ならばなぜ異国の邪神と偽りの天命に力を貸す！　返答によっては万死に値する！」
　果てしない殺気を放ってクマ獣人は俺達の背後にいるナンパ男を恫喝する。
　が、ナンパ男はどこ吹く風といった様子で両手を見せて答える。
「わからねえのか？　あのな……よく考えてみろよ」
　そして、ガッと一歩踏み出し、拳を強く握りしめて叫ぶように答えた。
「小便臭い糞ガキと美・少・女！　どっちの天命様を信仰するかと言われたら、美少女に決まってるだろうが！」
　ナンパ男の力の限りの叫びが辺りに木霊する。
　辺りの空気が不自然に静かになった。
　みんな黙りこんでナンパ男を見ている。
　空気を読めないのか？
　つーか堂々と何を言ってやがる、この野郎は？

それから唖然としている俺達の前でキザったらしく……うん？　元康が初めてラフタリアに会った時と似たようなポーズを取って、ラフタリアに近づいて手にキスをした。

「先ほども会いましたね、お嬢さん。どうやら窮地だったようなので力になれるよう武器を貸します。どうか横暴な国家の犬をそれで斬り殺してください」

紳士を気取ってるのかもしれないが、育ちの悪さが露呈してるぞ。

斬り殺してください、じゃねぇよ。

「は、はぁ……」

なんかすっげーイラッとするけど、俺達に多大な援助をしてくれてるから文句は……言うに決まってるだろ！

「何してんだお前は！」

「む！　そこにいるのは先ほどのお嬢さん。獣人姿も麗しい」

「あら？」

うわ……獣人状態のサディナすらナンパするとかスゲー……さすがの元康も壊れる前にはフィロリアル姿のフィーロはナンパしていなかったというのに。

似てるけど、上位互換的なものを感じる。

で、呆気に取られていたクマ獣人がみるみる震え、顔を真っ赤にして叫んだ。

「このうつけ者がぁあああああああああああああああああ！」

重戦車みたいな勢いでラフタリアとナンパ男に突進しようとしているクマ獣人を遮るように立って、俺は盾を向ける。

そして試しに叫んでみた。

「エアストシールド！」

桜天命石の結界の所為で作動しなかったスキルが……俺の目の前に発生する。

「ふん！」

そんなもの造作もないとばかりにエアストシールドは切り裂かれる。

けれど、今までのように無抵抗ってわけじゃないのが、クマ獣人の武器から火花が散ることでわかる。単純にステータスが足りないから破壊されたに過ぎない。

ならばすることは一つ！

「セカンドシールド！　ドリットシールド！　チェインシールド！　Ｅフロートシールド」

二枚の盾を出現させ、チェインシールドで盾を動かして鎖で拘束、フロートシールドを動かして相手の視界を塞ぐ。

「ぬるい！」

クマ獣人は縛られたところで強引に鎖を引きちぎりにかかる。
というか……さっきよりも動きが遅く見えるぞ？
ステータスチェインってやつのお陰か？
「天命様のためにこの隙を逃すな！」
ラルヴァ達が一斉に各々の技や魔法をクマ獣人に仕掛ける。
中には動きを阻害するために、能力ダウンや氷で拘束する魔法をクマ獣人に掛けている者もいる。
仲間の力を全て一点に集結させたのが仇となったな。
クマ獣人の仲間は既に倒れていて援護すらできない。
「ラフタリア」
「なんですか？」
「能力が上昇している相手に効果のあるスキルや技があるよな？　もう使えるようになったか？」
アトラの得意としている攻撃手段だ。
俺はまだ対処方法を学んでいる最中だが、ラフタリアはここ最近、アトラと勝負をしていてある程度の習得段階にあるはずだ。

「はい。師匠やアトラさんほどじゃないですが、できます！」

俺の指示にラフタリアは構える。

「よし！」

ここは単純にステータスが必要だ。

サディナを手招きし、合唱魔法に入る。

龍脈法を習得した俺は、合唱魔法の詠唱がかなり速くできるようになってきた。

「ガエリオン、お前も手伝えよ。補佐できるのは知っているんだからな」

「やれやれ……やるしかないか」

ガエリオンの首輪となっていたしめ縄が光った。

俺の視界にパズルのピースが浮かび上がり、凄い速度で組み上がっていく。

それでも一人一人やらねばならないことは多いがな。

「ふん！」

クマ獣人が妨害の魔法を力技で跳ねのけて素早く走りながら槍をラフタリアとその後ろに立つナンパ男に向けて振りかぶる。

俺は詠唱を終えてからラフタリアを守るように前に出た。

ラフタリアの方は刀に気を流し込んでいるようだ。

「死ぬがいい！　邪神と偽りの天命、そして裏切り者共ぉおおおおおお！」

「流星盾」

「うお！　なんで俺まで!?」

バキンと展開させた流星盾はクマ獣人とナンパ男を突き飛ばし、僅かな隙を作り出す。と、同時に俺は完成した魔法を発動させた。

「雷神降臨！」

もちろん、指定するのはラフタリアに決まっている。

「行きます！」

渡された刀をコピーしたラフタリアが、流星盾が破壊された衝撃の光で目が眩んでいるクマ獣人に向かって突く。

「変幻無双流……点！」

ずぷっと膜のようなモノを貫き、クマ獣人の内部にラフタリアが練り込んだ気が放たれた。

「うぐ……まだまだ！」

タフな野郎だな！　さすがはクテンロウの武人ってところか？

サディナみたいな奴等がごろごろいるような国だしな。

クマ獣人に力を渡していた連中が血を吐く。

「お姉さんを忘れちゃ困るわよ」

サディナが一緒に軽く飛び上がり、雷神降臨で発生した雷雲を再利用してナンパ男から受け取った槍に落とす。

「雷撃銛（もり）！」

雷を纏（まと）った槍がまるで蛇のようにうねりながらクマ獣人に命中する。

「ぐあああああああ!?」

それでも倒れず、雷を纏いながらラフタリアに槍を向けた。

「まだです！」

ラフタリアがハイクイックしたようにぶれながら刀を振りかぶる。

「新しいスキルを試します！」

「俺を忘れるなよ！」

新しく出現したスキルを作動させるために、俺が叫ぶ。

「桜陣結界！」

俺を中心に足元に桜を模した魔法陣が浮かび上がる。

なんだ？　それ以外に変化がない？

ゴミスキルか？　しょうがない！
「アタックサポート！」
ラフタリアの攻撃を補佐するためにダメージ倍化スキルのアタックサポートを放つ。
すると投げた瞬間、アタックサポートの棘が五枚の桜の花びらとなって、狙っていたクマ獣人に命中する。
「うぐ!?　な、なに!?」
スキルに変化を掛ける魔法陣を設置するスキルか!?
前提が面倒なスキルだな！
だが、クマ獣人に桜の花びらが纏わりついて体を縛り上げる。
ちょうど破壊されたチェインシールドのようにな。
しかもご丁寧に桜の花の形に縛り上げた感じだ。
相手を拘束する効果付きとか、かなり便利だ。
「行きます！　桜神楽一ノ型・開花！」
ラフタリアがクマ獣人の横を駆け抜けざまに、大きく刀を薙ぐ。
パァアアアッ……とクマ獣人を縛り上げていた桜の呪縛が砕け散る。
そして、クマ獣人を中心に光と共に桜吹雪が巻き起こる。

　その時に発生した魔法陣はラフタリアが八極陣天命剣を放つ時と同じ紋様だった。
「な……ぐ……うぐうううまだだ！　まだ倒れるわけにはいかん！」
「チッ！　タフな野郎だな！」
　これだけの猛攻を受けながらどれだけ抵抗するんだよ！
「終わりだ！　偽りの天命！」
　クマ獣人がラフタリアに向かって槍を振り下ろす。
「させるかよ！」
　ラフタリアを守るために俺は飛び出してそれを受け止める。
　先ほどのような重さがない。
　耐えきれるぞ！　間違いない！
　というところで盾が光を放つ。
「ぐあ!?」
　桜天命石の盾の専用効果、桜力光が作動したのか？
　なんか体に更に力が入るような気がする。
「これは……もう一度行けると思います。ナオフミ様！」
「ああ！」

ラフタリアが刀を鞘に収め、居合斬りの構えを取る。
「凄い……ナオフミ様の放った魔法陣と先ほどの光で必殺技の準備がすぐにできます」
「ぐぬ！　どこまでも抵抗を！」
「ふむ……どうやら俺達の力を強め、お前の力を弱める効果があるようだな」
俺はクマ獣人の強大な力を抑え込んだ。
「お姉さんとガエリオンちゃんや、みんなを忘れちゃダメよ！」
サディナも負けじとガエリオンと合唱魔法に入った。
「ガエリオンちゃん。水竜様の力を少しは借りてるんでしょ？　がんばって！」
「うむ……少々面倒だが、ここが踏ん張りどころだな。では行くぞ！」
『閉ざされた天命の地、古き淀みを押し流す清流のような思いを、世界を救う願いを力に。龍脈よここに奇跡を願う』
『我、ガエリオンが天に命じ、地に命じ、理を切除し、繋げ、膿みを吐き出させよう。我の力よ我が前に居る愚かな使徒を絶つ力を呼びさませ！』
サディナとガエリオンが合唱魔法を終えて発動させる。
『『水竜桜光滅波！』』
ガエリオンが小さな水の竜みたいに変身し、高密度の水を吐き散らし、サディナがその

流れに乗っかって水竜を形作ってクマ獣人へと突撃する。
もちろん俺ごとだけど、突撃すると同時に俺を掻っ攫って退却。
「ぐああああああああああ！」
水の竜巻がクマ獣人を閉じ込めて締めあげる。
さすがに高密度の竜巻が相手では、クマ獣人もなす術もないようだった。
「いきます……サディナ姉さんから教えてもらった流派と変幻無双流との合成技……」
ラフタリアがクマ獣人目掛けて跳躍し、力を込めて大きく斬り裂く。
「太極陣……天命斬！」
スパンと、ラフタリアは素早くクマ獣人に斬りつけた。
バサアッと水竜巻が弾け飛ぶ。
「は……？」
クマ獣人が無事に地面に着地してホッと胸を撫で下ろすと同時に、ラフタリアを嘲笑う。
「大層な技を放っておきながら不発とは、天命を語るに落ちたな」
「いえ」
ラフタリアはクマ獣人に背を向けたまま、その背に向けて槍を振りかぶるクマ獣人に答える。

「あなたに力を与えている流れを切りました。それ以上力を出すと……自爆しますよ？」
「戯言を！　くら――」
と、クマ獣人が足を一歩踏み出すのとほぼ同時だっただろうか。
クマ獣人の胸に陰陽のマークが浮かび上がり、その体を包み込む！
「ぐあああああああああああ！」
「その力は与えられた力とあなたの力……その両方がぶつかり合っているんですよ。じきに解除されます」
効果時間は一〇秒ほどだっただろうか。
クマ獣人を包んでいたものが霧散するが、同時にクマ獣人は槍を杖のようにしてもたれ掛かった。
「馬鹿な……アストラルエンチャントと桜天命石の加護が……」
「はい。見えたので繋ぎ合わせて消滅させました。もはやあなたに掛かった祝福はありません」
「さ、さすが……当代の天命様……」
傍観していたラルヴァが呟く。
「認められるものかぁあああああああああ！」

それでも諦めずにクマ獣人が槍を振りかぶったが、動きに先ほどのキレは全くない。

「これで終わりです！　スターダストブレイド！」

トドメとばかりにラフタリアは星を煌めかせて切り裂くスキル、スターダストブレイドでクマ獣人に斬りつけ、刀を鞘に収めた。

「私達の勝ちです。もはや勝負は決しました」

「く……まだだ。たとえ拙者が倒れようとも政府がお前等を許さん……お前達はもう終わりだ」

「残念だが、これまでそういったふざけた連中を仕留めてきたのが俺達なんでな。政府？お望み通り……ぶっ潰してやるよ！」

高らかに俺が宣言するとクマ獣人は忌々しそうに前のめりに倒れた。

直後、歓声が上がる。

政府を転覆させるために俺達の仲間に加わった者達の勝ち鬨の声だった。

「勝った！」

「これは小さな一歩だが、拙者達には大きな一歩となった」

「愚かな法律を施行する政府に一矢報いたんだ！」

おおおおおおおお！

と、その場にいた者達は勝利の声を上げる。
どうにか勝ったが……これまでにないくらい厄介で奇怪な連中だった。
仲間の能力を一人に集中させて能力を上昇させ、勇者の力を封じるなんてどんだけ強いんだよ。
これでクマ獣人がシルトヴェルトの重鎮共みたいな上位種族じゃないんだったら泣けるぞ。
この先が思いやられるな。

エピローグ　武器屋の親父の師匠

「やりましたね、お嬢さん」
ナンパ男がラフタリアに駆け寄ってくるので俺は流星盾を展開して遮る。
「無粋な野郎だ。俺が手を貸さなかったら今頃どうなってるかわかってんのか？」
しかも人によってコロコロと態度を変える。
不快そうに俺を睨(にら)んでいるが知ったことじゃない。

「そんなに女が好きならそっちにいるシャチ女を貸してやる。存分に遊ぶがいい」

「ナオフミ様、サディナ姉さんをそんな便利な女みたいに……」

「あらー」

俺の言葉にナンパ男はゴクリと唾を飲み込んでサディナに視線を向ける。

コイツ、ホント女なら何でもいいんじゃないか？

「あらー？　さすがにそれはナオフミちゃんと楽しいことをしてからに決まってるじゃない。まずは楽しくお酒を飲みましょうよー」

「好きにやっていろ」

「戦勝会よー！　お姉さん、一番良いお酒が飲みたいわー！　ナオフミちゃんにはルコルの実をお願いするわよ」

「あの悪酒が好みなのか？　異国の神様は悪趣味だなぁー」

ラルヴァの部下がノリで言い放つ。

「そうよ！　なんとナオフミちゃんはルコルの実を直接食べることができるのよ！　凄い(すご)でしょ！」

大興奮で我がことのように自慢するサディナに、周りの連中はげらげらと笑い始める。

「ははは！　さすがにそれは盛りすぎだぜ。異国の神っていってもそりゃあねえよ」

「酒の神ですら裸足で逃げ出す悪酒の実を直接食べられる？　そんな奴がいたら見てみたいぜ」
　そこでラフタリアが頬を掻きながら呆れ気味に呟く。
「戦勝会でサディナ姉さんとナオフミ様が何を仕出かすのか簡単に想像できますね」
「まったくだな」
　その隣に浮かんだガエリオンが腕を組んで同意する。
　何か知らんがそんなに怖いものか？
　まあ……大体青い顔して逃げられることの方が多いけどさ。
　サディナは俺のこの部分が気に入っているだけだし。
「どっちにしても船のみんなを迎えに行かないと」
「そうだな。それがここに来た目的だしな」
「ではこれから拙者達は政府に反旗を翻し、真なる天命様がいることを宣布して、船を迎え入れるのだ！」
「「おおー！」」
「ささ、お嬢さん達、宴を楽しみましょう」
　ナンパ男がしつこくラフタリアとサディナを誘惑している。

いい加減ウンザリしてきたぞ。もうこの際黙らせるか。
「シールドプリズン！」
「な、何をする!?　この――」
ナンパ男を盾の檻に閉じ込める。
さすがのラフタリアもナンパにウンザリしていたのか止めない。
サディナの方は……シャチ獣人姿でスキップしながら俺に飛びかかってくるな！
「ナーオフーミーちゃーん！　お姉さんナンパされちゃったー。妬いてる？　ねえ妬いてる？」
「何を焼いてんだよ？　カエルの焼き物か？　それともパイか？」
こちらも面倒なので適当に返しておく。
「あらーそっけないナオフミちゃんも素敵よ」
「何がだよ」
「とにかくーお姉さんはナオフミちゃん一筋なんだから、あんまりそっけないこと言っちゃ悲しいわー」
「全然悲しそうに聞こえんがな。それ以前に酒という文字が見える」
サディナの顔と背後には酒の文字が浮かんでいるぞ。

「あら？　ばれちゃった？　ささ、楽しい楽しい戦勝会のためにみんなを出迎えに行かなきゃね」
「はぁ……本当、どうしてこんな所まで来てしまったんでしょうね」
「嘆くなって、ラフタリア。お前の出生の秘密と、国が手に入るんだぞ？」
「お父さん達がどんな環境で育ってきたのか興味はありますが、私は村で平和な日々を過ごせれば満足ですよ……」
ラフタリアは欲がないな。
まあそれがいいところなんだけどさ。
「どっちにしてもラフタリアは領主代理の役目を背負うことになるかもしれないし、今のうちに色々とコネを作っておくのが後々のためだ」
波の脅威が消え去った時、俺は日本に帰るんだ。
村だってラフタリアのために開拓しているようなものだし……な。
「……」
そんな俺の言葉をなぜかラフタリアは無言で聞いていたのだった。
「じゃあさっさと行くか。クテンロウの港町は占拠したんだ。後は……ここを拠点に着実に戦力を集結させて国家を乗っ取るだけだ」
フフフフ……と笑っているとラフタリアは呆れた目を向けてくる。

「……いい加減、この国の問題は解決した方がいいのは確かですからね。じゃあ、ここで無駄話をしていないで行きましょう」

「おう！」

　というわけでナンパ男を置いて俺達は勝利の凱旋をしながら港の方へと移動していったのだった。

　港町ではラルヴァの指示で政府の立てた看板は撤去されていた。巫女服を着たラフタリアを筆頭に大通りを進んでいく。

　クテンロウの国民はラフタリアの巫女服姿を見て、何やら確信染みたものを感じるのか、みんな深々と頭を下げている。

　もちろん、威光に背く連中もいるようだけど、この町を強引に占拠していた政府の役人が倒された今、それを声高に主張するのは自身の首を絞めることになる。

　厄介な争いに巻き込まれたくない者は町を出ていき、逆に政府の威光に逆らう者が港町に集まってくるのは自然の流れだな。

　なんて先の話はおいて、俺達は入港したシルトヴェルトの交易船を出迎える。

「あ、ごしゅじんさまー！」

「ラフー！」
ラフちゃんを頭に乗せたフィーロが船の上から手を振ってこっちに下りてくる。
おお、ラフちゃん。離れていたから少し寂しかったぞ。
この国の連中にラフちゃんの魅力を思い切り広められたらいいな。
ラフタリアの巫女姿をあんなにも信仰しているんだ。
ラフちゃんに巫女のコスプレをさせても喜んでくれるに違いない。
共感者が欲しい！
「あの、ナオフミ様？　何を考えているんですか？」
「尚文(なおふみ)様ー！」
アトラも同様……壁歩きをして船から下りて俺に飛びかかってくる。
なんだそのアクロバットは。
「アトラー！」
フォウルは負けじと飛び出そうとして海へ落ちた……なんか可哀想だな。
「ふえええ！　ナオフミさん心配したんですよ」
「そうですね」
リーシアと樹(いつき)が順序良く船から下りて俺達の方に駆け寄ってくる。

樹、お前は心配しているように見えないぞ。
「ラフちゃんが事情を説明したと思ったんだが？」
「はい。フィーロさんの口から、なんとなく無事でクテンロウに先に入ったとは聞きました」
「そっちの方は大丈夫だったのか？」
「時々襲撃者が来ましたね。ラフタリアさんがどこへ行ったのか、捜しているようでした」
ま、既に入国済みとは思わなかったってことか。
「樹、十分注意しろよ。この国はどうやらポータルが使えないみたいだからな」
「ええ、では錬さんをどうやって招きましょうか？」
「かなり面倒だが、船で一度戻って連れてくるしか……ないか？」
「村の警護もありますし、僕達だけで挑むのも手ですよ」
そうなんだがな。
今頃セイン辺りが心配してそうな気がする。
いつでも駆けつけられると思っていただろうから、転移できないのは厳しかろう。
ま、俺が現場を離れるのは難しいし、船での入国も結構危ないからどこかに龍刻の砂時計がないか探してからでもいいか。

アトラや樹達も加われば、あのクマ獣人みたいな連中が来ても、もう少し戦えるようになるだろうしな。

「よ！　アンちゃん。無事を確認できてよかったぜ」

そこに武器屋の親父が船から下りてきた。

「ここがクテンロウって国か……」

「色々と変わった文化があるみたいでな。親父も勉強になると思う」

親父の専門かどうかわからないが、この国の初めて見るものの数々を分析してもらえるとありがたいな。

そんな話をしていると、ナンパ男が憤慨しながら俺達の方へ走ってきた。

「いきなり何するんだ、お前は！」

「ラフタリアをナンパするからに決まってるだろ。お前のような奴が触れたら汚れる」

「なんだと！　美少女に近寄ることすら禁止する気か！　お前は何様だ！」

「ラフタリアの親代わりだ。何度だって言おう。お前のような奴に可愛い娘みたいな子を渡すもんか！」

「なんだとう！」

俺とナンパ男が睨み合いをしていると、隣にいた武器屋の親父が驚きの表情でナンパ男を指差した。

「師匠！」
「あ？」
はい？
俺は訝しんで武器屋の親父とナンパ男を交互に見る。
「アンちゃんの領地を襲撃した連中の持っていた武器が師匠の作ったものだと一目でわかってたけど……なんでクテンロウに来ていきなりアンちゃんの近くにいるんだ！」
「あー……ああ！　お前、よく見たらエルハルトじゃん。久しぶりだな。元気してたか？」
ナンパ男は武器屋の親父をマジマジと観察した後、思い出したように手を叩いて親しげに声を上げる。
「元気にしてたが……師匠、まずは俺の質問に応えてくれてもいいだろ！」
若干不愉快そうに武器屋の親父がナンパ男に詰め寄る。
「ちょっと待て、親父。このナンパ野郎が親父の師匠なのか？」
そういや親父が教えてくれた武器作りの師匠の話を思い出す。
なんだったか？
「腕は良いが、ものすごい女好きで、遊び好き、借金こさえて蒸発した馬鹿だったか？」
「アンちゃん。言った俺も俺だが、纏めるなよ」

「んだと？　まあ女が好きなのは認める」
特徴を纏めると目の前の本人と一致することが多いな。
だが……できれば会いたくないタイプの人種なのは確かだ。
「コイツ、潜入活動中の俺達……ラフタリアとサディナにいきなりナンパを仕掛けた挙句、戦闘中にこの国の政府を裏切ったぞ」
「あー……師匠らしいな」
「ふ……」
いや、何かっこつけてんだよ。自慢にならねえよ！
「まさかこの人なんですか？」
ラフタリアも嘆くように聞く。
そうだよな、できれば関わりたくないよな。
女好きに碌な奴はいない。
「で？　どういった経緯で俺の村を襲撃した連中の武器をお前が作ったわけ？」
「そりゃあこの国が俺の地元で、見聞を広げるためにクテンロウを飛び出して鍛冶業をしながら諸国漫遊をしてたのに、親父が死んで国に強制送還されて、クソつまらねー今の糞ガキの天命の親に鍛冶を命じられてたからに決まってるだろ。挙句、親が死んでも糞ガキ

の政権が続くしよ」
ナンパ男改め、親父の師匠は愚痴る。
要約するとコイツはクテンロウ出身の良い家の鍛冶師らしい。
生まれつきの才能か、種族の資質か、類稀なる才能を持ったコイツは女好きで世界各地の女性と親しくしたいと家を飛び出して好き勝手していたけど、親が死んで家業を継ぎ、国が指示するままに武具の製作をしていたと。
国のお抱え鍛冶師って随分と偉そうなポジションにいるように見えるんだがなぁ。
「おー！　幼女！」
親父の師匠が今度はアトラとフィーロを見て声を掛ける。
節操がないな。それにしたって幼女はねぇだろ。
「なんですか？　私に用ですか？」
「んー？」
「お嬢さん達、俺と一緒にお茶をしませんか？」
「生憎と興味ありませんわ。私は尚文様とお茶がしたいです。そのままで勢いで……」
「んー？　ごしゅじんさまー、この人、前の槍の人みたい」
「フィーロは物事をよくわかっているな。どうする？」

「えっとねーメルちゃんがこういうことを言う人は相手しちゃダメだって言ってたー」

メルティの方がフィーロの教育をちゃんとしてくれているな。

そしてアトラ、お前はドサクサに紛れて何を言っている。

「えっとーフィーロはメルちゃんとごしゅじんさまがいるからダメーってメルちゃんに教わってるのー」

と、フィーロが俺を指差す。

「く……まさかお前、ハーレムを作っているのか！」

親父の師匠が悔しげに俺を指差す。

何を言っているんだ？

ハーレムぅ～？

この俺が？　くっだらねー！

「反吐が出る！」

まさか俺がハーレムを作っているとでも？

誤解もいい加減にしてほしいな。

ラフタリアは俺が親代わりをしてやっているだけだし、村の連中もそうだ。

フィーロにとっては飼い主で、メルティは仕事仲間、サディナは勝手に俺を恋人扱いし

てるだけだろ。

アトラ？　これもサディナと同じく勝手に俺に付き纏ってるだけだな。

本当は奴隷だ。それも戦闘奴隷な。

「あの……ナオフミ様にそういう話はできる限りしないでください」

イライラしてきた。

「そうだぜ。師匠、できればアンちゃんにはそういう話題は避けてほしい。じゃねえとアンちゃんの機嫌がどんどん悪く……」

「じゃあお前の女を俺がナンパしてもいいよな？」

「尚文様を不愉快にさせるのは貴方ですね。報いを受けるのですわ」

アトラが親父の師匠を突く。

「ぐあああ!?　ら、乱暴なお嬢さんだ！」

うわ、タフな奴だな。

「アトラに何をする気だ！」

「野郎が何をする！」

フォウルの拳を紙一重で避けて親父の師匠は距離を取った。

避けられるならアトラの攻撃も避けろよ！

「俺は可愛い女を愛でて、楽しみたいだけに決まってるだろ！」
「武器作れ、鍛冶師」
「うっせー！　そんなのは気が向いた時にするに決まってんだろ！」
　どこまで自分勝手なんだこの野郎。
「ああ、師匠。アンちゃんの機嫌を良くする方法があったぜ」
「あ？　なんでコイツの機嫌を良くしないといけねえんだ？」
「師匠を増長させるかアンちゃんの機嫌を良くするかだったら、アンちゃんの方が遥かにマシだからだ」
「てめぇ！　エルハルト！　それでも俺の弟子か！」
「弟子だからこそ、師匠の暴走を止めなきゃならねえ。勇者の領地を襲撃する暗殺者の武器を作ってるなんてことを知られたら、こっちも困るんだ。この際、俺が師匠の面倒を見てやるからどうか一緒に来てくれねえか？」
　それってコイツがメルロマルクに来るってことか？
　こういう面倒な奴は近くにいない方がいいんだが……。
　親父の提案に親父の師匠は腕を組んで考え込む。
　ほんと、何なんだろうなコイツは。

「この天命様の派閥に付くのは既に決定事項だしな。この騒動が終わったら自由に諸国漫遊できるなら……悪い話じゃねえな！」
「そうこなくっちゃな！　師匠にはまだ聞きてえことが色々とあったんだ。ついでに教えてくれ！」
「ま、この野郎の近くにいりゃあ良い女と出会えそうな予感がするからいいぜ」
　というところで親父の師匠と親父が手を握る。
　が、その直後、親父の目が光ったのを俺は見逃さなかった。
　要するに上手く乗せたってことだな。こんな側面も親父にはあったのか。
　まあ……コイツが師匠じゃな。
「で、師匠……俺達に押しつけた借金、その他諸々の被害のツケ……払ってくれるに決まってるよな？」
「い!?」
　握手した手と親父の顔を交互に見た親父の師匠は、逃亡を図ろうとして親父に羽交い締めにされた挙句、縄で縛られた。
「つーわけでアンちゃん。師匠を生け捕りにできた礼を言うぜ」
「く！　離せエルハルト！　俺は、俺は自由に恋愛を謳歌するんだ！」

「その前にアンちゃん達に迷惑を掛けた分、働いてもらうぜ！　師匠の腕なら世界の危機だって経営の危機だってなんだって突破できると、俺は信じてるからよ」

「世界の危機より女に決まってるだろぉおおおおおお！　やめろ！　俺は、俺は遊びたいんだぁああああ！」

　親父は町の連中に鍛冶場の場所を尋ね、往生際悪く喚くナンパ男を連行していった。

　少し不安だが……親父が一緒なら大丈夫か。

「なんとも変わった方と親しくなりましたね」

「できれば関わりたくないがな。鍛冶師なんて親父かイミアの叔父で十分だ」

　あんな曲者を囲い入れるのはご免だぞ。

「とはいえ、助けてくれたのは事実ですよ」

「そうなんだよなぁ……」

　桜天命石の盾や刀……勇者の力を弱める力に対抗する武具の知識を持つ親父の師匠は、クテンロウの政府を打倒するためには必要不可欠に思える。

　かなり頭が痛い問題だが、受け入れるしかないか。

「さて、それじゃあ……今日はクテンロウ攻略の第一歩を踏み出したことと、みんなと再会できたことを喜ぶとしようか」

「はい……何か色々と厄介な日々が続きますけど、行くしかありませんよね」

「そうだな。ラフタリアの出生の秘密が解き明かされていくんだ。実は少し楽しいと思っている」

娘のように大切にしているラフタリアにどういったルーツがあるのかを知るのは……不思議と嬉しく思える。

既に亡くなった両親の話を聞くと可哀想だと思うけどさ。

「はぁ……じゃあナオフミ様のご家族の話とか血縁とかの話をもっとしてください」

「俺か？　俺はいたって普通の日本の家庭出身だぞ？」

といったところで冷静に考える。

よく考えればラフタリア達にとっては日本こそ異世界だ。

パソコンとか漫画とか……話してもピンとこないだろうな。

「私は興味ありますわ！　尚文様のご家族、血筋……その全てを知りたくてしょうがないですわ！　幼少時はどんなことがあったのか、初恋は誰だったのか、どんな物を食べて育ってきたのか、友好関係なども含めて、全て知りたいですわ」

アトラは論外。ぶっちゃけその反応はストーカーだろ。

フィーロには元康（もとやす）というストーカーがいるけど俺にはアトラか？

そのアトラにはフォウルというストーカーまがいのシスコンがいるけどさ。

……ここで俺がフォウルを可愛がったらアトラはしばらくフォウルの方に意識を向けるだろうか?

ふと、そう思ってフォウルを見つめた。

なんかフォウルがぞわっとした感じで背筋を伸ばして辺りを見渡している。

「な、なんだ? 鳥肌が……ん? 胸が……?」

ふむ……。

「複雑な恋愛模様ですね、イツキ様」

「そうですね。リーシアさんは好きなんですか?」

「は、はい……小さい頃から本を読むのは好きなんで、恋愛の物語は沢山読みました」

リーシアと樹は何を言っているんだろうか?

「ラフー」

「んー?」

俺はフィーロの頭に乗っかっているラフちゃんを撫でながら辺りを見渡す。

「とりあえずだ、これからの戦いに備えて、みんなゆっくりと休んでくれ。慣れない国かもしれないが、ラフタリアとサディナの故郷なんだ」

「そうねー。もっと自由に動けるようになったら、お姉さんの故郷をナオフミちゃんに見てもらいたいわ」
「それは国を支配してからって注釈が付いているように見えるんだが？」
「あら？　お姉さんは本気よー？」
はぁ……サディナはどこまで本気なのかわからない返答をする。
その時、俺達の近くに桜の花びらが舞い落ちてきた。
正確には桜の花じゃなくて、桜光樹の花びらなのだろう。
俺は咲き誇る桜光樹を見て、綺麗だと思った。
「綺麗な花ですね」
「そうだな……持ち帰れるなら村の近くに植えたいと思うくらいだ」
江戸時代にタイムスリップしたような不思議な国クテンロウ。
そこに咲く桜の花を見て俺は、日本の春を思い出していた。
いつか日本に帰ることができたら、日本の桜を見て、この時のことをきっと……思い出すのだろう。
そんな……大変な日々の中の穏やかな一ページのような日だった。

そう……もう少しの辛抱だ。
厄介な襲撃者を駆逐するまでな。
この先、かなり厄介な問題が転がっているのだとしても、メルロマルクの陰謀を跳ねのけた時のようにどうにかしてみせると決意を固めたのだった。

著者プロフィール

アネコユサギ

Aneko Yusagi

神奈川県出身。ゲームと読書好きが高じて、小説を書き始める。『盾の勇者の成り上がり』を執筆し、ネット上に作品を公開。作品発表後、連日欠かすことなく更新することで病み付きとなる読者が続出し話題となる。2013年8月MFブックスから商業デビュー。「書籍化によって頂いている期待に応えられるよう頑張ります！」と語る。

企画／株式会社フロンティアワークス
担当編集／今井遼介、大原康平（株式会社フロンティアワークス）
ブックデザイン／ragtime
イラスト／弥南せいら

本書は小説投稿サイト「小説家になろう」（http://syosetu.com/）初出の作品を加筆の上書籍化したものです。

盾の勇者の成り上がり 13

アネコユサギ

平成27年11月25日　発行

(C) Aneko Yusagi 2015
本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

ＭＦブックス『盾の勇者の成り上がり 13』
平成27年11月30日初版第一刷発行

発行者　三坂泰二
発　行　株式会社ＫＡＤＯＫＡＷＡ
〒102-8177　東京都千代田区富士見2-13-3
0570-002-001（カスタマーサポートセンター）
年末年始を除く平日10：00〜18：00まで

http://www.kadokawa.co.jp/

BOOK☆WALKER